
魔導姫譚ヴァルハラ-Mado kitan VALHALLA-

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導姫譚ヴァルハラ - M a d o k i t a n V A L H A L L A -

【Nコード】

N 2 6 2 9 L

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

魔導と科学はかつての栄光、世界はノアインパクトで洗い流された。

記憶喪失のケイは見知らぬ世界で目を覚ました。

辿り着いた百姓の村に突如現れた変形型魔導装甲機体 通称 デ

ーモン！

ケイはそこでエデン政府が行う魔女狩りを目の当たりにするのだった。

村人を襲うバイブカハの女戦士。

そして、花魁姿の美しき男剣士アカツキの一刀が煌めく。
過去に起きたトキオ聖戦、衰退した世界の謎に迫りつつ、走り屋の
女ターザンや謎多きグレイプニルの使い手のなんでも屋たちと旅
をする。

某小説大賞一次選考通過作品。

第1章「目覚めたら」

予言は外れたかに思われたが……。

蒼穹に雲一つなかった。

「うつつ……あう……」

朦朧とする意識の中で少女は瞳を開けた。

「……はあ？」

それは理解ができないといった、驚きのつぶやきだった。

「はあ~~~~っ!？」

叫び声は、大地に穿たれたクレーターに響いた。

少女がいたのは草木の一本すらない大地、そこにできた直径三〇メートルを越すクレーターの中心だった。

立ち上がった少女は、両手を広げて仁王立ちになり、さらに驚いた。

「なんですっぽんぽんの！」

燦然と輝く太陽に照らされるおっぱい!

少女は自らのFカップを越える爆乳を両手で驚掴みにした。

「なんじゃこりゃーっ!？」

次から次へと少女に殴りかかってくる驚きの連続。

「無乳でいつも友達にからかわれるし、クラス男子からバカにされてたのに……」

ここで起きている現象すべてを少女は理解していなかった。

謎のクレーター。

青空のもとですっぽんぽん。

無乳から爆乳への発育。

「なにがあつたの？」

答える者はだれもない。

生暖かい風が吹いた。

陽光は少女の肌をジリジリと焼く。

「てゆか、あっつー」

蒸れるショートヘアに指を入れて掻いた。

全裸だというのに汗が滝のように流れる熱さ。汗の玉が乳房やヒップを滑り落ちて、地面で四散した。

「……アイス食べたい。コンビニどこ？」

そんな物がこの近くにあるだろうか？

もしコンビニがあったとしても、サイフがないどころか、服もない。

「夢……」と思いたいけど、ハッキリしすぎてるし」

この状況を少しでも理解しようと、少女は目覚める前の出来事を思い出そうとした。

下を向いて片手で頭を抱える。

「学校の帰り道、『明日から夏休みだね』『なにする？』なんて話して……」

目覚める前の、もっとも新しい記憶は、高校からの帰り道だった。終業式を終えて、明日から夏休み。

まだ七月だというのに、八月の真夏日のような暑い日だった。

帰り道で友達と別れたあと、コンビニでガリガリちゃんを買って、食べながら自転車に乗って……。

「あれ……あれえ……そのあとなにがあったんだろ？」

思い出せなかった。

おそらく、その思い出せない記憶こそが、現状を紐解く鍵になるだろう。

「ぜんぜん思い出せない。事故にあって記憶喪失……って、コレ事故ってレベルじゃないし、名前だってちゃんと覚えてるし……あれっ、名前？」

自分の名前がパツと頭に浮かばない。

「えっ、えっ、えっっどうしよ……名前……マル……子？ じゃないし、ケイだし！」

ほつとケイは溜め息を落とした。

「よかった思い出せた。やっぱり事故にあって記憶が……って、事故っていつても？」

とりあえずケイは歩き出した。

クレーターの坂道を登りながら、遠くを眺める。

見渡す限りなにもない大地だ。

「宇宙人が攻めて来て、世界は見渡す限り死の大地、あたしは人類最後の生き残りとか……そんなのありえな……いと思うけど」

この大地とクレーターを見ていると、その想像もあながち外れていない気がして、ケイはゾツと身震いをした。

クレーターを登り切ったケイは、大地と空を交互に眺めた。

人間だけではなく動物の気配すらない。

鳥の一匹でも空を飛んでいれば、少しは気休めになるかもしれないの。

「……だいじょぶポジティブが取り柄だから」

独り言が多い時点で、だいぶ心細いのだろう。

「裸だつて気にしない。外で全裸になれる機会なんてないし、開放的だし、えっと……変な日焼け痕とつかなくていいし！」

言つては見たものの、すぐにむなしさが込み上げてきた。

「とにかくひと探そ。でも裸のままじゃマズイよね。このごろ近所で痴漢出るっ……てゆか、ここつてそもそも近所なの？」

目覚める前の記憶は学校の帰り道だったとしても、この想像を超えた事態が起きていることを考えると、どこにいても不思議ではない。もしこの場所が学校の帰り道だったとしたら、それは絶望ではない。町も人も消滅していることになるのだから。

ケイは額の汗を拭いたあと、重力に引っ張られていた爆乳を持ち上げた。

「うっ……それにしても重いし。胸ってこんなに重かったんだ。マミが肩凝るっていつてた理由がわかった。これってマミより断然巨乳だし、こんどみんなに自慢しよ」

友達のことを思い浮かべながらも、目の前に広がる現実にはなにもない。だれもいない大地だった。

立ち止まらずに歩き続けていれば、なにか見えてくるかもしれない。

身を焼く熱さ、素足もだんだんと痛んできた。

「アイスう、ガリガリちゃん食べたいよお。ハーゲンデッスならもつとがんばれる！」

無い物ねだりは、するだけむなしくなるだけだ。

「家の冷蔵庫によくわかんないアイスがあったハズ。弟のだけど家帰ったら食べちゃおう。お腹すいた、のどかわいた……もうだめ……」

ついにケイは歩くことをやめて大地に膝をついた。

遠くの景色が色のない炎のように、ユラユラと揺れている。

その先になにかが見えて、ケイは瞳を大きく開けた。

「馬？ 馬に人が乗ってる……馬なんて生で見たのはじめて……キムタクのCMでしか……ああ……あつい」

バタッ！

ケイは地面に倒れ、そのまま意識は真っ白な海に沈んだ。

顔に当たるそよ風。

ケイはゆっくりと瞳を開けた。

すぐ目の前には、頬の赤い娘がこちらを覗き込んでいた。手にはうちわを持っている。

「大丈夫ですか？」

尋ねられたケイは目覚めたばかりで、すぐに返事ができなかった。なにが起こったのか、まだわからない。

辺りを見回しながらケイは、ぽかんとして、

「時代劇のセット？」

と、つぶやいた。

時代劇に出てくるような農民の家。

土間があつて、囲炉裏があつて、現代風に言えばフローリングの床。天井は梁が見えたままだ。

目の前の娘が着ているのも、継ぎ接ぎのある着物だ。クレーターの真ん中で目覚め、全裸で爆乳にまでなっていたと思つたら、次は時代劇の世界だ。

「……………」

あまりの衝撃にケイは言葉ができなかった。

娘はそのようすを心配したようで、もう一度尋ねてきた。

「大丈夫ですか？」

「え……………だいじょぶ……………だと思ひます」

その受け答えは、ぜんぜん大丈夫そうではない。

「本当に大丈夫ですか？ まさかあんな場所に全裸で倒れているなんて、びっくりしてしまつたんですけど、野盗に襲われたんですか？」

「ヤトウ？」

「ですから、身ぐるみを剥がされて……………ひどい……………ことをされたんじゃないかって」

「は、はあ……………」

どう説明したらいいのかケイは困り果てた。

せつかくひとに会えたというのに、ケイからしてみたら、相手は浮き世離れた時代劇の住人だ。日本語は通じているが、話の内容まで通じるのかとても心配になった。

「ええつと、あなたが助けてくれたんだよね、ありがとうございませす」

ケイは上半身を起こして、しっかりと頭を下げてお礼をした。そのときに、自分が娘と同じような着物を着ていることに気づいた。

「服も貸してくれたんだ、ありがとう」

「いえ、当然のことをしただけですから」

「……………」

すぐにケイは会話に詰まった。

お互い無言のまま時間が過ぎたが、娘はときおりチラツチラとケイの胸を見ていた。

不思議に思いながらケイは娘の胸を見返したが、こちらも負けず劣らずの爆乳だ。

そして、ケイのほうから口を開くことにした。

「どーかした、あたしの胸？」

「いえ……もしかして野盗ではなくて、べつの者に襲われた……」

娘は言葉を詰まらせながら蒼い顔をしていた。

「だいじょぶですよ、だれにも襲われてませんから。たぶん」

「そうですね。ならどうしてあんなところで、なにも持たず裸で？」

「えっ……それは……」

なによりケイが聞きたいことだ。

言葉に詰まったケイに代わって、娘があの場合にいた理由を話し始める。

「昨日の夜あの辺りで大きな爆発があって、今日になってお父さんに見に行ってくれないかと頼まれたんです。そうしたらあなたがいて、ここまで運んできたんです」

「そーなんだ。爆発の原因は？」

「わかりません」

謎の爆発。

ケイが目覚めたのはクレーターの中心だった。

なにか関係がありそうな気がする。そこでケイはこの質問をした。

「あの場所にクレーターって前からあったの？」

「いえ、だから見に行つてびっくりしてしまつて。きっと爆発のときにできたんだと思います」

「やっぱり……」

「もしかして心当たりが？」

「えっ……その……」

目覚めたときの状況を言っているものなのか、ケイは戸惑って口ごもってしまった。

自分を救ってくれた親切な人。悪い人ではないと思い、ケイは話すこと決めた。

「なんで裸であんな場所にいたのか覚えてなくて……」

「もしかして記憶喪失ですか？」

「記憶喪失ってほどののかどーなのか……。じつは目が覚めたらあのクレーターの真ん中だったんだよね」

「まさか爆発と関係が……人間……ですよね？」

「はい？ 人間だよ、もちろん」

「あの爆発で村のひとたちみんな慌ててしまつて、神の怒りだとか、悪魔が来るとか、また世界が崩壊するんじゃないかって。農作業を休んで寝こんでしまつたひともいるみたいですから」

今の話の中に、怖ろしい言葉が含まれていた。

その言葉は自然とケイの口から発せられた。

「また世界が崩壊？」

「またつて言つても、みんなそんな昔から生きてるわけではありま
せんから、実感はないんですけどね」

「そーじゃなくて、世界が崩壊したわけ、いつ？」

「小さいころにお年寄りとか、両親とかに聞かされて育ちませんでした？」

今の娘の会話から察するに、世界崩壊はだいぶ昔の出来事なのだろう。問題はケイの記憶では、そんな出来事などなかったということ。年寄りや両親に教わらなくても、そんなことが起きていれば歴史の授業でやっているはずだ。

「聞かされなかったみたい。それでさ、いつのことなの、それ？」

ケイは相手の話に合わせてながら尋ねた。

「だいたい三〇〇年以上前のことです」

「三〇〇年を引くと……江戸時代？」

「エド時代？」

通じていないようだ。こんな江戸時代のような環境なのに。

ゴオオオオオオン！！

突然、民家の外から爆発音が聞こえてきた！
身構えるケイ。

娘は青ざめてショックを受けている。昨晚の爆発を思い出したのかもしれない。

しかし、今の爆発はもつと小規模なものだろう。音も近かった。さらに外からは男の大声が聞こえてきた。

「なんてことを、私たちがなにをしたというのだ！ 年貢だってしつかりと治めてるじゃないか！」

それに続いて女の声が聞こえてきたが、こちらの声はよく聞き取れなかった。

おそらく民家の外は危険だ。それは爆発音や緊迫した男の声からもわかる。けれど、状況がわからなければ、危機に備えることもできない。

ケイはそつと玄関から顔を出して、外の様子をつかがった。

「マジ……なにアレ？」

驚きつぶやいたケイの瞳に映ったものは 翼の生えた女だった
！？

第2章「紅い月」

紅いビキニ鎧とマントを身に纏い、同じく紅い兜から垂れている髪も紅い。

女はその瞳すらも紅かった。

しかし、その背から生えている翼は漆黒。

この女戦士を見てケイは驚いたが、もっと驚いたのは率いられていた部隊だ。

人型に近い兵器。

土色の全長三メートルほどの機体は、上半身は人型に近く、胴体腕と人間のような構成になっているが、頭部はなく、下半身は脚がない代わりに戦車のような無限軌道で移動するようだ。

この兵器が女戦士の後ろに三機並んでいる。

女戦士はギラついた眼で辺りを見回しながら言う。

「隠してんなら承知しないよ。次の的は？だれ？にする？」

はじめの的は人ではなく、すぐそこで倒壊している民家だろう。

次は人間を狙うと脅しをかけているのだ。

女戦士と話していた中年の男も物怖じして腰が引けている。

そして、その中年男を見たケイの感想は？

「ちよんまげじゃないんだ」

ケイの勝手な思い込みだった。

その一言を発したために、ケイは女戦士に気づかれて視線を向けられた。

「そのの娘、出といで！」

「イヤです！」

ケイはキツパリと断って家の中に逃げ込んだ。

土間では心配そうな顔をした娘が立っていてケイを迎えた。

「なにがあっただんですか？」

「聞かれても困るんだけど、変な真つ赤な怖い顔した女がロボット

を引き連れて」

「そのひとつて……?」

娘がケイの肩越しに指差した紅い女戦士。家の中へ追って来たのだ。

「ちゃんというじゃないか、胸のデカイ娘が二人も」

言い終えて女戦士は舌舐りをした。獲物を狙う獣の眼をしている。慌てた様子で家に飛び込んできた中年男。形振り構わず女戦士の脚にしがみついた。

「やめてくれ、娘になにをするつもりだ!」

「お父さん!」

娘が叫んだ。

父親がこんなにも必死になっている状況に、自分も巻き込まれていることにケイは気づいた。

「まさかあたしも狙われてるの、巨乳だから?」

そして、女戦士はひいき目に見ても貧乳だった。

女戦士は父親を蹴り飛ばして払い退けた。

「百姓が役人の邪魔すんじゃないよ。公務執行妨害で殺るよ?」

この女戦士は本気で殺る鬼気を出していた。その紅い姿は返り血で染まって、そうなったように見えてしまう。

女戦士が一步一步、ケイたちのにじり寄ってくる。

「大人しく連行されれば隔離施設入り。抵抗するならこの場で殺るよ?」

目覚めてからなにもかもわからないまま、今度は理不尽にも捕まりそうになっている。ケイは納得なんてできなかった。

「なんで隔離施設なんか入れられなきゃいけないわけ、あたしがなにをしたの!」

「まさか巨乳狩りを知らないわけじゃあるまい?」

「……は?」

女戦士の言葉にケイは啞然とした。

「?殺る?とかいう物騒な言葉が出た同じ口から、?巨乳狩り?と

いうマジとは思えない言葉が出た。？巨乳？を？おっぱい？に言い換えると、もはやギャグとしか思えない言葉だ。

巨乳狩りの遂行者ということは、この女戦士は？おっぱいハンター？ということになるではないか 貧乳の。

ケイは思わず失笑してしまった。

「なにそれ？」

「本当に知らないのか？ やはり都から離れると、どこもとんだとド田舎だな」

女戦士のほうも失笑した。

おそらくこの場で巨乳狩りを知らないのはケイだけだろう。

娘が恐る恐る口を開いた。

「一年ほど前、死に至る恐ろしい病気が発見されたそうです。代表的な発症者である前都智治とまぢの名前を取ってヒミカ病と名付けられました。その病気の症状のひとつに乳房の肥大があるんです」

「それで政府がアタイらに命じたのが巨乳狩りさ」

と、女戦士が締めくくった。

その説明を聞いても、ケイは大人しく連行されるつもりはない。

その大きな理由は、娘が進んで連行される態度を見せていないことだった。

そして、女戦士たちの強硬な態度。連行された先になにが待っているのか？

女戦士が手招きをした。

「さっ、早くこっちへおいで」

娘は首を横に振った。

「嫌です、行きたくありません。だって、今まで連行された人や、自ら進んで収容所に行った人、その中には病気じゃなかった人もいるはずなんです。なのに誰一人帰ってきたって聞いたことがあります！」

「そんなのアタイの知ったこっちゃないよ。ぶっちゃけ、アンタらが病気だろうが、そうじゃなからうがアタイには関係なんだ。狩り

がしたいんだよ、狩りがツ！」

連行という選択肢などはじめから存在していなかったのだ。

ケイは娘の腕を掴んで逃げようとした。

この瞬間こそを、女戦士は待つていたに違いない。

逃げる獲物を狩れる瞬間を。

瞳を真っ赤に燃やす女戦士から立ち昇る狂気。

「この場で胸の肉を削ぎ落としてやるよ！」

玄関には女戦士がいる。

ほかに逃げ場は！？

開いていた雨戸に向かつてケイと娘は走り出した。

しかし、その先にはあのロボットが待ち構えていた！

ズドオオオオオオン！

次の瞬間、ケイたちは爆発に巻き込まれそうになって床に伏せた。いつたいなにが起こったのか？

床に伏せたまま恐る恐るケイが顔を上げると、ロボットが大破しているではないか！？

事故か、それとも何者かの仕業か？

なにが起きたのかわからなかったが、道は開かれた。

ケイはすぐに立ち上がって、娘を引っ張って雨戸の外へ飛び出した。

すぐに女戦士も追いかけてきた。

「AT零参型が大破だど！？」

それは女戦士にとっても思わぬ事態だったに違いない。

嗚呼、その紅をくれない目にしたら、女戦士などくすんで見える。

外に出たケイたちを出迎えたのは、艶やかな紅い衣装を身に纏った花魁だった。

白塗りをせずとも透き通った白い肌。

柳眉と長いまつげの下で開かれた切れ長の瞳。

筋の通った鼻梁の下では形の良い唇が艶やかに微笑んでいた。

ケイは思わず逃げることも忘れ、その花魁の妖艶さに魅惚れてし

まっていた。

気づけばケイたちは、花魁と女戦士に板挟み。

AT零参型と呼ばれた兵器もあと二機残っている。

女戦士の視線はケイたちを通り越し、謎の花魁に向けられていた。
「アンタが噂の災難の暁か？ カフミテイ・アカツキ ネヴァンが獲物を捕られたって喚いてたよ」

「そういう貴様はバイブ・カハのひとり、赤毛のマツハ だな？」

花魁 アカツキの発した声は女にしてはとても低い。そして、高下駄を履いているとはいえ、身長は一八〇センチ以上はあるだろう。

まさかこの花魁！？

「オカマ！」

ケイが叫んだ。

「たぶんオカマじゃなくて、女形だと思えます」

すぐに娘のツッコミが入った。

女形とは演劇で女役に扮する男の役者を言うが、本当にアカツキがそうなのかわからない。少なくともケイはオカマ説を支持していた。

「絶対オカマだよ（もしかしたら工事済みかも）」

その発言が気に障ったのか、アカツキは抜刀した切っ先をケイの心の臓に向けた。

「その魂魄、俺様が貰い受ける」

「えっ、マジ！？（殺される！？）」

ケイは後ろに一步下がったが、その先にはマツハがいる。

アカツキとマツハ、仲間ではないが狙いは同じなのかもしれない。遙かなる女体の巨峰をもぎ取る者。

「このオカマもおっぱいハンターなの！？」

ケイの大声が木霊した。

「フェザーアロー！」

次の瞬間、マツハの翼からフェザーアローが発射された。

翼の矢が狙ったのはアカツキ！

「アタイの獲物を横取りしようなんて一億光年早いんだよ！（誘導弾のこの技を避けられるはずがない！）」

高下駄という悪条件にも関わらず、アカツキはすべてを見切ったように、舞いながらフェザーアローを躲した。

しかし、外れたフェザーアローはアカツキを通り越し、そこからUターンして再び襲ってきた。

アカツキはフェザーアローに背を向けていた。

マツハは妖しく微笑んだ。だが、その表情が一転して驚愕へと変わる。

なんとアカツキは一瞥もせず、その攻撃をはらりと躲したのだ。

そして、刹那。

輝線を引く一刀が羽根を斬った。

二人が獲物の取り合いをしている間に、当の獲物は逃げようとした。

「今の内です！」

先に駆け出したのは娘だった。

もしも先に飛び出していたのがケイだったら、その運命を辿っていたに違いない。

娘は叫び声すら上げられなかった。

心臓を刀でひと突きにされたこともあるが、それ以前にアカツキの美麗な双花に接吻を奪われていたのである。

重なり合う唇が離されると同時に、柔肉から刀が抜かれた。

ブシューウウウウッ！！

鯨が潮を噴いたように勢いよく、煮えたぎる紅い奔流が傷口から迸った。

「人殺しッ！」

心からのケイの叫び。

そこにいたのは人殺しなどという生やさしい者ではなかった。

殺人の鬼。

白かった顔は今や紅く彩られている。

マツハはその通り名を思い出した。

「そついや、カラミティのほかにも 紅い月 なんて呼ばれてたな」
月のように清ましたアカツキの表情。

自然とケイの瞳からは涙が零れていた。次に殺されるのは自分だと恐怖したのではない。まだ名前すら聞いていなかった娘は、もう口も聞けない。

しかし、ケイはあることに気づいた。

嗚呼、なんて娘は至福の表情をしているのだろうか……。

「次は貴様だ」

アカツキは紅い雫が滴り落ちる切っ先をケイに向けた。

「これ以上、獲物の横取りは許さないよ。この変態野郎を殺っちまいな！」

二人の間に割って入ったのはマツハだ。

さらに二機のAT零参型がアカツキに襲い掛かってきた。

アカツキの刀が風を切り、唸り声をあげた。

「貧乳の貴様に用はない。機械など眼中にない。俺様の両眼には爆乳しか映らぬ！」

刀が情熱を帯びたように炎を上げた。

「火炎突き！」

叫んだアカツキはAT零参型の胸を突いた。

「ギヤアアアアアアアアッ！」

刀が突いたのはコックピットだった。有人機体に乗っていた男を突き刺し、その軀を業火によって燃やし尽くしたのだ。

操縦者を失ったAT零参型は、暴走しながらもう一機に突っ込んだ。

仲間の突撃を喰らった機体はぐらつき、そのまま地面に倒れてしまった。すぐにアームを使って起き上がるうとするが、アカツキの追撃は容赦ない。

天高く飛び上がっていたアカツキが、切っ先をコックピットに向

けて飛来する。

「火炎突き！」

「ギョアアアアアアッ！」

「またもあがつた悲鳴。」

生きながら焼かれ、死の灰と化す。

部下の死をマツハは動じずに、むしろ楽しそうに笑っていた。

「噂通りの強さで嬉しいよ。ネヴァンが獲物を搔つ攫われたわけだ。その炎がアンタの ムゲン か？」

「違う」

と、アカツキは短く。

ムゲン とはいったいなにか？

「ならアンタ、 ムゲン に関係なく炎術士ってわけか？」

「さて……な」

「言いたくないってことか。けど炎は ムゲン じゃないんだろ。」

アンタの ムゲン を見せてみなよ」

「貴様が見せてくれたら、な」

先に妖しく笑ったのはアカツキか、それともマツハか？

ほぼ同時に二人は動いていた。

しかし、マツハのほうが疾い！

それは驚くべきことに、目にも止まらぬ速さだった。まさに音速^{マツハ}が、速さこそ劣るアカツキの刀は、漆黒の翼を切り裂いていた。

「キヤアアアアアアッ！！」

凶鳥のような甲高い悲鳴をあげてマツハが地面に倒れた。

アカツキはまるでそこにマツハが現れるの知っていたかのように、視界からマツハが消えた刹那にその場所に刀を振るっていたのだ。

「翼が……あああつ、人間の動体視力じゃアタイの動きは……痛い、痛ヒイイイ！」

地面でのたうち回るマツハを、アカツキは冷たい視線で見下していた。

「いくら疾く移動できたとしても、思考も同じ速さで働かなくては

意味がない。足りないのは胸だけないようだ」

皮肉を吐かれたマツハは反撃どころか、痛みで躰の自由すら効かない。

「おのれ……ああっ……ああん……カ…… カイジユ！」

力を振り絞って叫んだマツハの翼が蠢き出す。

それはまるで肉の塊が蠢くように、翼だったものが変形していくのだ。

腰が抜けてその場から動けなくなっていたケイも、尻餅を突きながらその一部始終を見ていた。

蠢いた翼はいったん、小さな黒い肉の塊になったあと、そこから小さな翼を生やし、クチバシを伸ばし、最後に紅いカンムリのような羽根を頭に生やした。

「鳥？（なんなのいったい？）」

と、ケイはつぶやいた。

マツハの翼だったモノは、四五センチ前後の鳥に変貌したのだ。

それを見たアカツキが、だれに聞かれるでもなく説明をはじめた。

「これがこいつの ヨーニ だ。キツツキの仲間か……空を飛べる鳥類は戦術的に デーモン に適しているな」

「ヨーニとかデーモンとか（デーモンって悪魔って意味？）」

アカツキの言っていることをケイは理解できなかった。

「 ヨーニ は魔導装甲機体 通称 デーモン の契約体の総称、または通常の状態を言う。それからデーモンとデビルは意味が異なるから覚えておけ」

「え？（意味わかんない……もおヤダ！）」

「説明するだけ無駄のようだな」

切っ先がケイに向けられた。

「あたしのこと殺す気？（どうせ殺すから説明しても無駄って意味？）」

「華は散る運命にある。しかしまた蕾をつけ、華咲くものだ」

死を目前に感じたケイは、娘の顔を思い出した。

なぜ、あんなにも至福の顔をしていたのだろうか？

「（あたしもこのひとに殺されたらわかるかな……）」

最期の覚悟をしてケイが目をつぶろうとしたとき、アカツキの刀を持つ手が震えた。

「くっ……限界にはまだ……早い筈……」

急にアカツキがケイに背を向けて走り出した。

死を覚悟していたケイの躰から一気に力が抜けた。

「な、なんなの？」

アカツキは消えた。

不可解な逃亡だった。

マツハも弱っているキツツキを抱きかかえて立ち上がった。

「今はやむなく引くが、オマエはアタイだけの獲物だからな爆乳女

」！

そして、マツハもこの場から走り去って姿を消した。

嵐のような出来事だった。

その嵐が残した爪痕は……？

紅い海に沈んで横たわる娘の傍でむせび泣く父の姿。

過ぎした時間の長さは関係なかった。

ケイは失った悲しみが蘇り、その場に蹲って動けなくなってしまう
った。

第3章「2411」

娘は太陽が落ちぬその日の中に弔われた。

そこではじめてケイは娘の名を父親から聞いた。

ミライ。

村長だった父が娘に託した名前。

それを聞いたとき、ケイは返す言葉もなかった。

二人の紅い悪魔がこの村に現れ、娘の未来を奪い去ったのだ。

ケイは悲しみを抱くと共に、憎しみを覚えた。

巨乳というだけでなぜ　と理不尽さを覚えずにはいられなかった。病気にかかっていたかもどうかわからないのだ。それにあんな惨い殺され方。

ケイは自分の胸にそつと触れた。

ヒミカ病は死に至る病なのだと云う。その症状のひとつである乳房の肥大。

「まさか……ね」

つぶやいたケイに、囲炉裏越しのミライの父親が話かけてきた。

「どうかしたかい？」

「いえ、なんでもありません。それよりも本当に今日はここに泊まっていますか？」

「もう陽も暮れてしまったし、行く当てもないんだらう？」

「はい、記憶喪失なので」

クレーターで目を覚ます前の記憶が少し抜けているが、それ以外のことは覚えているとケイは思っていた。けれど、現実離れたこの世界で不審がられないように、名前以外はなにもかも忘れてしまったと父親に説明したのだ。

ミライの弔いで時間が過ぎ去って、見知らぬこの世界を考えたり知る暇がなかった。今なら父親からゆっくり話が聞けるかもしれない。

「あの！」

「なんだね？」

「やっぱりいいです」

記憶喪失という設定でも、なんでもかんでも聞くのは不思議に思われてしまう。なにから話そうか、まだ整理ができていなかった。

「あの……」

「聞きたいことがあるんなら言ってみよう」

「……えっと……奥さんは？」

それは聞きたかったことではなく、気になっていたことだった。葬儀の際もその姿を見ていない。

「妻は娘を生んだあと……」

「ごめんなさい、変なこと聞いちゃって」

「家出をしたんですよ」

「い、家出ですか？」

予想していた答えよりはよかったが、聞かなければよかったとケイは後悔した。

それでも父親は話しはじめた。

「妻はあの子を生んで間もなくして、こんな生活より、もっと良い生活がしたいと、私たちを置いてエデンに行ってしまった」

「エデン？」

「ああ、それもお忘れですか。本当になにもかも忘れてしまったんだね」

「すみません」

「謝ることはないよ。この国の首都、帝都エデン。今は帝都エデンじゃなくて、魔都エデンってみんな呼んでますがね。聞いた話じゃ、地上から首を痛めるほど見上げなきゃいけない建物が建ち並び、床は勝手に動き行きたい場所に連れて行ってくれる。欲しい物はどんな物でも手に入り、百姓だってひとりもいやしないって噂だよ」

「ビルにエレベーターかな……」

この村は農村だが、大都市に行けばケイの慣れ親しんだ物がある

のかもしれない。

ただ、これまでのことでケイはあることを確信しつつだった。

「あたしの知ってる世界じゃない」

小声でケイはつぶやいた。

「どうかしたかい？」

「いえっ……この国の名前とか教えてもらってもいいですか？」

「ニホンだよ」

「はい？」

想像を裏切られたケイは気の抜けた変な声を出してしまった。

もう一度、父親がはつきりと言う。

「ニ・ホ・ン」

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよっと、ここって日本なんですか？ 異世

界とかじゃなくて、日本？」

「イセカイ？」

「それは置いといて、日本のどこなんですかここ？」

「ナゴヤ地区だよ」

「名古屋って名古屋県じゃなくって……え〜っと、愛媛県？」

「エヒメケン？」

通じてない。

ちなみに愛媛ではなく愛知だ。

父親も戸惑っているようだが、もっと戸惑って混乱しているのはケイのほうだ。

この受け入れがたい世界を自分なりに納得するために、ケイは異世界というファンタジーな言葉で包括して無理矢理受け入れようとしていたのに。

それがここで覆されようとしている。

「ええっと、あたし神奈川県出身なんですけど、聞いたことありません？」

「カナガワケン？」

「横浜で有名な。横浜中華街とかあるんですけど？」

「記憶を取り戻したのかい？」

「えっ……」

「どれも聞いたことないな」

やはり少し似た名前の地名があっただけなのか？

記憶喪失という設定を無視して、ケイはこの糸口を放さないように粘る。

「神奈川って東京の下なんですか？」

「トウキョウ……トキオ聖戦があった古代都市の名前……なわけないか」

「トキオセイセン？ 古代都市？」

また理解に苦しむキーワードが出てきた。目覚めてからずっとこの調子だ。

「トキオ聖戦は今から……、四〇〇年以上前の話さ。その神々の戦争で当時の首都だったトキオは一瞬にして焦土と化したそうだよ。

そのあとにできたのが旧帝都エデンと云われている。旧帝都エデンは一〇〇〇年の繁栄ののち、世界を崩壊させたノアインパクトで他の国々といっしょに滅びたそうさ。そして、絶望の一〇〇年

が過ぎ、第二のエデン そう、今の魔都エデンができたんだ」

「うっ……ぜんぜん話についてけない」

「ならこの話はやめよう」

「いえっ、続けてください」

わからない単語も多いが、現状を理解するためにも、この世界のことをもつと知る必要がある。

「なら続けよう。世界はノアインパクトによって、大きな打撃を受けた。その後の地殻変動や気候の悪化、食料不足やエネルギー不足によって、人類は衰退の一途を辿った。最期に止めを刺したのは人類自身だと云われている。食料や資源が不足すると、それを奪い合い戦争が起きたんだ」

「そんな状況でも戦争と起こるんですね」

「そういう状況だからこそ、人間の本质が現れるんだよ。生き残る

ために」

平和な環境の中で暮らしていたケイには、なかなか実感できないことだった。

「日本でもそういう争いが起きたんですか？　ほかの国ならありそうだけど、日本でそんなこと信じられませんか」

「ニホン国内の混乱は少なかつたらしい。情勢がほかの国とは違っていったんだ。旧帝都エデンがあつたのは、この国だからね。ノアインパクトで流されずに残った遺跡を発掘して、そのテクノロジーを使つたんだ。ニホンはどの国よりも復興が早かつた。今だつてどの国よりも豊かな文明社会だよ……とは聞いているが、鎖国で外の情報なんてプロパガンダでしか聞いたことないけどね」

「や、やっぱりぜんぜん話についてけない」
「わからないところは質問してもらつて結構だよ」

全部と言いたかつた言葉を呑み込んで、ケイは今された話を自分なりに整理して、キーワードを絞り出すことにした。

トキオ聖戦、旧帝都エデン、魔都エデン、ノアインパクト、
絶望の一〇〇年、鎖国。

「ちよくちよく出てくる　ノアインパクト　つてなんですか？」

「世界を滅ぼした大洪水だよ。原因は不明だが、言い伝えでは一五〇日間、その洪水は世界を呑み込み、なにもかも洗い流したらしい。そのため文明は失われしまった」

「じゃあ鎖国っていうのは？」

「ニホンは旧帝都エデンのもたらしてくれたロストテクノロジーによつて復興を遂げた。ノアインパクト　から一〇〇年目、そのハイテクノロジの粋を集めてつくられた都市が魔都エデンなんだ。魔都エデンは復興の象徴として、そこで　絶望の一〇〇年　が明けたと言われている。科学技術面での復興の道筋が立つたと同時に、政府は国民総農民化計画を打ち出したんだ。それによつてニホンは食料と科学の二本の柱で、時給自立のできる世界でもっとも裕福で優れた国になつた。そうなつてくると、貧困な海外からの移民も増

え、国を脅かす大きな問題も増えてくる。政治的な問題や、治安の悪化、略奪や戦争、技術力などの海外流出を防ぐため、二ホンが取った政策が鎖国だったんだ」

古代都市を滅ぼしたトキオ聖戦。

その後、栄えた旧帝都エデン。

ノアインパクト による世界崩壊。

絶望の一〇〇 年と呼ばれる時代が訪れる。

旧帝都エデンの遺跡から発掘したテクノロジーで魔都エデンの建設。

そして、豊かになった二ホンは鎖国をした。

ケイの感覚からすると、この村の百姓暮らし裕福とは思えない。決して貧困に喘いでいるとまでは思えないが、物で溢れていた世界で暮らしていたせいでそう思えてしまう。

ほかの国の現状はどれほどまで酷いのか、ケイには想像できなかった。鎖国によって情報が規制されているのだから、ほかの国がこの国よりも裕福な可能性だってあるのだ。

魔都エデン そこはいったいどんなところなのだろうか？

少なくとも、この国に大きな格差が存在していることは間違いない。

「今も鎖国って続いてるんですね？」

ケイが尋ねた。

「今が二四一年だから二三五九を引くと、五〇年ほど続いていることになるのか」

「二四一年っ！？ そっか、今さら驚くことじゃないのか……でも、もしかして……」

「なんだい？」

「ノアインパクト とか、トキオ聖戦っていつのことなんですか？」

「ノアインパクト は二二〇〇年、トキオ聖戦は一九九九年のことだと云われているよ」

「マジで……一九九九年って……ただの偶然……それとも……」
父親と話していることも忘れ、ケイは独り言をつぶやきながら考え込んでしまった。

ケイはこの世界がいつたいどこなのか、いくつかの可能性を考えていた。

違う星である可能性。

異世界である可能性。

しかし、自分のいた世界との類似点も多く、なにより言語にも不自由していないことから、もっと有力だと考えついたのが。

「未来」

ケイは自分のいた世界のことを思い出した。

夏休みがはじまる日に赤ペンで丸印をつけて心待ちにしていた。

一九九九年七月二一日。

その前日になにかが起きた。

この世界の一九九九年以前の歴史がわかれば、重要な手がかりになるかもしれない。

「あのっ、トキオ聖戦以前の世界って、歴史とかなんかそういうのわかりませんか？」

「さあ、それ以前のことは……大きな町に行けばわかるかもしれないが、たとえば魔都エデンとか」

「魔都エデンにはどうやって？」

「まさか行く気じゃないだろうね？」

「行きます」

「やめておきなさい。規制が厳しくて、行っても中に入れてもらえないよ。下手をしたら投獄や殺される可能性だってある」

「そうですか……」

と、言いながらも、ケイは腹を決めていた。

魔都エデンに行つて多くの情報を得る。

それはもとの世界に還る方法の手がかりを、つかむことに繋がるかもしれない。

「ここはいつたいいどこなのか？」

それがわからなければ、還る方法を考える起点も定まらない。
あぐらを掻いていた父親が腰を上げた。

「そろそろ夕食の準備をしよう」

「あたしも手伝います！」

「……………」

急に父親は黙り込んでしまい、ケイの顔をじっと見つめた。けれど、その視線はケイではなく、遠いなにかを見つめているようで、とても悲しそうな表情をしていた。

そして、父親は。

「ありがとう」

と、ひと言ささやいた。

薄暗い部屋。

天蓋ベッドのカーテンに映る影絵。

長い髪の毛を振り乱し、狂い踊る人影がそこには映し出されていた。

「ヒヒツ……………あううう……………ああつ……………きゃヒ……………キヤオオオオオ！」

少女の声のようであるが、それはまるで魑魅魍魎の叫び。

ドアが開き、部屋に光が差し込んだ。

逆光を浴びて部屋に入ってきたのは車椅子の人影。

それを出迎えたのはメイド服の侍女だった。

「先ほどからあの調子で、鎮静剤も効きません」

「すっかりあの子も人外ね」

真つ赤なルージュはそう言葉を紡ぎ出し、艶やかに笑った。

車椅子の人影はおそらく女だ。

真つ赤なドレスに身を包み、手袋やベールで素肌を隠す。ただ一箇所、見えているのはその真つ赤なルージュの口元。そして、この女には片脚がなかった。

侍女が尋ねる。

「マダム・ヴィー様、都智治をどうなさいますか？」

「まずはこの目で様態を診ましょう」

マダム・ヴィーは全自動車椅子を走らせ、天蓋ベッドに近付いた。カーテンが捲られた。

はだけた法衣を着た一五、六の少女が、ベッドの上で跳ねて暴れ狂っている。その腕には手錠が嵌められ、ベッドの柱と繋がれている。た。

「どうしたの、醜い醜いお姫様。今日も素敵な悪夢にうなされていくかしら、うふふ」

ルージユを微笑ませたマダム・ヴィーに、夜叉の形相をした少女が襲い掛かってきた。

「キエエエエエエエツッ！」

ガシッ！

手錠の鎖がピンと張られ、少女の驚のような手は、真っ赤なベールの目の前で止まっていた。

口元でしかその表情は何えないが、マダム・ヴィーはまったく動じていない。

むしろ愉しんでいる。

「ああン、とても素敵に狂った表情。口から垂れた涎れを舐めてあげたいけれど、今舌を絡めたら喰い干切られそうね」

「イイツ……グイイイイ……ひひひ……」

「明日は大事な公務があるわ。今日はぐっすりと夢も見ない眠りに墜ちなさい」

ベッドの下から巨大な影が這い出てきた。

それは人間の大人ほどもある真っ赤な巨大サソリだった。

針のついた尾が振り下ろされる！

眼を剥いた少女の腹に突き刺さった巨大サソリの毒針。

毒の脅威よりも、これほどまで大きな尾だと、穿たれた傷口が致命傷になりそうだ。

しかし、針が抜かれた少女の腹は、血こそ滲んだが、傷口はすぐ

に塞がってしまったのだ。

少女は意識を失ってベッドに倒れた。

先ほどとは打って変わって、夜叉の形相から聖人のような顔つきをしていた。

安らかに眠る聖女ともいうべきか。

マダム・ヴィーが車椅子を反転させ、この場から去ろうとしたとき、異変は起きた。

ベッドからの気配。

優雅にマダム・ヴィーは再び車椅子を反転させ振り返った。

少女の躰が淡く黄金に輝き、足は宙に浮かんでいたのだ。

すぐにマダム・ヴィーは察した。

「M神託……久しぶりね」

そして、目をつぶったままの少女は、玲瓏な声音で御告げを詠みはじめたのだ。

「一九九九年、第七の月。空より恐怖の大王が至る。アンゴルモアの大王を蘇らせ、その前後、マルスは幸福な統治をするであろう」

マダム・ヴィーはしばらく考え込んだ。

「一九九九年……なぜ過去のこと？ それに？ 彼ら？ の存在を示すのであれば、空からという言葉は可笑しいわ。もしかして西暦ではないのかしら？」

すでに御告げを終えた少女は、ベッドに横たわって気を失っている。

「なにかが起ころうとしている。昨晚の爆発と関係あるのかしら。

調査隊が道草をした挙げ句、失態をしたせいでなんの情報も得られていないわ。やはり近くにいたとはいえ、マツハを向かわせたのは失敗だったわね、うふふ」

マダム・ヴィーの艶笑は、まるで魔都の魔性を表しているようだった。

第4章「炎麗夜見参」

記憶が戻るまでとは言わず、いつまでもここに居てもいいと言われたが、ケイはそれを断って村を出た。

見知らぬ世界で独り、不安の大きさは計り知れなかったが、元の世界に還りたいという気持ちで勇気を生み出した。

水と食料と服を分けてもらい、街道沿いに進めば少し大きな町に着くと教えられた。

照り輝く太陽。

村を出て一時間もしないうちに、ケイの心は折れそうだった。

「うう、熱い」

竹水筒の水をがぶ飲みする。すでに半分は飲んでしまっただろうか。町まで水が持つか心配だ。水は飲んだ矢先から汗に変わってしまった。

「こつこつという暑い日はクリームな感じじゃなくて、のどごしのいいガリガリちゃんとかおいしいんだよねえ」

余計にのどが渴いたような気がして、もう一口だけ水を飲んだ。街道とはいえ、地面を成らしただけの道で、アスファルトと違って微妙な凹凸があり、いつも歩いているより疲れてしまう。

さらにこの熱さだ。

「ああ、つつい、村の人たちとか見て思ってたんだけど、なんでみんなへーきな顔してたんだろ。暑さに慣れてんのかな」

立ち止まってしまっていたケイは、ゆっくりと身体を一八〇度回転させた。

「やっぱり戻ろう」

完全に心が折れた瞬間だった。

しかし、すぐにその気も変わった。

前方から馬に乗ってくる人影たちが見えたのだ。

「あつ、乗せてもらおう！」

すぐにケイは馬に向かって駆け出した。

「ちよつと乗せてくれま……」

急に青ざめたケイ。

馬に乗った屈強な男たちは、壱刀と銃を装備して、いかにもならず者っぽい悪そうな人相だったのだ。

すぐにケイは逃げようとしたが、先回りされた馬の身体によって、道が塞がれた！

戸惑っているうちに、ケイは三匹の馬の壁に囲まれてしまっていた。

「金目の物を出してもらおうか！」

ドスの利いた雄々しい声が響き渡った。

「金目の物つていわれても困るんですけど。だって持ってるの水とおむすび三つなんですけど……具なし」

決して嘘ではないのだが、悪漢どもがそれで満足するはずがない。カップみたいなの顔をした子分風の悪漢が、ゴリラみたいな親分風の悪漢に話しかける。

「この娘、かなりの爆乳ですぜ。政府に突き出せば、賞金をたんまりもらえるんじゃないですかい？」

「そうしよう。だがその前に、俺たちでたっぷり可愛がってやらうぜ」

黄色い歯を見せて悪漢どもがニタニタと笑った。

身震いしたケイは逃げようにも逃げられなかった。脚は震えてまともに走れないだろうし、こう囲まれていては振り切ることもできない。

カップ男とブタ男が馬から降りてきた。

このままでは捕まってしまう。

無理かもしれないと思いながらも、ケイは無我夢中で馬の間を抜けようとした。

ヒヒーン！

嘶く馬が前脚を大きく上げた。

「きゃっ！」

驚いたケイは地面に尻餅をついてしまった。
そこへブタ男が飛び掛かってくる。

ブタ男にのし掛かられてしまったケイ。圧迫されて動けないだけでなく、息も詰まりそうだった。

「くっさい息吐きかけないで！」

相手の息が臭すぎて。

まるで本物の豚のようにブヒブヒと鼻を鳴らして、ブタ男はケイの汗ばむ肢体の臭いを嗅いだ。

ケイは脚をジタバタと振ったが、その脚はカッパによって捕まえられ、さらに悪寒の走る行為をされた。

カッパ男はベトベトの舌で、ケイの足を舐めてきたのだ。

「ちょ……あはは……やめて気持ち悪い……足舐めるとか信じられない！」

そして、ついにゴリラ男も馬を降りてきた。

ゴリラ男はいきなりの下半身露出で、ケイは心のモザイクを発動させた。

「なんで脱いでんの、トイレなら違う場所ですよ！ てゆか、あたし一八歳未満だし、そーゆーのイケないと思います！」

「俺の息子は伝説のトキオタワー並だぜ！」

ゴリラ男は腰をブンブン振りながらニタニタと笑った。

必死になってケイは暴れているのに、その全身は冷え切って寒気がするほどだった。

「やめて、お願いだれか助けて！」

カッパ男とブタ男がニタリと笑った。

「泣いたって」

「喚いたって」

そして、最後にゴリラ男が決め台詞！

「だれも助けに来ちゃくれねェよ！」

しかし、真の決め台詞はヒーローのものだ！

崖の上で黄金に輝く人影。

「その子を放しな！」

その声はヒーローではなくヒロイン　凜とした女のものだった。
ゴリラ男が叫ぶ。

「なにもんだてめええ！」

崖の上で輝く人影は、なんと黄金の巨大猪に跨る、野性味溢れる
ピキニ姿のナイスバディな金髪美女だった。

「地上災凶最速のヴァナディースのリーダー、炎麗夜ふれいやさまたあ、お
いらのことさ！」

炎麗夜は猪に跨ったまま、急な崖を滑るように下りてきた。

思わず悪漢三人も動きを止めてしまっている。

ケイも啞然とした。

「……女版ターザン？」

炎麗夜を乗せた猪はどんどん加速して、そのままゴリラ男を撥ね
飛ばした！

「グボオツ！」

巨漢のゴリラ男が五メートル以上吹っ飛んだ。衝撃の激しさを物
語っている。まさに猪突猛進だった。

カッパ男とブタ男が慌てる。

「親分！」

「しっかりしてくださいえ！」

だが、ゴリラ男はピクリとも動かず、地面に倒れたままだった。
パニックを起こしたブタ男が、鼻を鳴らしながら炎麗夜に襲い掛
かった。

だが一撃！

「ブヒッ！」

猪の突進を喰らってゴリラ男のようにブツ飛んだ。

独り残されたカッパ男は真っ青な顔をして、ケイのことを放り出
して逃げてしまった。

これで危機は去ったのだ。

ケイは砂埃を払いながら立ち上がった。

「ありがとうございます……ごさいました」

お礼を言うケイの視線は炎麗夜の胸に向けられていた。確実にケイよりも爆乳だ。いや、爆乳と言うより、超乳の域に達しているだろう。

「お礼なんてこそばゆいだけさ。同じ乳友ちちともとして放っておけなかっただけさ」

「チチトモ？」

「胸がデケエってだけで追い回される狂った世の中。同じ巨乳同士、出会ったときから友達さ。乳房の？乳？に、友達の？友？で乳友って仲間内じゃあ言ってるのさ」

「仲間ってどんな？」

「見ての通り走り屋さ」

「見ての通りって……」

黄金の猪の乗っている女版ターザンというのが見たままの感想だ。炎麗夜は金髪の髪に指をいれて頭をかいた。

「仲間といっしょに旅してただけど、ちょっとかつ飛ばしちまって、恥ずかしい話はぐれちまったんだ。この近くで見なかったかい？」

「わかんないです」

「白い馬に乗ってるのと、猫に乗ってる二人の、三人娘なんだが？」

「ねこ……」

ケイは猫に乗るといふ行為が想像できなかった。あの歌が思い出されてしまう。

「ところであんたひとりかい？」

「はい」

「巨乳の一人旅は危険だよ」

今さら言われなくて、たった今実体験させられたところだ。

炎麗夜はさらに言葉を続ける。

「近くの人里だったら乗せてってやるが、どうだい？」

「ありがとうございます！ でも、本当は魔都エデンに行きたいんですけど」

「魔都エデンなんていくつも山を越えた先じゃあないか、さすがにそこまでは送っていけないよ」

「だから今はそこに行くんじゃないかとにかく大きな町を目指してるんです」

炎麗夜は奔放な笑みを浮かべた。

「なら後ろに乗りな。おいらも今から大きな町を目指すところさ！
こうしてケイは乳友の旅仲間を見つけたのだった。

まるで羽毛布団のような、温もりと柔らかさが顔を包み込む。

「アカツキったら、本当に甘えん坊さんなんだから
春の陽のように優しい女の声。

アカツキは豊満な胸に顔を埋めていた。

「……紅華こうか、ずっといつしよだよ……紅華……紅華……紅華？
世界が闇に閉ざされ、アカツキを置いて、全裸の女性が吸いこまれるように、後ろへ消えて闇に溶けた。

「紅華ーッ！」

闇の中に木霊する叫び声。

そこでアカツキは目を覚ました。

「……夢か」

納屋の片隅で壁により掛かり、座りながらアカツキは寝ていたのだ。

どこからか電子的な音が聞こえる。

アカツキは藁の中に埋もれていた、手のひらサイズの通信機を探し出した。

「こちらレッドムーン」

《おはようアカツキ君》

通信相手の声は少女のような少年のような、幼い声の持ち主だった。

「用件を簡潔に言え、ゼクス」

《才色兼備の美女がせっかくモーニングコールしてあげたのに、なにその冷たい態度》

ブチツとアカツキが通信を切った。

すぐにまた通信機が鳴った。

「こちらレッドムーン」

《事故だよな？ 事故で通信が切れたんだよねっ？》

「いや、俺様の意志で切った」

《ひどいよアカツキ君》

「用件を言え」

早く言わなかったり、冗談を言えば、またすぐに切られそうだ。

声にそういうプレッシャーが含まれていた。

《通信を傍受してわかったんだケド、ナゴヤ港で近々事件が起きるっばいよ》

「すぐに向かう」

《詳細は》

話の途中でアカツキは通信を切った。

再び通信機が鳴ることはなかった。

「行こう、紅華」

アカツキはだれに声をかけたのか？

納屋にはアカツキ以外だれもいなかった。

乗心地は良いとは言えなかったが、二人を乗せた猪は自動車並みのスピードで、一路街道をひた走った。

「うつつ……ちよつと休憩してもらっても……」

今にも吐きそうな顔をしてケイは、炎麗夜を後ろから抱きしめ必死につかまっていた。

「さつきも休んだばかりじゃあないか」

「すみません、さつき食べたおむすびが大地に還りたがってます」

道が悪いことよりも、猪の走り方に問題がある。タイヤが回転し

て進むのと違い、脚を動かせばどうしても縦揺れしてしまう。
炎麗夜の超乳も、ビキニから溢れそうなほど縦揺れしている。も
うすでに、鶉色の輪郭が出ているような気がしないでもない。

ケイはもう限界だった。

「……吐く」

余裕のないか細い声を出してすぐ、

「うっ」

ほっぺたを膨らませた。

その気配を炎麗夜は背中で感じた。

「呑み込め！ 無理なら後ろに吐け！」

どっちも過酷な要求だった。

口腔の容量限界を越えたケイは、涙を流しながら後ろを向いた。

ブフォオオオオオオオオオオオオオーッ！

燦然と輝くシャンパンシヨット。

ちよっと酸味が強いシャンパンだった。

無言の二人。

ケイは黙々と口をゆすぎ、何事もなかったように、再び炎麗夜に抱きついて揺られた。

やがて海岸線が見えてきた。

海辺の街道に合流し、そこからさらに町へと向かう。

風が運んでくる磯の香り。

「あれ、海が臭くない」

驚いたようにケイは言った。

「磯の香りはいい匂いに決まってんだろう」

「なんか海って臭いイメージあつたんですけど」

「魔都近くの海は少し臭かったなあ」

「行ったことあるんですか？」

「ニホン全国走り回ってるからね」

自称走り屋だが、まさかそれが職業ではあるまい。

「炎麗夜さんって職業なんですか？」

「走り屋だよ」

「え？」

「旅暮らししながら、その土地で仕事探すって感じかね。このスピード生かして荷物運びが多い……かな」

そういう暮らしが成り立つんだと、ケイは驚きと感心を覚えた。猪のスピードが上がった。

「もうすぐナゴヤ港に着くよ！」

炎麗夜の言葉通り、船が見えてきた。

停泊している船はどれも帆がついている木造船だ。小型の船舶ばかりだが、一つだけあった大型の船を炎麗夜は指差した。

「あれは外国の貿易船だね」

「貿易つて、鎖国してるから海外と外交ないんじゃないですか？」

「は？」

「なんか変なこといつちやいました？」

「ごめんごめん、旅暮らししてなきゃ知らないってこともあるだろうね。鎖国つて言っても、すべての資源を自国でまかなえるわけじゃないさ、特に貴金属はね。民間の貿易は禁じられてるが、政府はちやあんと外とのパイプを持つてるさ」

江戸時代の鎖国も、外交や貿易の権限を幕府が制限や管理しているだけで、完全に閉ざされていたわけではない。

レンガ造りの倉庫街が見えてきた。

炎麗夜はなにやら倉庫を一つ一つ確認しているようだった。

「貳番倉庫つてどこなんだろうねえ」

「そこに行くんですか？」

「とりあえず仲間と合流しとかなないと……あつたあつた参番、貳番、おっ！」

炎麗夜の視線の先をケイも見た。

ビキニ鎧を着た三人の娘が立っている。一人はこちらに手を振っているようだ。

黄金の猪が倉庫と娘たちの前で止まった。

外ハネのシヨートヘアの娘が炎麗夜に詰め寄ってきた。

「総長遅いですよお」

今度は内ハネのシヨートヘアの娘が近寄ってきた。さっきの娘と顔が似ている。

「炎麗夜さま、心配したのですよ？」

この顔の似ている二人は姉妹だろうか？

歳はだいたいケイと同じくらいに見える。

最後に近付いてきたのは、羽根飾りのついた西洋風の兜を被った凜とした女。

「炎麗夜様、あれほどはぐれないようにと、申し上げた筈でござい
ますが？」

「はぐれたのは三人のほうだろう。おいらは先頭を走ってただけさ」

「ふ〜れ〜い〜や〜さ〜ま〜」

女は呪詛でも吐くように炎麗夜の名前を呼んだ。怒っているのは明らかだ。

すぐに炎麗夜は話題を逸らそうとした。

「紹介するよ、道すがら保護した乳友のケイだよ！」

炎麗夜に背中を押されてケイが前に出た。

「はじめましてケイです。炎麗夜さんには野盗に襲われそうになっ
たところを助けてもらって」

ニッコリ笑顔の外ハネ娘が、ケイの両手を取って握手をしてきた。

「よろしくっ！ ウチが風羅ふうらで、こつちが妹の風鈴ふうりん」

名前を呼ばれた内ハネ娘が頭を下げた。

「はじめまして、風鈴と申します」

姉とは対照的にお淑やかな雰囲気だった。

最後に残った女は片手で握手を求めてきた。

「わたくしは颯さつ鳴空なづなと申す。炎麗夜様の乳友ならば、我らとも乳友
だ。今後ともよろしく頼むぞ」

「はい、よろしく願います」

ケイはちょっぴり笑いを堪えるのが必死で、口の端が引きつって

しまっていた。端正で真面目な顔をした颯鳴空が、平然と、しかも低音ボイスで？乳友？と言うのがツボにハマってしまったのだ。

乳友ということで、やはりこの三人娘も豊満な胸の持ち主だった。炎麗夜には及ばない、ケイと同じくらいの爆乳レベルだ。

颯鳴空が炎麗夜に耳打ちをする。

「この者もエクスダスさせるのですか？」

「その話はしてない。悪い奴じゃあないから、話しても平気だろうさ」

「悪人でないことと、信用できるというのは同義語ではありませんぬ」

「おいらの見る目はたしかさ」

目の前でヒソヒソ話をされると、どうしても気になってしまっものだ。

「あのお、あたし席外しましょうか？」

ケイが言うと、炎麗夜は笑った。

「もう済んだから平気さ。ケイにも話してやるよ、ただ場所を変えよう」

こうして四人は周りの目を気にしながら、参番倉庫の中へと入ったのだ。

第5章「エクソダス」

倉庫の中は女たちでひしめき合っていた。

だれを見ても胸が大きい。

そう、ここにいるのはみんな巨乳以上なのだ。

いったいなんのためにここに集まっているのか？

「このみなさんって炎麗夜さんの走り仲間ですか？」

ケイが尋ねると炎麗夜は手を振って否定した。

「違う違う、ここにいるみくん、エクソダスさせるのさ。運び屋

史上初の大仕事になるね」

「ええっと、エクソシスト？」

ぜんぜんケイは言えてなかった。

颯鳴空が淡々と訂正する。

「エクソシストではない、エクソダスだ。つまりここにいる全員を国外に亡命させる」

旧約聖書にある出エジプト記をエクソダスと云う。そのエピソードから転じて、大量の国外脱出をエクソダスと呼ぶのだ。この世界も同じ出典であるとは限らないが。

「マジ？」

ケイは驚きを隠せない。

正確な数まではわからないが、三百人くらいはいるのではないだろうか？

外で見た貿易船一艘ではとても収まらない。

当然の疑問をケイは投げかける。

「こんなにたくさんの人をどーやって？」

炎麗夜がちょっと嬉しそうにニヤツとした。

「じつはすっごいもんがあるんだ。デーモン って知ってるかい？」

「たぶん」

「政府が密貿易に使ってる鯨型のデーモンがあるらしいんだ。それをかっぱらって、みんなをエクソダスさせようと思ってるのさ」

この目でケイはデーモンを見たが、たしかそれは巨大な翼に変形するキツツキだった。鯨型のデーモンで、どうやって大人数を亡命させるのかわからない。鯨がなにかに変形するのだろうか？「やっぱりよくわかんないです。デーモンのこと。乗ったりできるんですか？」

「ここまで乗ってきただろう、おいらの黄金の猪フレイに」

「あれもデーモンだったんですか!？」

ケイと炎麗夜の間、風羅が身体を割り込ませてきた。

「ちなみにウチら姉妹のデーモンはネコ型なんだ」

「じゃあ颯鳴空さんは？」

ケイは尋ねながら颯鳴空に顔を向けた。

「ホーヴアルプニルという白馬だ」

そう言えば、炎麗夜とケイが出会ってすぐ、それら動物の名前が口にされていた。今になってケイは猫に乗るといのが、なんだか納得できたのだった。

しかし、この目で見ても動物が変形するという現象が、ケイには信じがたかった。

「デーモンって合体ロボットかなんかなんですか？」

動物ではなく機械なら納得もできる。あの変形の仕方は、機械仕掛けとは思えない生物的なものだった。

炎麗夜は首を傾げた。姉妹もわからないようだ。三人は颯鳴空に示し合わせたように顔を向け、遅れてケイも振り向いた。

「デーモンはロボットというより、サイボーグに近いものだと思う。旧エデン遺跡で見つかる聖遺物と同じで、ブラックボックス扱いで詳しいことはなにもわからないのだ」

ケイはぼか〜んとしてしまった。この世界で受けた説明はいつもこうだ。

そして、風羅はこう付け加えた。

「早い話が リンガ のウチらでも、まそつじゆう魔装獣 ってなんだかわからないってこと」

またケイの知らない単語が付け加えられてしまった。

「みんなにいわなきゃいけないことがあるんだけど、あたし記憶喪失でみんな知ってるような言葉もすっかり忘れちゃってるんだよね」と言っておけば、わかりやすく説明してくれるかもしれない。

炎麗夜がケイの背中をポンと叩いた。

「水くさいじゃあないか、言ってくればいくらでも力になるのに記憶を取り戻す手伝いくらいしてやるよ、乳友だろう？」

しかし、風鈴は控えめにこう言った。

「戻らないほうが良い記憶もありますわ。記憶を失う切っ掛けはなにか覚えていないのですか？」

「そんな気を遣ってもらわなくて、あたしぜんぜんへーきだし。たまにみんないってる言葉の意味がわからないくらいで、 リンガ とか 魔装獣 とか」

ケイに続いて颯鳴空が話す。

「記憶喪失でなくとも、 デーモン を知らなければ知らないのも当然だ」

そして、ケイの疑問は風羅が答える。

「 リンガ っていうのは 魔装獣 の契約者のこと。 魔装獣 ってのは デーモン の別名だよ。ほら、獣の姿をしてるでしょ？ あたしは デーモン よりそっちの呼び名のほうが好きなんだ」

「へえ」

ケイは何度も小さくうなずいた。

魔導装甲機体 通称 デーモン 。またの名を 魔装獣 。契約者のことを リンガ と呼び、契約した相手を ヨーニ と呼ぶ。というのが今までケイが知ったことだ。

さらに風羅が説明を続ける。

「 魔装獣 は獣の姿をしてるんだけど、変形して リンガ と合体することができるんだ。装着するっていうより、身体の一部にな

る感じかな。その状態を ムシャ 化つていうんだよ。あと リンガと ヨーニ は契約すると、お互いの身体のどこかに刺青みたいな紋章が浮かび上がるんだ。ウチはここ」

と、いきなり風羅はビキニパンツを少し下ろした。

驚いて瞳を丸くしたケイだったが、よく見ると風羅の片方だけ見えたヒップに、地図記号などに似た幾何学的な模様が刻まれていた。颯嗚空は自分の右太股を指差した。

「わたくしはここだ」

風羅と似ているが違う模様だ。

そして、なんと炎麗夜はビキニを外しておっぱいを丸出しにした。「おいらはこの下乳のあたりにあるだろう？」

超乳を持ち上げて見てくれるのはいいが、ちょっと大胆すぎだ。同性のケイもちよっぴり照れてしまう。

最後に残った風鈴は急に顔を真っ赤にして、両手を胸の前で振った。

「わたしは駄目です、絶対に見せられませんわ！」

いったいどこにあるのだろうか？

意地悪そうに笑った炎麗夜はケイにそつと耳打ちをした。

それを聞いたケイは驚いた顔して、真っ赤になってしまった。

風羅や炎麗夜よりも、スゴイところにあるのだろう。

集まった女たちが口々にしゃべる喧噪の中に、張り上げた声が微かに聞こえた。

それにいち早く気づいたのは風鈴だった。

「炎麗夜さま、どなたかがお呼びになっていらっしやいますわ」

ほかの者は耳を澄ませた。

「炎麗夜姐さ〜ん、シキです！ いたら返事してください〜い！」
女の声が少しずつこちらに近付いてくる。

炎麗夜は手を高く上げて振った。

「ここにいるよあ〜っ！」

その声で人影がこつちを見た。

「いた！」

テンガロンハットを被った背の高い女だ。ホットパンツから伸びる脚は鍛えられているが、とてもしなやかそうで、ビキニに包まれた胸は炎麗夜並みの超乳だ。

シキが超乳をたぶんだぶん揺らしながらこちらに駆け寄ってきた。「遅れちゃってごめんねえ、なんでも屋のシキです」

駆けて来たシキは、そのまま炎麗夜に飛び込んで、その胸をわしづかみにして豪快に揉んだ。

「愛してるよマイハニー！」

「あぁん」

炎麗夜は頬を紅潮させ、鼻から甘い吐息を漏らした。

だが、次の瞬間には顔を真っ赤にして頭に血を昇らせた。

「変態女！」

炎麗夜の平手打ちがシキの頭ごとテンガロンハットを吹っ飛ばした。

「いてててて」

両手で頭を抱えてしゃがみ込んだシキ。

ケイは自分の足下に落ちてきたテンガロンハットを拾い、それをシキに渡そうと手を伸ばした。

「どーぞ」

「ありがとう可愛いセニョリータ」

シキも手を伸ばしたが、その手はテンガロンハットを通り越し、ケイの胸を揉んだ。

「あうっ」

不意打ちを喰らってケイは変な声を出してしまった。

が、すぐに冷静に戻る。

「ちよっ、なにするんですか、このセクハラ女だれなんですか炎麗夜さん！」

「なんでも屋のシキだよ。重度の女好きなんだ女なのに。軽い感じだけど、敵が男のときは容赦しないもんだから、？死？ぬって字に

？鬼？つて書いて、胡桃割りの死鬼しきなんて呼ばれてんだ」

「クルミ割り？」

「男のアレをギュツと絞めるのさ」

炎麗夜、シキ、風羅はドツと笑った。

が、ケイはドン引き。

笑いも治まり一段落したところで、シキが少し真面目な顔をした。

「そろそろ仕事の話ししようか」

炎麗夜も真面目な顔をした。

「見つけたのかい？」

「うん、なんでも屋のシキにできない仕事はないよ。政府の鯨型の

デーモン っていうのは、存在してなかったよ」

「なにい！？」

炎麗夜は驚きと共に落胆した。

慌ててシキが口を開く。

「待つて待つて、話には続きがあるんだ。鯨型のデーモン ではなくて、別の形をしてたんだよ」

「それを早く言えよ、つたく」

「姐さんが早とちりしたんじゃないか、もお」

炎麗夜に舌打ちされて、シキは少し頬を膨らませた。

だが、すぐに気を取り直してシキは話を続ける。

「異形型のデーモン でベヒモスっていうらしい。積み荷を降ろしてたところを見たんだけど、あれはすごいよ、クジラなんかよりもっとおつきかったんだ。全長は五〇メートル近くあるんじゃないかな。見た目はカバみたいなのセイウチみたいな、ゾウみたいな感じだったかな。さらにすごいことに水陸両用らしいよ、陸のスピードはトロそうだけど」

炎麗夜はうなずいた。

「なら今夜予定どおり結構だ。みんなにも伝えとくれ」

三人娘とシキが集まった女たちに伝えて回る。

残った炎麗夜はケイに顔を向けた。

「ケイはどうする?」

「どーするって?」

「この国を出たいとは思わないかい?」

「……………」

ケイはほかの国に行きたいわけではない。元の世界へ還りたいのだ。

「巨乳でいる限り政府にいつ捕まるかわからないよ?」

炎麗夜の言うとおりだ。

帰る方法を探していればいいだけはない。政府や賞金を狙う奴らからも逃げなくてはいけないのだ。

「あたしは……炎麗夜さんたちもやっぱりいつしよに行くんですよね?」

「送り届けるまでが仕事だからね。でも帰ってくるよ、この国に」

「どーして!?!」

「この国で生まれ育ったからね。この国が好きなのさ」

微笑みを浮かべた炎麗夜。

逃げ延びることも一種の戦い。

「おいらのこの胸は誇りさ。中には辛い思いして、闇医者に胸を除去してもらった女もいる、その決断も仕方がないと思う。でもここにいるみんなは胸を捨てられないんだ。捨ててもヒミ力病だったらまだ胸がデカくなる。検査しようにも、検査機関は政府の直轄しかない」

「あたしは……炎麗夜さんに付いていきます」

「それは国を出るってことかい?」

「違います。あたしもみんなを送り届けて、炎麗夜さんと帰ってきます。だって、あたし行くところがないんです。独りじゃ心細くて、なにもできなくて……………」

「記憶喪失で帰る場所も覚えてないんだね、可哀想に」

炎麗夜はケイを胸に抱いた。

帰る場所を覚えてないのでなく、還れないのだ。

この国を出ても、そこはケイの還るべき場所ではない。

ここで炎麗夜と別れば、またこの世界で途方に暮れてしまう。ケイができる選択は限られていた。

「おいらがケイのことも送り届けてやるよ。なんたって、おいらは一流の運び屋で、ケイの乳友だからね！」

「……ありがとう」

ケイは炎麗夜の胸の中で涙を零した。

心から漏れた『ありがとう』という言葉。

しかし、送り届けると言われると、それが逆に苦しみを生む。

そんなことできるのだろうか？

気持ちはありがたいが、不安が大きい。

不安によって気持ちが沈んでくると、記憶喪失という嘘も罪悪感を覚えてくる。

「……炎麗夜さん、じつは」

瞳を真っ赤にしながらケイは顔を上に向けた。

「なに泣いてんだい？」

「嬉しさとか不安とか、頭の中をぐちゃぐちゃして……だいじよぶ、根はポジティブですから、ちょっといろいろあつて疲れただけなんです」

「泣きたいならいっぱい泣きな。どんな相談だって乗ってやるよ。なんたっておいらたち乳友だろう？」

自分のことを思ってくれている炎麗夜の気持ちを感じ、さらに嘘をついていることがケイを苦しめる。

「あたし……ウソついてました……記憶喪失じゃないんです」

「は？」

炎麗夜は少し驚いたようだ。

「帰る場所だつてあるんです……でも帰れないんです」

「どういうことだい？」

「……ごめんなさい、やつぱり今は話せません。落ち着いたら聞いてくださいね、炎麗夜さんなら話せますから、あぁー！」

突然、ケイが変な声をあげた。

そつと後ろから忍び寄っていたシキに、胸のポッチを摘まれたのだ。

「なに二人でしっぽりしてるのかあ〜？」

シキは濡れた唇でケイの耳元に囁いた。

ゾクゾクつと身を震わせたケイは、顔を真っ赤にした。羞恥ではなく怒気だ。

「年上だからって容赦しないんだからあ！」

ついにケイがキレた。

叫んですぐにケイはシキを押し倒し、馬も乗りになって反撃に出た。

つき立ての餅のように柔らかい超乳をこねくり回す！

「あああッ！」

背中を弓なりにしてシキが甘い声をあげた。

指に吸いついてくるほどの軟乳を触りながら、ケイは思わずつぶやく。

「この触り心地ちょっとクセになりそう、えへっ」

新たな性癖に目覚めたケイだった。

第6章「パイプ・カハ」

決行の夜。

エクソダス　つまり大量の国外脱出をさせるため、準備や作戦は綿密にされていた。勢いさえあれば成功するものではないのだ。人目に付きにくい深夜の闇に隠れて行動する。

大人数を一度に動かすわけにはいかず、チームに分けて順番に移動させる。まずは、その移動ルートを確保しなくてはならない。

炎麗夜から離れないようにしていたケイは、いつの間にか最前線の戦闘チームに混ざってしまっていた。

倉庫街の壁に背を付けながら、ケイは不安そうな瞳で炎麗夜を見た。

「あたし戦えないんですけど」

「おいらが守ってやるさ、絶対に離れるんじゃないよ」

「死んでも離れません！」

「しっ、声大きい」

「……………」

口を結んだケイはしゅんとした。

闇の中から足音もさせず、風鈴がやって来た。その身体は毛に包まれ、猫のような耳やしっぽが生えている。ムシャ　化したのだ。

「見張りはみんな薬でぐっすり眠ってしまいましたわ。姉さんが

ベヒモス　を浮上させ次第、シキさんが連絡に来ます」

「問題は船員だね。浮上したら一気にカタを付けなきゃあ騒ぎになっちゃう」

と、炎麗夜は身を引き締めた。

身を潜めながら静かに待つ。

その時間はケイの緊張を高めた。

静寂の中で、心臓の高鳴りだけでなく、もっと耳を研ぎ澄ませれば、汗の落ちる音さえも聞こえそうだった。

「昼の暑さが余韻を残し、深夜になっても蒸し暑い。緊張も相まってケイはのどがカラカラだった。口の中がどろりとしてしまう。」

三〇分が過ぎても音沙汰がない。

後続にいる女たち不安がっているのが、ケイのところまで感じられた。

一時間が過ぎた。

じつと立っていたために、ケイの脚は痺れてきてしまった。

それからしばらくして、何者かの影がこちらに忍び寄ってきた。

警戒が高まる。

「おまたあ〜っ！」

大きな声を出したシキが、こちらに手を振ってきた。

炎麗夜はムツとする。

「大声出すなアホ！」

という炎麗夜も思わず大声だった。

シキはニコニコ笑顔だ。

「だいじょぶだって、もうみんな寝てるし。もちろん船員もねっ」

炎麗夜は少し不思議そうな顔をして、次の瞬間驚いた。

「船員も？」

作戦では海中にいるベヒモスを浮上させて陸付けしたあと、一気中に乗り込んで敵を制圧するはずだった。

「船員に寝てもらうのにちよっぴり時間がかかったんだ。なんでも屋シキのサービスだよ」

シキの身体には傷一つなく、息を切らすような疲れた様子もない。炎麗夜の驚きは増した。

「たった二人で……船員は政府の精鋭が揃ってるってえ話だが？」

「大したことなかったよ、ボクひとりで十分だった。風羅ちゃんには自分の仕事だけやってもらったよ」

「信じてないわけじゃあないんだが……作戦はちよいと変わったけど、気を引き締めて行くよあんなたち」

後ろの女たちに合図を送って、炎麗夜は先頭を切って走り出した。月光に照らされる女たち。今宵はまだ満月ではないが、女たちの胸はだれもが満月のように豊満だ。

しばらく駆けると、港湾内に埠頭が見え、それと共に巨大な怪物の姿が見えてきた。

まさにそれはシキの例えたとおり、河馬かばのようであり、海象せいじうちのようであり、象のような異形の存在だった。

乗り物とは決して思えない魔獣ベヒモスは、その口を大きく開きケイたちを待ち構えている。その巨大な口は一五〇度近く開き、長く尖った歯が数本生えている。特に下顎の犬歯は軽く五メートルはありそうだ。

ケイはシキの腕をつかんで引つ張った。

「まさか口の中に入るんじゃないよね？」

「入るよ、あれ潜水艦だもん」

「……………」

ケイの動揺に構わず炎麗夜は魔獣の口腔に突撃した。

置いて行かれると思ったケイは慌ててあとを追う。

口の中に足を踏み入れた瞬間、ケイの身体を悪寒が駆け巡った。

「キモッ！」

泥沼に足を突っ込んだような感触。柔らかいだけでなく、少し粘つくのだ。

これ以上中に進むのも躊躇われるが、ここにいるのも堪らない。

炎麗夜はすでに奥に入ってしまったし、ケイは勇気を振り絞ってさらに中へと進んだ。

瞳を丸くしたケイ。

そこには驚きの光景が広がっていた。

入り口は生物の口腔だったが、奥に進んでみるとそこは巨大な倉庫そのものだった。壁や床はどんな物質でできているかわからないが、無機質な印象を受け凹凸もない。かまぼこ型のワンルームが広がっていた。

電灯はあとから取り付けられたらしく、配線がこちら側に見える。

その光が届く片隅に、鎖で縛られたプロテクターを付けた男たちが、気絶させられたいた。おそらく船員たちだろう。少し離れたところには、銃やサーベルなどの武器も山積みになっている。

この船員たちを外に放り出す作業をすると共に、待機させていた仲間を少しずつ艦内に移動させる。さらに航海に必要な物資も運び入れた。

問題も起こらず作戦は進められ、炎麗夜は少し眉をひそめた。

「まさかこんな簡単に事が運ぶなんてねえ（なにか起きなきゃあいいけど）」

あまりに事がうまく運びすぎると、逆に不安が脳裏を掠めてしまう。人間の心理だ。

艦内に設置されたスピーカーが震えた。

《総長！ 全員乗り込み完了しました！》

風羅の声だ。

「聞こえるかい風羅？ 長居は無用、さっさと出航するよ！」

炎麗夜は天井を見回しながら叫んだ。

《オツケーです。ハッチを閉めてベヒモス（ヒューズ）號出航します、みんな準備して！》

ケイは揺れに備えたが、出航は静かなもので、本当に走り出したのかわからないほどだった。

しばらくすると女たちが歓喜しはじめた。

無事に二ホンの大地を離れることができた。まだこれから航海の日々が続くというのに、すでに外国に亡命できたかの喜びようだった。

自然と宴がはじまった。

酒が酌み交わされ、歌声がそこから中から聞こえてくる。脱ぎだして踊る者まで出てきた始末だ。

開放的な雰囲気包まれ、吞まれていく。

だれもが気を弛ませ、盛り上がりが最高潮に達したとき、それは起こった！

片隅に置かれていた木箱が内部からぶち破られ、紅い人影が飛び出してきたのだ。

叫び声が上がった。

宴の騒ぎで全員が気づくまでに時間を要し、波紋のように打ち碎かれた切望が広がっていった。

《敵襲ーッ！ カラミティ・アカツキだ！》

艦内に風羅の声が響き渡った。

次の瞬間だった。ほかの木箱も次々とぶち破られ、三人の女が中から現れたのだ。

赤毛のマツハ は舌打ちをした。

「なんでアタイら以外にもいるんだ……しかも変態野郎が」

マツハと同じく翼を持ち、紫色の毛に包まれた全裸の妖女があとに続いた。

「ちょうどいいじゃない。あの忌々しいアカツキの坊やも殺せるのよ」

最後に言葉を発したのは、漆黒の翼で大きな風を起こし、漆黒の鎧に包まれた鴉のような女戦士だった。

「寝静まったところを一網打尽にする作戦も泡と化した」

三人の凶鳥。

《バイブ・カハ三人衆まで、戦闘に備えて！》

騒然とする艦内。

多勢に無勢と言いたいところだが、炎麗夜側はほとんど一般人だった。武力で抵抗することもできず、巨乳狩りから逃げ続けてきた女たちなのだ。

急にマツハと紫の女　ネヴァンが睨み合いをはじめた。仲間同士でなぜ？

「アカツキを殺るのはアタイだ！」

「アンタまだ怪我も治ってないでしょう。また返り討ちにされるだ

「けよ、黙って見てればいいわ（死に損ないのクセに）」

「オマエだつてアカツキにやられたクセに！」

「なによ、あときはちょっと油断しただけよ」

睨み合いを続ける二人の間に漆黒の女戦士が割って入る。

「どちらが先に狩れるか勝負すればいい。ほかは私がひとりで始末する」

「さすがモーリアンお姉様だわぁん」

ネヴァンが感心している間にマツハはアカツキに突撃していた。

それを見たネヴァンが般若の形相をした。

「この糞ニア！」

「早い者勝ちだ莫迦女っ！」

マツハはネヴァンをあざ笑い、遅れてネヴァンもアカツキに仕掛けた。

この出来事は炎麗夜たちにとっては好都合だ。敵が互いに潰し合い、こちらに向く敵の数が一人になってくれたのだ。

炎麗夜が叫ぶ。

「ヨーニ 召喚！」

空間が歪み、その中から黄金の猪フレイが召喚された。

フレイに乗った炎麗夜がモーリアンに向かって突進する！

「行け、行け行け、イカしちまえ！」

猪突猛進してくる炎麗夜を迎え撃つモーリアンは、漆黒の剣を抜いて切っ先を前方に向け構えた。

炎麗夜は曲がることなく一直線にモーリアンに突撃しようとした。

バーニングゴッドアタック

「爆裂撃神！」

さらに加速したフレイが金色こんじきのオーラに包まれた！

この衝撃を喰らえば人間など一溜まりもない。

しかし、切っ先はフレイの眉間に向けられたまま、モーリアンは微動だにしない。

衝撃は強ければ強いほど、その反動は凄まじい。

ついにフレイと漆黒の剣が激突した！

激しい衝撃波が巻き起こった。

まるで時間が止まったように、身動き一つしないフレイとモーリアン。

切っ先はフレイの眉間に当たって止まっていた。

力と力の均衡。

モーリアンは両手で柄を握り、全神経と力をそこに集中させている。

この勝負、炎麗夜に分があった。

「フレイの日緋色金ヒレイロカネは剣なんかじゃ貫けないよっ！」

自由の身であった炎麗夜がモーリアンに殴りかかった。

巨大猪に押しつぶされるか、それとも炎麗夜に殴られるか 殴られて力が弛めば同じこと。

ならば一矢報いて主人リンガを伐つ！

モーリアンが剣を矢のように投げた。

刹那に響く鎖の音。

眼を剥きながらモーリアンは身体を大きく吹っ飛ばされた。

炎麗夜は無傷。

モーリアンの剣は絡め取られていた鎖から解放され、音を立てて床に落ちた。

鎖を鞭のように放ったのはシキだった。

「仕事は出航までだったんだけど、降り損なっちゃって。これはビール一杯の貸しね」

まだ炎麗夜には多くの仲間がいる。

上半身は人間、下半身は馬、まさにその姿ケンタウロス。しかしその馬は翼の生えたペガサスだった。

ムシャ 化した颯鳴空が槍を構えて、宙から突き刺さんと襲い掛かる。

「輝速突き（シャイニングスピードピアス）！」

だが、その槍はモーリアンを貫くことなく、床を突いた。モーリアンはその翼で宙へ舞い上がり逃げたのだ。

ここの天井は高い。空中戦を繰り広げることも可能。だが、それに参加できる者は宙を飛べる者。

「任せたよ颯鳴空！」

炎麗夜は宙にいる颯鳴空に向かって手を振った。

颯鳴空とモーリアンの一騎打ちがはじまった。

一方、戦えない者たちの安全は、風鈴が確保していた。

「みなさん大丈夫です、この半透明のドームは一切の攻撃を無効にいたします！（これだけ巨大な かばう はどれくらい保つか……）」

「

風鈴はその場から一步も動いていないが、大量の汗を滲ませている。そして彼女を中心に広がる半透明のドームが、女たちを包み込んでいた。おそらくバリアかなにかの能力だろう。

しかし、一つ問題が発生していた。

ドームを外から叩くケイの姿。

「ちよつと中入れてよ、このままじゃ死んじゃう！」

外に取り残されたのだ。

その声を微かに聞いて風鈴が大声を出す。

「ごめんなさい。一度この ムゲン を解くと、次に発動するまで時間がかかるので、解けません。どうかご無事で！」

「……えっ！」

見捨てられた。

ケイは慌てて辺りを見回した。

アカツキ、マツハとネヴァン、そして炎麗夜の仲間たちが三つ巴の戦いを繰り広げている。

空中では颯鳴空とモーリアンが激突している。

最後に目に入ったのは炎麗夜とシキだ。

「炎麗夜さん守ってくださいあゝい！」

叫びながらケイは炎麗夜に駆け寄った。

しかし、同時に炎麗夜たちに向かっていている者がいた。

「糞オツ！（なにがジャンケンにしようだ毒女！）」

そう叫びながら向かってきたのはマツ八だった。ネヴァンと狩りを競っていたが、その争いが互いの攻撃を邪魔して敵に押されてしまったため、やむなくジャンケンでアカツキと勝負する権利を奪い合ったのだ。

結果は憤怒しながら炎麗夜たちに襲い掛かる姿を見れば明らかだが、マツ八は自慢の音速移動ではなく、通常の数倍で床を蹴り上げ走っていた。

マツ八は走りながら、その翼から血を滴らせている。アカツキに斬られた傷がまだ塞がっていないのだ。

ケイのほうが先に炎麗夜の元に来たが、すぐにマツ八も来そうだ。誰かを守りながら戦うことは困難を極める。

鎖を構えたシキがケイと炎麗夜を守るように立った。

「ケイちゃんのこと頼んだよ。　ヨー二　召喚、　ファルス　合体！」

歪んだ空間から巨大な狼にいた魔獣が召喚され、その肉体が不気味に蠢き変化しながらシキの身体を包み込む。

その光景はおぞましく、まるで水ぶくれが全身を這っているように見える。

だが、それはやがて真の形を見せはじめた。

それはまるで毛の生えたライダスーツだった。

テンガロンハットをシキはケイに投げて預けた。

その頭には犬のような耳。尻からは蛮刀のような尻尾が生えていた。

「魔導装甲機体ダブル零式フェンリル！」

ムシャ　化したシキがマツ八を迎え撃つ。

「女の子にはレーシングで十分さ！」

白銀の鎖がシキの手から放たれた。

同時にマツ八の翼からフェザーアローが豪雨のように撃たれていた。

白銀の鎖レーシングが生き物ように動き、フェザーアローを叩き

落とす。

だが数が多い！

「さっきのは撤回　行けドローミー！」

黄金の鎖ドローミーをもう片方の手から放ったシキ。

しかし、マツハの羽根は撃った次の瞬間から生え替わるものだった。

「死ね死ねミサイルだ、死ね死ねーッ！」

それは雨やミサイルなどという生やさしいものではない。マツハの撃った羽根は壁のごとく飛んできた。

「ごめん防ぎきれない姐さん！」

シキの叫びが木霊した。

二本の鎖の包囲網を越えた羽根が戦うことを知らないケイに！

「きゃっ！」

叫び声をあげたケイは眼を硬くつぶった。

第7章「黙示の魔獣たち」

「ファルス 合体！」

炎麗夜の勇ましい声が響いた。

眼をつぶっていたケイのまぶたの裏で輝く金色^{こんじき}。まぶたを閉じていても、その光で目が眩んでしまった。

羽根はケイの身体をいつまで経っても貫かなかった。

眩い光の中でケイはゆっくりと眼を開けた。

そこに見えたのは超乳。ケイは炎麗夜に抱かれ、黄金の毛皮のマントで身体を包まれていたのだ。

「おいらとフレイの ムゲン は 崇高美 。 何者もこの造形美を崩すことはできないのさ！」

崇高の域に達した美には触れることすら叶わない。抱かれているケイも、じつは数ミリほどの隙間で炎麗夜から離れていた。

しかし、じつは弱点もある。

「無闇に動いて無様な姿晒すと、この ムゲン は無効になるんだ（あと万が一だけど、この美しさに勝る技とか喰らったらね）」

炎麗夜はケイにコソツと囁いた。

犬耳をピクピクと動かしたシキが振り返った。

「今のボク耳がよくて、聞こえちゃったんだけどだいじょぶ？」

「シキとおいらは乳友だろう！」

炎麗夜は親指を立ててグッドマークを送った。

崇高美 によつて炎麗夜とケイの安全は確保された。

これでシキは心置きなく戦える。

「掛かっておいで小鳥ちゃん」

余裕の笑み。

その笑みはマツハの怒りを買った。

「そんなに笑いたいなら、口を耳まで引き裂いてやるよ！ 死ね死ねミサイル！」

羽根のミサイルが連続して撃たれた。

二本の鎖が宙をうねり狂う。

銀色の鎖レーズングは変幻自在に動き、次々と羽根を叩き落とす。そして、もう一本の鎖　金色のドロミがマツハに向かって飛んだ。

その速さと威勢は飛ぶ鳥を落とす勢い！

翼の傷口から血が滲ませたマツハだったが　。

「くっ！」

ドロミを躲すため、音速で移動した。

しかし長くは保たない！

血が床に落ちた。

その場所にシキは二本の鎖を放った。

一本目のレーズングは紙一重で躲したが、二本目のドロミにマツハは捕らえられた。

「脚がッ！」

鎖によって足首を捕らえられたマツハは転倒した。

その隙を逃さず、別の鎖によってマツハの身体を巻き、動きを完全に封じた。

「カゴの鳥より酷い扱いだけど、許してね」

シキはニツコリ笑った。

「放せ、放せ放せーッ！」

喚き散らすマツハだが、鎖を引き千切る怪力は持っていなかった。

もう手も足も出ないマツハを見てケイも喜んだ。

「やったねシキさん！」

「お礼はー〇おっぱいでいいよ」

「なんですかー〇おっぱいって……（イヤな予感）」

「もちろんー〇回おっぱい揉むってことだよ。おっぱいは二つあるから、合わせると二〇回ね」

「イヤです、やったらやり返しますよ！」

「それもいいね、うふ」

逆に相手を悦ばせてしまいそうだ。

おどけていられるのも、ほんの少しの時間だった。
血塗られた二本の刃。

紅い影と漆黒の影がこちらに鬼気を放ちながらやって来る。

アカツキとモーリアン。

炎麗夜が叫ぶ。

「仲間や颯鳴空はどうしたッ！」

それは見るも無惨な光景だった。

白い月に浮かぶ紅色の蕾が花開く。

「そいつの連れはせいぜいDカップしかないから用はない。あとは全員……斬った」

アカツキの後方で、女の山が築かれていた。ネヴァンは重傷を負って、その場を動けないようだが、命はまだあるようだ。

「任務はあくまで連行だ。私は死を見ることに疲れている」

そう低く囁いたモーリアンの後方では、颯鳴空とペガサスが朱く染まって倒れていた。

炎麗夜の身体は打ち震えていた。

「……すまないケイ（みんなの仇はおいらが……）」

囁いた炎麗夜が飛び出すことを察したシキが止めた。

「待って！ ケイちゃんを守って……これ以上犠牲を出さないように。二人はボクが相手するよ」

「仲間や颯鳴空がやられた相手にひとりじゃあ無茶だよ！」

「そうなたらあととはよろしく」

一歩前に出たシキ。

シキ、アカツキ、モーリアンのトライアングルが形成された。

両手に握った鎖を強く握り絞めたシキが微笑んだ。

「一対、一対、一対だね」

が、しかし！

アカツキとモーリアンはシキに仕掛けてきた！

「えっ、マジ……二体一なのっ!？」

アカツキとモーリアンは商売敵だとしても、狙いは同じ 目の前の豊満な胸だ！

接近戦になる前にシキはレージングを投げ道具として、アカツキに放った。

レージングは華麗に舞うアカツキに躲された。

しかし、シキの狙いは別にあつた。

「グレイプニルだよ！」

レージングを放った手には、新たに七色の鎖が握られていた。

モーリアンが目の前まで迫っている。そこは七色の鎖グレイプニルの射程距離だつた。

グレイプニルがモーリアンの躰に巻き付こうとする！

「この程度で私を……なっ！」

まるで呪縛にでもかかったように、あっさりとモーリアンは捕らえられた。

簀巻きにされたモーリアンは転倒し、それに構わずシキはドロミでアカツキの刀を受けた。

「ギリギリセーフだつたね」

シキは両手でドロミを引っ張りながら握り、顔の目の前で刀を受けていたのだ。あと少し遅ければ、真つ二つにされていた。

素早くシキは動き、鎖で刀を絡め取り、その勢いで刀を遠くに飛ばした。

アカツキと離れた床に落ちた刀。武器を失ってしまったが、拾いに行くことをシキが許すはずがない。

肩の力を抜いてシキは微笑んだ。

「さつき余裕なかつたら説明しなかつたけど、グレイプニルはどんなものでも絶対に拘束する力があるんだ。欠点は一本しかないってこと。その一本をそっこのセニョリータに使った理由は簡単だよ」

その言葉を聞いてアカツキは清ました怒りを浮かべた。

「俺様のほうが弱いと？」

「そのとおりだよ。だってキミ、ものすごく顔色悪いし、息が上がっ

てるじゃないか。大人数を相手にしたからじゃないでしょ、もしかして病気かな？」

「心は少し病んでいる……が、肉体に問題はない！」

アカツキが駆けた。

武器を拾わずシキに向かった！

「霸ツ！」

アカツキはシキからまだ遠く離れた場所で回し蹴りを放った。

高下駄だ、高下駄を飛ばしたのだ！

迎え撃つドローミ！

シキはドローミで高下駄を叩き落とそうとした。

キン！

金属が打ち合う甲高い音。

ぶつかり合った高下駄と鎖 勝ったのは高下駄だった。

シキは驚きを隠せない。

「なんて重い下駄なんだ……そんなの履いて戦うなんてバカだよ」

高下駄は勢いを失わなかったが、鎖の一撃で軌道を外れ、シキと

は明後日の方向に飛んでいった。

だが下駄はもう一足ある！

すでにそれはシキの眼前にまで迫っていた。

ケイは息を呑んだ。

炎麗夜は言葉を失った。

グガッ！

恐ろしく鈍い音が響いた。

重い高下駄を顔面で喰らったシキが、床に吸い付けられるように

倒れた。

「シキさーん！」

悲痛なケイの叫び。

あんな物を喰らったら、顔の骨は粉碎してしまったに違いない。

だが、シキは鼻を押さえながらむっくりと立ち上がったのだ。

「いたたたた……可愛い鼻が折れちゃったじゃないか、怒るよホン

ト

もしかして軽傷なのか？

この隙にアカツキは刀を拾い上げ、ケイと炎麗夜に向かって駆けていた。

ドローミが宙を奔る。

「キミの相手はボクだって！」

ドローミが刀に絡まった。

アカツキはその場を動けない。動くためには刀を捨てなくてはならない。

「生きていたのか！」

「目の前の出来事が現実だよ」

シキは鼻を押さえたまま片手でドローミを手繰り寄せた。

抵抗するアカツキだが、その躰が少しづつ引っ張られていく。

そして、ついにシキとアカツキは一メートルのところで互いを見つめた。

アカツキは怪訝な顔をした。

「俺様は今まで負けたことはおろか、苦戦したことすらない……貴様なに者だ？」

「なんでも屋シキだよ」

「人間……ではないな？」

「さあ」

「それどころか……」

「それ以上いつたら握りつぶすよ。キミだって付いてるんだろ？」

妖しく微笑みながらシキは鬼気を放った。その妖しさは、アカツキを優っている。

さらにシキは続ける。

「それにしてもなんで気づいたの？」

「……………」

「だんまりしちゃうだよ。キミのその着物、魔導装甲機体だよ。そのムゲンの能力が関係あったりするのかな？」

「お互いくだらない詮索だ」

アカツキは刀を捨てて蹴りを放った。

長く伸びた美脚はシキの胸を捉えていた。シキもまだ躲してない。
い。

しかし外れた!?

狙いを誤ったわけでも、相手が避けたわけでもなかった。

轟音と共に艦内が大きく傾いたのだ。

《緊急事態ばかりなんだけど、正体不明の物体と衝突した模様。
今スクリーンの出すから見て!》

壁の一面が巨大スクリーンになり、そこに海中の様子が映し出された。

炎麗夜は首を傾げた。

「見えないぞ?」

ケイも同じような顔をした。

「魚一匹いないけど?」

だが一瞬、蛇の尾のような影が映り込んだ。

アカツキの首に鎖を巻き付けながら、シキは隠した鼻の下で苦笑いを浮かべた。

「久しぶりに見たよアレ」

再び艦内が揺れた。艦内と言うより、ベヒモス全体が揺れているのだ。

《あ……言いつらいんだけど、正体不明の生物に巻き付かれた模様》
またスクリーンに影が映った。

「きゃっ!」

叫び声をあげたケイの瞳に映った大海獣。

炎麗夜の輝きが少し弱くなった。

「な……なんだいあれ?」

その正体を知っている者がひとり。

「間違いない、リヴァイアサンだよ!」

シキが叫んだ。

艦内が一気にざわめき立ち、叫び声が次々とあがった。

恐ろしい大海獣が現れ、危機的状况なのはケイにもわかるが、その名前を聞いた途端こうなったことは理解できなかった。

「リバーズさんってなんですか？」

聞かれた炎麗夜が答える。

「生きた伝説だよ。二ホン近海にいたとは聞いてちゃあいたけど、この広い海で鉢合わせなんて悪夢だねえ。本気出しゃあ、二ホンを沈められるって噂の魔獣さ。ノアインパクト はこいつらのせいって噂だね」

また艦内が傾いた。傾いただけでは済まなかった。そのままゆっくりと天地がひっくり返る。

そこから中から絶叫があがった。

今まで必死に自分と戦っていた風鈴だったが、足がその場から離れてしまったと同時にバリア消滅した。

軀を振り回されるこの事態の中でも、シキはアカツキをしつかりと鎖で拘束していた。顔面に至っては超乳でクラッチしている。

「ああん、顔動かさないで！」

「好い乳だが、俺様の求めている柔らかさではない」

「あつ……口動かすなんて……んふ……」

覆い被さって抱き合っている二人を見下ろす二人の白い視線。

「お楽しみのとこ悪いんだが」

「信じられない……まさかこんなところで？（たしかレズなんじゃなかったっけ？）」

炎麗夜とケイが続けてしゃべった。

立っていた二人がバランスを崩して床に手をついた。また激しく揺れたのだ。

《完全に操縦を奪われちゃったみたい。浮上を試みるけど、ヤバイかも夜露死苦！》

エレベーターのような浮遊感がした。

ギヤアーーッス！

この世のもととは思えない咆吼が外から響いてきた。

《ダメっ、引きずり戻されるッ!》

ゴォン!　ゴォン!

艦内に響く外からの打撃音。

《限界限界、もう限界だつてば!　ベヒモスも暴れ苦しそう……無

理矢理　カイジュ　されそう……ああっ》

最悪の事態が起ころうとしていた。

騒ぎ出す女たち。

ケイはベヒモスの口の方を指差した。

「水漏れ……なわけないよね。うん、唾液唾液!」

海水が少しずつ流れ込んできていた。まだそれほどの量ではないが、あの口が一気に開いたら……。

この危機を回避する方法はないのか?

「ボクのグレイプニルなら、リヴァイアサンも捕らえることができるんだけど」

シキの視線は目の前のアカツキを見て、すぐに床を転がっていたモーリアンに向けられた。

「アカツキ姫はボクが天敵みただから離れられないし、肝心なグレイプニルはあっちのモーリちゃんに使っちゃってるし」

「俺様はここで死ぬわけにはいかない。抵抗しないと約束してやる」
アカツキと同じくモーリアンも誓った。

「死んだら任務も遂行できない。私も抵抗しないと誓おう」

二人の言葉を鵜呑みにするわけにはいかないだろう。

シキは普通の鎖でアカツキを肉が食い込むほど縛り上げ、炎麗夜に任せた。

「ちよつと見張つてて」

次にシキはモーリアンを普通の鎖で縛り直し、炎麗夜の前まで引きずってきた。

「二人も任せて悪いけど、見張つてて。じゃ、ボクがんばってくるから」

急いでシキが駆け出した瞬間だった、示し合わせたようにアカツキとモーリアンが鎖を引き千切った。

「ここで死ぬ気はないが、俺様には使命がある」

「同じく。私もここで死ぬ気はないが、任務は最後まで遂行する」

二人は床に落ちている自分の武器に向かって走り出した。

炎麗夜は見張れとは言われたが、ケイを守っていて動けない。さらに敵は二手に分かれてしまったのだ。

急いでシキが戻ろうとしたが、それは叶わなかった。

ベヒモスの口が一気に開いたのだ。

海水の壁が襲い来る！

それはあまりに無力だった。

すべては一瞬にして呑み込まれた 叫び声すらも。

第8章「流れ着いた先で」

「う……う……ん……」

呻きながらケイは目を覚ました。

頬のついた砂粒。

「なに……ここ……」

さざ波が聞こえる。

ケイはふらつく足でゆっくりと立ち上がった。

陽光を浴びて煌めく海面。

どうやらどこかの砂浜らしい。

辺りを見回そうとして、すぐに倒れている炎麗夜を見つけた。

「炎麗夜さんだいじょぶですか！」

砂浜に膝を付け、ケイは炎麗夜の身体にそつと触れた。

「だいじょぶですか……濡れてない？」

ケイはびしょびしょだというのに、炎麗夜は濡れていないどころか、砂すらもついていなかった。

「そっか……スコービがどーとかって。もしかして炎麗夜さんといたからあたしも助かったの？」

ほかのみんなはどこだろう？

静かな海。

広がる砂浜。

「そんな……みんなは……？」

人影すら見当たらない。

「だいじょぶ、きつとみんなも違う砂浜に……。とにかく今は炎麗夜さんはどこか休める場所に運ばなきゃ」

ケイは気を失っている炎麗夜を背負って歩き出した。

「……重い。絶対この胸のせいだ」

背中に当たっている超乳。そこから重みがずっしりと来る気がする。

砂浜を歩いていると、崖の上に小さく粗末な小屋が見えてきた。
「だれかいるかも！」

希望で力が沸いたケイは先ほどより早く歩き出した。
小屋まで辿り着き、木製の扉を叩いた。

「すみませ……開いた」

扉は叩いたと同時に押されて開いた。

「おじゃましま〜す」

そっ〜とケイは小屋の中に入った。

人の気配はない。

ケイは辺りを見回しベッドを見た瞬間、

「きゃっ！」

悲鳴をあげた。

ベッドに横たわるミイラ。

枯れ葉のようなそのミイラは骨と皮が残り、髪の毛はバサバサになり一部は周りに散乱していた。

「退かすことできないし、炎麗夜さんをいつしよに寝かせるわけにもいかないし。本当はここにもいたくないけど、とりあえず炎麗夜さんを床に下ろそう」

丁寧に炎麗夜を床に寝かせたあと、ケイは服を脱ぎはじめた。

下着ははじめから身につけていないので、着物を脱ぐとすぐに全裸になってしまった。

ぞうきんのように絞ると少し水が出た。

「本当によく助かったなあ……ん？」

扉がゆっくりと開き、そこには紅い人影が！

「きゃっ！」

叫び声をあげたケイ。

アカツキは刀を抜いた 次の瞬間に倒れた。

「えっ……どうしたの？」

いったいなにが起きたのか？

青黒い顔をしたアカツキは気を失っている。

「ど、どうしよ……」

ケイはアカツキの刀を拾い上げた。

「この刀で今まで……」

目の前で女が斬られるところも見てきた。

刀を持つケイの手が震えた。

「でも……あたしにどうしろって……」

今もまぶたの裏に焼き付いている光景。

自分を救ってくれた村の娘が目の前で刺された。

憎しみと悲しみが渦巻く。

「人殺し……人殺し……人殺し人殺し人殺し……人殺し。いくら人を憎んでも、あたしにはできない……そんな怖ろしいことできない」
ケイは刀を投げ捨てた。

そして、なにを思ったのかアカツキの身体を引っ張って、丁寧に寝かせることにした。

「助けたくて助けたわけじゃないんだからね。ただ……これ以外にどうしていいのか、わからなかっただけ。この人のことどうするか、自分で決めるのが怖いんだ……」

ひとまずケイは絞った服を着ることにした。まだ湿っているが、この暖かい気温ならすぐに乾きそうだ。

立ったままケイは動かなくなった。

独り言も発せず、時間が過ぎる。

視線だけを動かしてアカツキと炎麗夜を交互に見て、ほかの物にも目を配った。

「……どうしよ」

アカツキの着物も濡れている。それもだいぶ水分を含んでしまっているようだ。

「脱がせたほうが……でも男だし、でも風邪引いちゃう、でも風邪ぐらい引けばいいんだ、でもかなり顔色悪そうだし、薬とかあるのかなこの世界」

最終的にケイは脱がせることに決め、紅い着物に手を掛けた。

「あれ……なにこれ、身体とくつついてる……の!？」

それは着物ではなかった。ムシヤ 化したデーモンなのだ。そのことにシキは気づいた発言をしていた。

「本当に脱げない……の、かなっ!」

無理矢理引つ張ったが、やはり身体と一体化しているようだ。

しかし、数秒をおいて異変が起きはじめた。

紅い着物が蠢き出す。

まるで無数の蟲が這うような動きをした着物は、一度肉の塊にまで収縮したあと、そこから肉体を構成しはじめた。

「え……マジ……そんな……」

肉玉からしなやかな腕と脚が伸びた。それはまさしく人間の手足だった。着物だったものが人間に変貌しようとしている。

動物が変形するだけでも衝撃的なのに、人間の姿に成ろうとしていることに、ケイは恐ろしさと驚きを隠せなかった。

瑞々しく、柔らかな丸みを帯びた肉体。

これまでケイが会っただれよりも豊満な胸。

魔乳。

アカツキに覆い被さりながら、その女型デーモンは姿を現した。

「この……密着してる体勢はちょっと……」

慌ててケイは女型デーモンをアカツキから退かして寝かせた。

「きゃっ!」

露わになったアカツキの裸体。

「女装してるくせに……デカイ」

しかし、それ以上にケイを驚かせたのは、その全身を這う刺青のようなものだった。

「なにこれ……これってどこかで？」

似ていた。

炎麗夜たちに見せてもらった、リングとヨーニの契約の印だった。

「これとこれって別の……一つの印じゃなくていっぱいある。たくさんと契約してるってこと?」

ケイがアカツキの肉体を調べていると、横で炎麗夜が動きはじめた。

「……くう……頭がふらふら……はっ!?!」

急に立ち上がった炎麗夜の目に入ったのはアカツキ。

「なんでこいつが!? なにやってんだいケイ!?!」

「えっ……べつにそーゆーことをしようしてたんじゃないから!」

「今すぐそいつから離れな、ぶっ殺してやる!」

「殺すんですか……やっぱり」

「こいつのせいで何人女が殺されたと思ってんだい!」

それはケイだってわかっている。炎麗夜の気持ちだってわかる。

「でも……人が死ぬとこなんて、見たくないんです」

涙を浮かべるケイ。

その言葉を受けて炎麗夜は、全身から力を抜いて殺気を消した。

「わかったよ。でも今は? まだ? 殺さないだけだ。利用価値があるかもしれないからね。それにそいつの刻印の数が尋常じゃあない。

あとその女はだれだい?」

冷静さを取り戻した炎麗夜は、次々へと疑問点を見つけた。

「やっぱりこれ普通じゃないんですね。この女の人はこの人のデ

ーモン です」

「なんだって、デーモン だって!?!」

「はい、目の前で形が変わっていくの見ましたから」

「そんなアホな……人型なんて、いや、動物型があんだから、人間も動物のうちか」

今まで人型 デーモン の存在を知らなかったらしい。それほど珍しいということだろう。

炎麗夜もアカツキの肉体を調べはじめた。

「通常状態でこの大きさ」

「ふ〜れ〜い〜や〜さ〜ん」

「颯鳴空みたいな怖い顔するな……ん、ほかのみんなはどうした！？」

「それが……砂浜に打ち上げられたのはあたしと炎麗夜さんだけで」「そうか」

短く囁いて炎麗夜は目を閉じた。

あの中で何人が助かったのか？

「だいじょうぶですって、みんな助かってますよ。だってもうここに三人も助かった人がいるんですから！」

「……………」

おそらくここにいる三人は デーモン による力が大きいだろう。では、無力な人間はどうだ？

激しい海流に呑み込まれ、為す術があっただろうか？

「そうさ、みんな無事に決まってらあ。おいらは方向音痴だし、こちから探しに行かなくても、向こうが探してくれるさ。きっと……な」

まだ炎麗夜の顔には影が差している。

無理をしているのはケイの目にも明らかだった。もうケイはなにとも言えない。

炎麗夜は無理にでも気を取り直そうとしているようで、再びアカツキの刻印を調べはじめた。

「契約できる デーモン は一体って決まってるんだ。二体以上の契約は、どういうわけか リンガ の身が持たない。中には裏技でオツケーな奴もいるけどな」

「裏技？」

「そうさ、ウチの風羅の ムゲン は 変装 。変装って言うっても服や髪型が変わる程度じゃあない。完全に相手をコピーしちまうんだ。だから デーモン との契約までコピーできる。ベヒモスもそうやって動かしてたのさ」

「でもこの人はこんなにいっぱい」

「そういう ムゲン なのかもしれないねえ」

多くの契約ができるのか、それとも……。

アカツキの躰が微かに動いた。

それから先は瞬きをするよりも早かった。

炎麗夜はアカツキを止めようと手を伸ばしたが届かない。

刀を拾い上げたアカツキはその切っ先をケイに向け、さらに女形

デーモン を守るように横でひざまずいた。

「紅華になにをした！」

怒りを露わにして叫んだアカツキ。

女形 デーモン に炎麗夜は目を滑らせた。

「その ヨーニ のことかい？」

「……この道具はルシファーだ。 ファルス 合体！」

「させるか！」

炎麗夜はアカツキに手を伸ばしたが、放たれた閃光と風圧によって吹き飛ばされた。

紅い花魁衣装を身に纏った妖艶たる鬼。

しかし、アカツキはすでに疲労を露わにし、青黒い顔の目元はさらにどす黒い。

アカツキの額から汗が流れ、床で四散したと同時に刀が輝線を描いた。

切れない！

なんと、炎麗夜は刀を素手で握って受け止めた。

「おいらの 崇高美 を前にして、無様な野郎は足下にも及ばないよ」

「うぬぼれたその足下を掬ってくれる！」

刀を受けた炎麗夜の手が押されはじめた。斬ることはできなくとも、力で押すことはできる。

「半死にしちややるじゃあないか」

炎麗夜がニヤリと笑った次の瞬間、彼女は脚を大きく蹴り上げた。股間を蹴り上げられたアカツキが眼を剥く。

「ぐあっ！」

アカツキがどんな一流の戦士だろうと、鍛えようがない急所。悶絶しながらアカツキは床でもがいた。

炎麗夜は蹴り上げた足を手で払って見下した。

「汚ねえもんを蹴っちまったな。まだやるなら外に出な、そこでたつぷり可愛がつてやるよ。殺しはしない、まだな。死ぬ前にたつぷり地獄を味わいな」

炎麗夜はケイを連れて小屋の外に出た。

歯を食い縛ったアカツキは、床に刀を突き立て躰を起こした。

「地獄がどうした……俺様は修羅だ、修羅の歩む道は常に冥府魔道」
重い躰を引きずりながらアカツキも外に出た。

炎麗夜たちは崖のすぐ下、砂浜で待ち構えていた。

不安そうにしてケイは炎麗夜から少し離れた場所で佇んでいる。

その瞳は、哀しみに満ち溢れていた。

「どうしても……（こうなっちゃうのかな。まただれかがあたしの前で傷つく。敵味方なんて関係ない、ここから離れたいけど……それもあたしにはできない）」

ケイが俯いていた顔をあげると、アカツキがなにか言いたそうにこちらを見ていた。

しかし、黙して語ることはなかった。

刀を構えたアカツキ 戦いを続ける気だ。

迎え撃つ炎麗夜は拳を鳴らした。

「どっからでも掛かって来な」

崇高なる美を崩さぬ余裕。

無言でアカツキは斬りかかった。その表情に余裕はない。

刃が半月の輝線を描いた。

その攻撃を飛び退いて躲した炎麗夜は、そのままアカツキの懐に飛び込んだ。

「美しい陽光に手を伸ばせ（ビューティフルサンシャインアップー）！」

炎麗夜の拳がアカツキのあごを殴り上げた。

「ぐツ！」

歯を食い縛ったアカツキは宙に飛ばされ、無様にも砂浜に叩きつけられた。

指の間から零れ落ちる砂を掴みながら、アカツキは立ち上がるうとした。だが、立ち上がれない。膝をつき、手が大地から離れない。「まだだ……まだ俺様は……」

唾のように血を吐き飛ばし、アカツキは顔を上げて野獣の眼を輝かせた。

その眼は死んでいない。

心は折れずとも、その躰がいうことを聞かない。

動けないアカツキの顔面を炎麗夜の足が容赦なく蹴り上げた。さらに間を置かずに頭部を踏みつぶした。

ケイは手で顔を覆った。

砂を血と共に口から吐き出したアカツキは、手を炎麗夜の足首に伸ばそうとしたが、その手すらも踏みつぶされた。

「てめえに殺された女たちの苦しみはこんなもんじゃねえ！」

「……………」

「なんか言えよ！」

「……………」

「あんただただの賞金稼ぎじゃあないだろう。巨乳に怨みでもあのか、なんでそこまで執拗に巨乳の女を殺すんだ!!」

「俺様は豊満な胸を愛している」

「は？」

驚いた炎麗夜に一瞬隙ができた。

素早く立ち上がったアカツキの拳が炎麗夜の顔面を目掛ける！

触れることは叶わない。

だが、吹き飛ばすことはできる！

炎麗夜が背を反らせながら吹っ飛ばされた。

砂の上で跳ねた炎麗夜の躰。その揺れる超乳をアカツキは愛おしそうに見つめていた。

「だが顔には興味がない」

それが最後に振り絞った力だった。

アカツキはゆらめきながら砂に顔面から突っ込んだ。完全に気を失ったのだ。

炎麗夜がアカツキに近付こうとしたとき、天が妖しく輝いた。

「危ない！」

ケイが叫んだ刹那、光の柱が天から落ちてきた。

巻き上がる砂。

雷が落ちるように、それはあまりにも一瞬の出来事だった。

穿たれた砂浜。

まるで隕石でも落ちたような穴だった。

しかし、その中心にはなにもない。

そこにいたいたはずのアカツキの姿が跡形もなく消えていた。

啞然とする炎麗夜とケイ。

なにが起きたのかまったくわからなかった。

第9章「新たなフィールド」

魔都エデンに行こうと思う。

その炎麗夜のひと言で新たな旅がはじまった。
黄金の猪フレイに乗って海岸線をひた走る。

まずは流れ着いた場所を知る必要がある。人里というのは、資源のある場所に自然とできる。海沿いを進んでいけば、いつかは漁村に着くというのが炎麗夜の考えだった。

「アバウトな……」

正直な感想をケイは漏らした。

「無闇に爆走するよかマシだろう?」

「そりゃそーですけど……そーゆーアバウトさが方向音痴の原因じゃ?」

「アバウトじゃあなくて自由奔放なのさ」

そんな大きな胸を張って言われると説得力が増してしまう。

魔都エデン この世界に来て、右も左もわからなかったケイが決めた目的地。そこでめぼしい情報が得られるとは限らないが、今だってなにも手がかりがない。

ケイの目的は自分がいた世界へ還ること。

そのことを知らない炎麗夜だったが、このことは覚えていた。

「そーいや、前に魔都エデンに行きたいって言ってなかったかい?」

「大都市だったら情報もいっぱい集まるんじゃないかって」

「なにを調べたいんだい?」

前に打ち明けようとしたときは、言えずに終わってしまった。

「じつは……信じてもらえないかもしれないんですけど」

「乳友の言うことならなんでも信じるよ」

「べつの世界……もしかしたら過去から、とにかく違う世界からこの世界に来ちゃったんです」

「は?」

「やっぱり信じてもらえないですよね」

「そうじゃないよ、あまりにも突拍子もない話だったもんだから、理解するのに時間がかかっただけで、もっと詳しく教えとくれ」

ケイは炎麗夜に出会うまでのことを事細かく話して聞かせた。

加えて自分の世界のことも参考までに聞かせた。つもりだったが、こちらの話の方が炎麗夜は興味があるようで、いつの間にかこちらの話で盛り上がってしまった。

ケイの世界の話をだいぶ聞いたところ、炎麗夜はつぶやくように言ったのだ。

「良い世界じゃあないか」

それはケイにとって新鮮な響きだった。

当たり前が当たり前ではなくなった世界に来て、その言葉をケイは心から理解することができた。

「そうですね……人が死ぬの間近で見たの、この世界に来てからはじめてです。あれからなんかずっと、心が重たくて」

「おいらは数え切れないくらい見たよ。魔都エデンで巨乳狩りがはじまって間もないころが、本当の地獄だった」

「住んでたんですか？」

「一時期ちよつと滞在してただけさ」

「街に入るのすごくチェックが厳しいとか聞きましたけど？」

ケイはあの村で出会った娘の父親を思い出した。

たしか下手をしたら、投獄や殺される可能性もあると語っていた。炎麗夜は首を横に振った。

「簡単だったよ」

「そーなんですか？」

「なんでも屋シキに助けてもらったからね。シキと出会ったのも、それが切っ掛けさ」

あのアカツキや、モーリアンやマツハにも勝ったシキ。

砂浜での決闘で炎麗夜もアカツキを圧倒していたが、あれはアカツキが本調子ではなかったのは明らか。ベヒモス艦内でのアカツキ

はあんなものではなかった。

「シキさんって変な人ですよね」

「変というか、得体の知れないところがあるね。魔都エデンに入るのだから本当は簡単なことじゃあない。ベヒモスを奪ったときも、シキがほとんどひとりでやったようなもんだよ」

「すごい人なんですね。エロイですけど」

「そういうケイもシキに襲い掛かったときは激しくエロかったぞ」
言われて思い出してしまったケイは、少し顔を赤らめながら反省した。

熱くなつた頬を炎麗夜の背中に押しつけ、ケイはフレイの背で揺られた。

しばらくすると、炎麗夜が遠くになにかを見つけて指差した。

「人里だ、きつとあれは漁船だ」

「えっ、よかつた無事に里にいたんですね。安心したらお腹すいちやいました」

「おいらも腹ぺこさ。なんか食料分けてもらう代わりに、仕事の世話でもしてもらおうかね」

「働かざる者食うべからず……か」
ぐうぐうとケイのお腹が鳴った。

煌びやかな法衣を身に纏った少女がバルコニーに姿を見せると、熱狂的な民衆がのどが焼けんばかりの声を張り上げた。

「都智治様！」

「どうか我々をお導きください！」

「もっと俺たちの生活を豊かにしてくれ！」

飛び交う声を浴びながら、都智治は無表情のまま手を振り、しばらくすると奥の部屋へと消えた。

民衆の眼がなくなつた途端、都智治は嫌そうな顔をして宝冠を投げ捨てた。

慌てて付き人が王冠を床に落ちる前に受け止める。

そんなことにも構わず、都智治はそそくさと歩いていく。
「愚民どもがつ。こんな退屈なこと、いつまで続けなきゃいけないの！」

怒りを吐く都智治の前に、車椅子に乗った紅い影が現れた。

「貴女が望んだことでしょうか？」

「ヴィー!？」

「どうしたの、わたくしがいると羽根が伸ばせないかしら？」

「だってクレーターの調査に出かけてるって、三日は帰らないハズじゃなかったの？」

「出かけることを取りやめたのよ」

「なにかあったの？」

「貴女の知らなくていいことよ」

言われて都智治はマダム・ヴィーを睨みつけた。

「これじゃ私ただのマリオネットじゃない！」

「そうよ、貴女はわたくしの操り人形。はじめからわかっていたことでしょう。嫌なら幕を下ろしなさい」

「……くっ」

あれほどまで歓声を浴びていた都智治。

だが、この女を前にしては、口を噤むしかなかった。

ルージユが妖しく微笑んだ。

「貴女は望んでいた魔都エデンの権力者である都智治の地位を得た。人々は盲目に貴女を羨んで崇拜しているわ。貴女は人々の上に立ち、人々を支配している。それだけじゃ不満かしら？」

都智治はなにも言い返さなかった。

マダム・ヴィーの横を擦り抜け、自室へと向かう。

だが、その途中で急に倒れた。

慌てる付き人たち。

凜とした侍女がいち早く都智治の横に膝を付き、手を大きく振って来る者を払った。

「お下がりなさい。神託の兆候です」

都智治の瞳は開いているが、なにも映っていない。

愉しそうにマダム・ヴィーが艶笑を浮かべた。

「前回から早いわね」

淡く輝く都智治の躰がふうつと浮いた。

瞳を閉じた都智治が、玲瓏な声音で御告げを詠みはじめる。

「歴史は繰り返す。復樂園を求め神の子は荒野を彷徨い辿り着く。

あの空へと頂く塔は栄光と破滅の象徴」

都智治は輝きを失い、床に落ちた。

床に落ちた少女などマダム・ヴィーは興味を示さない。

車椅子を走らせながら、マダム・ヴィーは独り言をつぶやく。

「失樂園による喪失、復樂園による回復。樂園を喪失して、今も夢
見ているのは果たして何者かしらね。？彼ら？の夢はいつしか、人
間の夢にもなっていた。魔都エデンはまさに樂園の回復だけれど、
あちら側の？彼ら？からすれば……まずはこの線から Mの神託
にアプローチしようかしらね」

マダム・ヴィーが奥の部屋へと入ると、三つの影が現れた　バ

イブ・カハだ。

「あら、ご機嫌よう。生きていたのね、ベヒモスは未だ消息不明だ
けれど」

口元からだけではマダム・ヴィーの機嫌を伺うのは難しかった。

膝についているモーリアンが頭を下げた。

「詳細はすでに報告書にまとめております。ベヒモスはリヴァイア
サンと遭遇のあと、制御不能となり、海中でハッチが開いたために
艦内にいた全員が海流の呑み込まれました。多くの反逆者が死んだ
と思われませんが、私たち三人がこうして生きていることから、デ
ーモン　の強奪者たちは生存の可能性ががあります」

そこへネヴァンが口を挟む。

「生きていくわけがありませんわ。アタシたち三人も溺れ死ぬ寸前
でどうにか九死に一生を得たのよ。それはアタシたち三人が空を飛
べたからほかならないわ」

それをマツハが反論する。

「あの馬女だつて空飛んでただろ」

「あの女はモーリアンお姉様にやられて重傷だったじゃない！」

「オマエだつてアカツキにやられてヒドイもんだつただろ」

「アンタなんか簀巻きにされて芋虫みたいに転がってただけのクセして！」

「なにイ！」

モーリアンが咳払いをした。

「マダム・ヴィーの御前で見苦しいぞ」

「わたくしは構わないわよ。女同士のいがみ合いは見ていて嬉しいわ」

こちらの言葉のほうで、ネヴァンとマツハを黙らせる効果が強かった。

それをマダム・ヴィーもわかつている。わかっているからこそ、相手に畏れを抱かせるほど艶やかに妖しく嗤っているのだ。

バイブ・カハは沈黙した。

それがマダム・ヴィーは愉しくて仕方がないのだろう。ルージユの端をさらに吊り上げた。

「もういいわ下がりなさい。デーモン の整備をして、貴女たちも傷と疲れを癒やすといいわ」

バイブ・カハは頭を垂れて姿を消した。

床に残っていた血にマダム・ヴィーは気づいた。

「誰かが怪我を負っていたようね」

マダム・ヴィーは車椅子から降りて床に這った。

そして、涎れをたっぷり含んだ長い舌で、床ごと血を舐め取ったのだ。

ルージユが艶笑を浮かべた。

「処女ね。ここにいたの誰だったかしら？」

マダム・ヴィーが床に這ったままでいると、そこへ召使いの娘がやって来て、眼が合った。

驚いている娘が言葉も出せず戸惑っていると、マダム・ヴィーが手を差し伸べた。

「車椅子に乗せてくれるかしら」

「はい、いますぐに！」

娘が駆け寄ってマダム・ヴィーの手を握った瞬間、逆に引き寄せられて床に倒されてしまった。

倒れた娘の上に乗ったマダム・ヴィー。

その真つ赤なルージユがゆっくりと近付いてくる。

熟れた真つ赤な果実。

それは禁断の果実。

マダム・ヴィーは娘の唇を奪い、すぐに投げ捨てるように娘の頭を放った。

嗚呼、真つ赤な花が咲いた。

痙攣する娘の口から真つ赤な花びらが散った。

口元を真つ赤な手袋で拭ったマダム・ヴィーはつぶやく。

「この子も処女ね」

白いベッドに寝かされていたアカツキが目を覚ました。

「……どこだ？」

ベッドから降りたアカツキは全裸だった。

「紅華は……よかった」

すぐ横のベッドで寝ている女型 デーモン。

アカツキはこの デーモン が紅華であること否定し、ルシファ
ーと言った。

しかし、ここでまた紅華の名を呼んだのだ。

「ファルス 合体！」

アカツキと女型 デーモン が一つに溶け合う。

花魁姿になったアカツキが部屋を出ようとすると、天井近くに設置されていたスピーカーが響いた。

《ちよっと待ったアカツキ君》

無視して行こうとするアカツキ。

《命の恩人の話くらい聞こうよ。これからはルシファアの整備手伝つてあげないよ》

「そういう取引は貴様の命を縮めるぞ、ゼクス？」

アカツキが足を止めた。

《だいぶ顔色がよくなつたみたいだね。刻印の数がだいぶ増えたみたいだケド、時間をかけて躰に馴染ませないと、君の心身が保たないよ》

「時間がない。それはそちらもだろう？」

《そうだね。この問題を解決すべく、造っている物がもうすぐ完成するよ》

「なにをつくっている？」

《保存装置だよ。それが完成すれば、君は仕入れと配達をするだけになるんだ》

「狩りの効率が上がれば俺様はそれでいい」

アカツキは部屋を出て行こうとする。

《まだ話が　行き先くらい言えバーカ！》

「ずっと空から監視しているクセに」

《完璧に監視できたら……行っちゃった》

スピーカーから別の若い娘の声が響いてきた。

《あの解析結果が出ました》

《アハトお疲れ。長く掛かったってことは濃厚ってことだね》

《はい、シキの正体は73パーセントあの者です》

《73ってビミョー。あつ、スピーカー入れっぱなしだった》

すぐにスピーカーが切られ、部屋はしんと静まり返った。

第10章「戦の狂乱の女王」

二ホン地図を手に入れたケイと炎麗夜は、一路魔都エデンに向かつて爆進していた。

漁村で世話になったあと、炎麗夜が仲良くなった船長からもらった地図。この地図を一目見て、ケイは驚かすにはいられなかった。それはケイがよく知る日本地図とそっくりな物だったのだ。

ただし、大陸の一部が欠けていたり、逆に見知らぬ小島があったりと、詳細な部分では異なっている。

「そんな地図とにらめっこしなくても、迷わないから平気さ」と、炎麗夜が声をかけてきた。

「この地図を見て確信しました。やっぱりここってあたしがいた世界の未来なんです。ちよつと形は違うけど、ノアインパクトっていう地殻変動があったんですよ？」

「昔のことだから、ほんとにあったかは知らないけどね。火山の噴火や地震、地殻変動やら、極めつけは一五〇日間続いた大洪水だって云うね」

「たぶんそれでちよつとあたしの世界と形が違うんです。だとしたら……」

急にケイは暗い顔をした。

黙り込んだケイを心配して炎麗夜が声をかける。

「どうしたんだい？」

「世界がこんなになつちよつたんだと思うと。元の世界に帰ってもこんな未来まで生きてませんけど、あたしがいたの一九九九年の七月なんです」

「トキオ聖戦の年と月じゃあないか!？」

「詳しく教えてくれませんか、帰った世界でそれが起きる　もう起きたのかもしれない。あたしがこの世界に来た理由と関係があるのかも」

「詳しくって言われてもねえ、古代都市が消滅したとか、それを期に世界が大きく飛躍したとか、一〇〇年帝国ができたとか」

話を聞きながらケイは記憶を手繰り寄せた。

「トキオ聖戦で滅びた古代都市って、トキオっていうニホンの首都だったんですね？」

「そうだよ」

「場所わかります、この地図で？」

ケイは地図を炎麗夜に手渡した。

すでに炎麗夜が地図を逆さまに見ている時点で、ケイは嫌な予感がしていた。

「うーん」

「わからないならわからないでも……」

「魔都エデンがある場所がトキオだったようなあ」

「ちよつと地図返してください」

ケイは地図を奪って見た。

魔都エデンの場所はおそらくケイのいた世界では東京。

「東京が消滅……そんな。でもあたしが住んでるのは神奈川だから、東京で起きたことにあたしがなんで巻き込まれて……関係ないのかな？」

「魔都エデンはトキオがあった場所、旧帝都エデンはその下の地域にあつたらしいよ」

「もしかして神奈川県？」

「さあ、そこまでは」

自分がいた世界の未来になにが起きるのか？

ケイはそれを知りたいという気持ちと、知りたくないという気持ちが入り混じっていた。

「未来が恐いものなら、知ってるなんて耐えられない。けど帰るためには必要なかもしれない。どう思います？」

「どつって言われても」

その反応を察してケイは溜め息をついた。

「聞かれても困りますよね。魔都エデンに着いたら詳しく調べられるかなあ。トキオ聖戦のことか」

「あそこならあるだろうけど、詳細となると政府が管理してるよ」

「そーゆーのって調べるの難しいですよね？」

「そういうのに詳しい生きた歴史事典みたいな乳友ならいるけど」

「紹介してください！」

「もう会ってるよ」

「え？」

だれだろうとケイは会った人物を思い浮かべた。短い期間で出会った人物。

「なんでも屋シキだよ」

「さすがなんでも屋」

しかし、生きているかもわからない。

生きていたとしても、どうやって連絡を取るのだろうか？

とりあえず、ケイはこの世界に来て電話を見ていない。

「この世界って、どこにいるかわからない人とどーやって連絡取れるんですか？」

「どこにいるかわからなきゃあ連絡取れないだろう？」

「ですよー。ケータイとかないんだ……あたしもまだ買ってもらえてないけど」

ケイがいた一九九九年代半ばの携帯電話・PHSの加入者数は五五〇〇万人を越えている。数年後には高校生だけでなく、小中学生の普及率も高くなることは必須だ。

ケイは言葉を続けて質問をする。

「じゃあ、場所のわかってる人は？」

「手紙、大きな都市や政府は電話が使えるけど、居場所が定まらないおいらやシキみたいなのは、音信不通になることが多いから、いちよう私書箱借りてるけど、手紙を取りに行かなきゃあやつぱ連絡取れないねえ」

「炎麗夜さんちゃんと取りに行ってます？」

「そういうのは颯鳴空がやってくれるから、私書箱がどういうのかじつはよく知らないんだ」

自由なひとだとケイは改めて思った。

しばらく走り続け、昼食を取るために休憩することになった。

漁村で知り合った船長から、魚の干物とおにぎりをもらったので、それを食べることにした。

燦々と輝く空の下。

木陰のちょうどいい場所があった。木の真下は砂地だが、その周りは芝生が広がっている。

「なんだかピクニックみたい」

おいしそうにケイはおにぎりを頬張った。

のどかな景色。

自然に囲まれていると平和な気持ちになる。

「そーいえば炎麗夜さんはなんで魔都エデンに？」

「このままじゃ駄目だと思ったのさ」

「なにが？」

「エクソダスは失敗に終わった。逃げるんじゃあ駄目なんだ、おいらだつてこの国から逃げる気なんてない。ならこの国を変えるしかないのさ！」

魔都エデンに乗り込む。

国を変えようとする炎麗夜が乗り込むと言うことは？

「なににする気なんですかいったい!？」

「魔都エデン いや、この国を支配してるのは都智治って奴さ。

巨乳狩りをはじめたのもこいつだ。だったらこいつをどうにかすれば、この国は絶対よくなる!」

果たしてそれは本当にそうなのか？

「ずいぶんと大きな妄想をしているようだわねえ」

その女の声は上空から聞こえた。

大地に影を落とす凶鳥　ネヴァン。

なぜここに!？」

ケイは驚いて炎麗夜と顔を見合わせた。

「どこにいるかわかんない人とは連絡取るのも難しいって！」

「偶然……見つけたわけじゃあなさそうだねえ」

そう、偶然などではなかった。

ネヴァンが大地に降り立って近付いてきた。

「アナタたちが立ち寄った村から懸賞金目当ての通報があつたのよ。魔都エデンが目的地なのも聞いたわ。あとは簡単よ、街道などを衛星で隈無く探せばいいだけ」

「だってあの村の人たちいい人そうだったし、船長さんなんてよくしてくれて」

ケイのその言葉を聞いてネヴァンは腹を抱えて笑った。

「アハハハハッ、頭弱くて笑っちゃうわ。今の世の中、アナタたちは悪人なの。善人が悪人を突き出すのは当たり前でしょう。それにもうひとつ良いことを教えてあげる。通報者はその船長よ」

「ウン……」

ケイはシヨックを受けた。

だが、炎麗夜は平然としていた。

「よくあることさ。飯に毒も入ってなかったし、酒もつまかったし、よかつたんじゃないかい？」

これがこの世界の巨乳狩りなのだ。

政府の追っ手、賞金首を狙うハンター、一般の人々の中にも敵がいる。

はじめに出会ったこの世界の娘やその父親が、自分によくしてくれたからケイは考えが及んでいなかったのだ。それに大勢の胸の豊かな女たちが試みたエクソダス。それらを見てきて、巨乳狩りは人々の反発を買っているものとはばかり思っていた。

炎麗夜はケイを自分の背に隠した。

「都智治潰すんなら避けちゃあ通れない道だからねえ」

手に持っていたおにぎりを一気に頬張り、炎麗夜はフレイを近くに呼び寄せた。

「ファルス 合体！」

フレイが黄金のマントに変貌し、炎麗夜と合体を果たした。合体と同時に 崇高美 は発動される。

「先手必勝、猪突猛进！」

炎麗夜がネヴァンに突撃した。

「美しく突進！」
ビューティフルラッシュ

直線上に向かってくる炎麗夜をネヴァンは上空に飛んで躲した。

「そんな攻撃当たらなくてよ！」

足を地面に向けて急降下するネヴァン！

その足は人間のものではなく、三本の鋭い鉤爪のついた鳥の足だった。この爪で引っかかれたら肉が削ぎ落とされてしまう。

「死ねーッ！」

凶鳥の叫び！

だが、炎麗夜は動じない。動じるどころか、その顔を下りてくる爪に向けた。

「なっ!？」

眼を剥くネヴァン。その足は炎麗夜の顔に触れる寸前で止まっていた。

「おいらの 崇高美 は鳥の足なんかじゃあ崩せないよ」

「ムゲン の能力!？」

「赤毛のマツハ から聞いてなかったのかい？」

「くっ……ならこれならどう！」

ネヴァンは翼を扇ぎ毒粉を撒き散らした。

空気中に溶け込ませることによって、息を吸うと同時に毒が体内に送り込まれる。

「うっ……毒か……」

なんとということだ、呻きながら炎麗夜が膝を付いた。

まさか 崇高美 の効力が及ばぬ隙が狙われるとは！

勝ち誇った笑みを浮かべるネヴァン。

「どうやら絶対の自信をお持ちのようだったけれど、アタシがアナ

夕の天敵のようね」

「毒が回りきる前にあんた倒して解毒剤をもらつよ！」

「解毒剤なんて持ってないわ」

「自らの毒に冒されたときのために解毒剤が必要なはずじゃあ！」

「残念でしたわね。毒の耐性があるのよ」

「く……から……だ……が……」

炎麗夜が地面に崩れた。

戦うことを知らないケイが残された。

「炎麗夜さーっん！」

もう炎麗夜はぴくりとも動かなかった。

ネヴァンの顔がケイに向けられた。

「次はお嬢さんよ」

「炎麗夜さん、炎麗夜さん起きて！」

「そんなにこのメスブタのことが心配？」

「炎麗夜さんになにしたの！」

「アタシの毒で自由を奪っただけよ。躰は動かないけれど、意識もあつて生きているから心配しないで、殺しはじっくり愉しむタイプだから」

ネヴァンがゆっくりとにじり寄ってくる。

息を呑みながらケイは後退りした。

鋭い爪は足だけでなく、手にも鉤爪を持っている。ネヴァンはそれに舌を這わせて不気味に笑った。

「お嬢さんの胸の肉。切り裂いたら気持ちよさそうね、ああん！」
怖ろしくなったケイは胸を押さえてさらに後退った。

この場は逃げるしかないのか。だが、炎麗夜を置いて逃げるとい
うか。

ケイはネヴァンに背を向けて走り出した。

「あたしが助からなきゃ炎麗夜さんも助からない！」

ここでやられたら、炎麗夜を助けることもできなくなってしまう。
しかし、ネヴァンから逃げ切れるのか!?

上空に舞い上がったネヴァン。容易くケイに追いついてしまふ。ケイの躰に差す凶鳥の影。

その影が急にケイから外れた。

「ぎゃあつ、何事!？」

ネヴァンの躰が地面に引きずられる。その足首には鎖が巻き付いていた。

恐る恐るケイが振り返った先にいたのは、シキ!

「前と同じテンガロンハット探すのに手間取っちゃって。お気に入りにはストックしとくべきだよね」

その手に握られた鎖。まるで凧揚げのようにネヴァンに繋がれていた。

「おのれ新手かッ!」

引き下ろされたネヴァンは、シキの近くで再び毒粉を撒き散らした。

崇高美の炎麗夜すら冒した毒。吸えば一溜まりもない。

「毒女のネヴァンだね。キミの毒は効かないよ。炎麗夜にも解毒剤を飲ませたけど、動けるようになるまでには少し時間がかかりそうだね」

「嘘おっしやい、アタシの毒に解毒剤なんて存在する筈がないわ」

「ムゲン の能力ならまだしも、所詮は此の世の毒なんだよ」

「解毒剤を出すのよ、調合した奴も皆殺しにしてやるーッ!」

鋭い足爪でシキに襲い掛かった。

「頭に血が昇って捕まってるの忘れた?」

シキはハンマー投げの要領で、鎖を振り回してネヴァンを投げ飛ばした。

すでにだいぶ回復していた炎麗夜は、その光景を見ながら笑った。「あの女为天敵はシキのようだねえ」

これまでの戦いから、シキは多くの者の天敵であることがわかっている。

だから炎麗夜はこう続けた。

「これから ワイルドカードシキ って呼ぼうか」

地面に落とされたネヴァンは、四つん這いになってから立ち上がった。

「アカツキにやられた傷が治ってないとはいえ、このアタシがこんな無様な姿を晒すなんて……皆殺しよ皆殺し！」

逆上するネヴァンを見ながら、シキはニツコリ笑った。

「ボクを殺すのは不可能だよ」

それは絶対の自信か？

「殺されたあとに後悔しても遅いわよ！」

上空に舞い上がったネヴァンが急降下を決める！

迎え撃つシキは鎖を投げ槍のように放った。

それは鋭い突きだ。

鎖の先端がネヴァンのみぞおちにめり込んだ。

「グフツ！」

ネヴァンが墜落する。

またも地面に叩きつけられたネヴァン。自分の重量が攻撃の威力となった。

一方のシキは無傷で息も切らせていない。

「キミも魔導装甲使いなら ムゲン で戦ってみたら？」

「アタシの ムゲンは戦闘向きじゃないのよ！」

「でも活路が見つかるかもよ」

「そんな見たいのなら、見せてやるわ。 スペルプラス 『私バカ

ですけど』」

「えっ、私バカですけど」

驚いたシキはさらに驚いた。

炎麗夜も呆気にとられている。

「私バカですけどってなんだい、私バカですけど」

言った本人はすぐに気づいた。

まだ気づいていないのはケイだ。

「みんなどうかしちゃったの、私バカですけど」

たしかに戦闘向きではない。だが恐ろしい ムゲン だ。おそらくネヴァンの指定した言葉^{スペル}を語尾に、しゃべった者は強制的につけてしまうのだ。

慌てるケイ。

「なにこれ、私バカですけど。あたしバカじゃないし、私バカですけど。だから、私バカですけど」

相手を混乱に陥れる技だ。

炎麗夜が叫ぶ。

「しゃべるんじゃあないよケイ！ 私バカですけど」

あまりの馬鹿馬鹿しさにシキの躰から力が抜けた。

「本当にくだらない ムゲン だね、私バカですけど」

この隙にネヴァンは高く高く上空に舞い上がっていた。

「アナタたち本当にバカね、私バカですけど。勝負はお預けよ、私バカですけど」

本人にも適応されるらしい。

シキは鎖を放ったが、もうこの距離では届かない。

「逃げられた、私バカですけど。これいつまで続くのかな。あつ、治った」

もうネヴァンの姿は見えなかった。技の効果は範囲的なもので、ネヴァンとの距離が関係あるのかもしれない。

とりあえずこれで危機は去った。

どうにか生き残れたことにケイは安堵した。

「シキが助けに来てくれなかったら。それにしても精神的にダメー
ジが来る ムゲン だったなあ。もしもエツチな言葉なんかいわされたら……ああん！」

突然、変な声を出してしまったケイ。

まさか新たなスペルが指定されたのか！？

……違った。

「お礼の気持ちは一〇おっぱいで」

シキがケイの胸を揉んでいるだけだった。

「あつ……あう……また返り討ちに……ああん！」

「残念でした。ケイちゃんの躰は鎖で縛っちゃったよ」

「いやあん！」

ケイの叫びがどこまでも木霊した。

第11章「面影の都」

見上げるほど高い壁。おそらく三〇メートルはありそうだ。

中世では大都市を守るために、このような壁で囲われた都市が存在していたが、こちらはそれよりも大規模で、素材も木材や煉瓦などではなく金属だ。そして、この防壁よりも高い、ビル群が頭突き出しているのが外からも見えた。

望遠鏡を眼から離れたケイが振り返った。

「入るとこないんじゃない？」

シキが答える。

「セキュリティゲートが東西南北に一つずつ、通行証が必要で、身体検査と荷物検査をされるんだ」

「こんな胸、隠しようがないんだけど？」

ケイは自分の胸を持ち上げた。いつの間にか育ったような気がする。炎麗夜やシキと同じくらいはありそうだ。

胸の谷間に手を入れたシキは、そこからカードを取り出した。

「ジャーン、これが通行証のIDカードだよ。ボクのしかないけどIDカードには顔写真がついているので、ほかの者は使えない。」

そのIDの写真はシキの顔ではなく、性別も明らかにハゲ男だった。ケイはそのことに気づいた。

「だれのIDですかそれ？」

「ボクのだよ」

「写真違いますけど」

「そこはどうかなるよ」

写真を偽造するつもりだろうか？

もし顔写真をシキのものに換えたとしても、胸を隠す いや、

消失させなければ検問は抜けられないだろう。

この場に荷車を引いたフレイに乗った炎麗夜がやって来た。

「言われたとおり受け取ってきたよ」

「仕事が早いねマイハニー、さすが運び屋さん」

今朝から炎麗夜はなにやらシキに頼まれて、別行動をしていたのだ。

荷車に積まれている物を見てケイは嫌な顔をした。

「こーゆーのでヴァンパイアが寝てるの見たことあるんですけど？」

そう、荷車に積まれていたのは棺桶だった。それも二つ。

IDカードが一枚、棺桶が二つ、ここにいるのは三人。

シキが作戦を発表する。

「そういうわけだから、炎麗夜姐さんとケイちゃんには棺桶に入ってもらおうから」

「えっ？」&「は？」

ケイと炎麗夜が同時に驚いた。炎麗夜も聞かされていなかったらしい。

さらにシキは作戦を説明する。

「だいじょぶだいじょぶ、死んでから入るわけじゃないから。一時間くらい仮死状態になってもらうだけだから」

軽くシキは言うが、ケイは心配だった。

「仮死状態って危険じゃないんですか？」

「この薬を飲めば、眠るように仮死状態になれるよ」

シキが見せた二本のピンは明らかに怪しげだった。二本ともラベルが違うのだ。しかも両方とも違う酒のラベルだった。

余計にケイは心配になった。

「まさかお酒で仮死状態にするつもりじゃ？」

「違う違う、これはちょうどいいピンだったから、これに入れただけ。中身はボクが保証するよ」

保証されても、その怪しさが不安だ。

「前もつと簡単に入れたじゃあないか」

と、炎麗夜は前に侵入したときのことを思い出して言った。

「前は巨乳狩りがはじまる前だからだよ」

そう説明したシキ。

今は巨乳狩りの時代だ。逆にそれを利用して、死んだ巨乳の女を運ぶという名目で、魔都エデンに侵入するつもりだろう。だが、シキ自身はどうするつもりなのだろうか？

IDの顔写真はシキではない。もしかしたら、シキは入らないつもりなのかもしれない。そのIDの顔の持ち主が代行して、仮死状態の二人を運び入れる可能性もある。

シキは二本のビンを持った腕を伸ばし、左右のケイとシキの胸の前に突き出した。

「ほら呑んで、ボクからのおごりだよ。勧められた酒は快く飲む！
まだ不安だったが、ケイはそのビンを受け取った。

「お酒じゃないでしょ……お酒でも飲まないけど」

ケイはコルクを外した。匂いは甘くて美味しそうだが、色は黒に近い真つ青で飲む気を失わせる。

戸惑っているケイの横では、すでに炎麗夜が飲み干していた。

「ぷっはっつ、糞不味い！」

マズイなんて言われると、さらに飲む気が失せる。

しかし、ここまで来て飲まないわけにはいかないだろう。

ケイはビンの底を天に向けて、一気にのどの奥に流し込んだ。

「ううっ……苦いし、甘いし、舌が痺れる」

マズそうな感想だ。

すでにシキは棺桶を開けて準備をしていた。

「さあさあセニョリータたち、こちらでお休みください」

ケイと炎麗夜が棺桶の中に横たわる。

まず炎麗夜が入った棺桶のふたが閉められた。

不安そうな表情をするケイの瞳に、青空といっしょにシキの顔が映った。

「閉めるよ？」

「怖いよ」

「お姫様はボクのキスで起こしてあげるよ」

「それはイヤなんですけど」

「おやすみ」

囁いたシキは棺桶のふたをゆっくりと閉めた。
暗闇に閉ざされた世界。

ケイはゆっくりと瞳を閉じた。

心地良く意識が遠のいていく……。

この世界に来て、はじめてぐっすりと眠れそうだった。

太陽のように輝く頭。

頭の禿げ上がった中年男が、二つの棺桶を積んだ荷車を引いていった。

男は魔都エデンのセキュリティゲートの前で、武装した二人の兵士に止められた。

「IDを見せろ」

男は黙ってIDカードを提示した。

カードリーダーで読み取られ、本物かどうか確認される。さらに男の躰が隅々までまさぐられ、武器などを所持していないか念入りに調べられる。

その間に、もうひとりの兵士は荷車を調べようとしていた。

「この荷物はなんだ？」

「へい、巨乳の女を二人、殺して捕らえました。それで賞金を頂きたくて」

男に断りなく棺桶のふたが開けられた。

蒼白い肌をした炎麗夜。兵士はその胸をもんだ。

「上玉だな……柔らかい胸だ。まだ体温も残っているようだが、息も脈もない。死んで間もないのか？」

「へい、毒殺して急いで運んで参りましたから」

死後硬直と体温の疑問点は、それでどうにか切り抜けることができた。

兵士はさらにもう一つの棺桶も開け、中のケイを調べた。

「こちらと同じだな。よし、荷物は問題ない」

鉄格子の第一ゲートが開かれた。

そのゲートはトンネルへと続き、ここでX線などを使ってスキャンされる。体内を使って密輸の可能性もあるからだ。この検査が済むと第二ゲートが開かれ、兵士たちに監視されながら、街へ入ることができた。

魔都エデン　ケイがその光景を見たら、自分の世界に還ったと思うかもしれない。

そこはケイがよく知る大都市の街並みによく似ていた。

ふかふかのベッドで目を覚ましたケイは、寝ぼけたまま寝返りを打った。

「うっ！」

突然、呻いたケイ。顔が柔肉の中に埋もれたのだ。

慌ててケイはベッドから飛び起きた。

ケイの横で寝ていたのは炎麗夜だった。どうやら今の肉は超乳だったらしい。

「おはようケイちゃん」

ワークチェアを回転させ、シキがこちらを振り向いた。

ケイは辺りを見回しながら言葉が見つからなかった。

部屋にいるのは間違いない。それもケイの世界でいうところの、現代的なよくある部屋。カーペットが敷かれたフローリングの床に、天井や壁には白い壁紙が貼られ、窓は黒いカーテンで一切の光を遮断し、部屋を照らしているのは天井の蛍光灯。

さらにケイを驚かせたのは、シキが座る前にあるパソコンらしき物だ。

「それってパソコンです……よね？」

「よく知ってるね」

本当にパソコンだったらしい。

ケイは混乱してしまった。

「ここ……どこですか？」

「ボクの部屋。マンション……っっていうてもわからないだろうね。集合住宅の一種なんだけど」

「マンションなら知ってます」

「この街に来たことあるの？」

「え……どこですかここ？」

「魔都エデンだよ」

来たという実感が無い。

自分の世界に還れたわけではない。それはわかっていたが、こんな文明があったことにケイは驚きを隠せず、口を閉ざしてベッドを背もたれに腰を下ろした。

デーモン などの技術は、ケイの知る科学を逸脱するもので、もはやファンタジーの代物だった。それ以外は知っていた文明や科学に劣り、歴史の教科書を見ている気分だった。そう思い描いていた文明が、ここで完全に覆されたのだ。

この世界にある格差は激しい。ケイのいた世界にも格差があり、国単位など言えば、東京のような文明都市がある中、遠く離れた島のジャングルには原始的な生活をする部族もいる。けれど、この二ホンという国は、国内でこれほどまでの格差があるとは。

魔都 まさにこの世のものとは思えない都市に相應しい呼び名だ。

この魔都エデンの技術は人々の生活を豊かにし、それに憧れる人々は多くいるだろう。そして、この技術を狙う者たちは国内のみならず、世界中にいるだろう。

二ホンの鎖国政策を実感としてケイはうなずけた。
シキは優しい顔をした。

「まだ寝ていた方がいいよ。本当はまだ目が覚めないはずだったんだけど、おかしいね。無理しないで休んで」

「だいじょぶです。ビックリして目が覚めちゃって、聞きたいこともいっぱいあるし」

「聞きたいこと？」

「炎麗夜さんだけでは話たんですけど、じつはあたし……この世界の過去から来たんです、たぶんですけど」

「ん？」

唐突にこんな話をすれば当然される反応だった。

ケイは炎麗夜に話した内容と同じ説明をシキに聞かせた。

話を聞き終えたシキは険しい顔をした。

「嘘だとは思わないけど。その現象が起きる可能性よりも、起きたという事実はこの世界を揺るがす事態かも知れない」

シキの視線はケイから外れていた。

「どーゆーことですか？」

「ごめん、今は独り言。それでケイちゃんは自分の世界に戻るために、情報収集がしたいってことだよな？」

「はい、あたしがいた時代の一九九九年の七月、この時代で同じときに起きたトキオ聖戦のことをまずは調べたいんですけど。それから、この世界でのその当時の歴史とか文化とか、それ以前の歴史とかもできれば」

「なんでも屋のボクでも、一九九九年にはまだ生まれてないからなあ。詳しく教えてあげるのは……あつ、いた」

まさか？いた？とは、？そういう？意味か？

シキは突然、パソコンに向かってなにやら作業をはじめた。

「ネットで彼を呼び出してみよう」

「ネットってインターネットですか？」

「ケイちゃんの世界にもあったの？」

「えっと、中学のパソコンはできなかつたんですけど、高校のパソコンはできるみたいです。まだ授業で使ったことないですけど」

ケイがいた一九九九年の世界では、まだインターネットの普及率は低くかった。

パソコンの画面にアニメ調の魔法少女が現れた。

「なんですかこれ？」

「シン君のAvatarだよ。彼は大のアニメ好きで、アニメってノ

アインパクト 以前の文化の一つね。今は放送局が限られているせいで、そういう娯楽もないんだけど、彼はその文化があった時代から存在しているから」

「あばた……。それよりも、そんな長生きなんですか、その人？」
「生きているという定義には当てはまらないかもしれないし、人間という定義からも外れているような気がするなあ」

さっぱりケイには理解できなかった。

《オレはたしかに人間ではないが、元人間だ》
パソコンのスピーカーから男の声が聞こえてきた。

「シン君、久しぶり。こつちからは変な美少女キャラしか見えないけど、向こうにはこつちの映像と音声を送られてるから」

《何度見てもおまえの正体を知っていると、キモイぞ、その格好と声》

「あはは〜っ、キミの電力落としちゃうぞお」

《オレが停止したら、この都市はすぐに滅びるぞ》

二人の会話がさっぱり理解できないケイ。

正体？

都市が滅びる？

どちらも触れてはいけない気がして、ケイはなにも口を挟まなかった。

《おまえが雑談でオレを呼び出すはずがない。用件はなんだ？》

「ここにいるこの子、この世界の住人じゃないんだ。あいつらって意味じゃなくて、どこから来たのかもわからない。異世界か、違う時間か、平行世界か、この世界と似ている世界から来たのは間違いなくて、しかも一九九九年の七月から来たっていうんだよ」

《ほう、興味深い。 東京聖戦 の時代からタイムスリップして来た可能性があるということだな》

言葉の一つにケイは引っかかった。

「東京っていいいました？ トキオじゃなくて、東京都の東京？ 新宿とか渋谷がある東京ですか？」

《久しぶりに聞いた地名だ。オレはあの時代、まだ小学生低学年だった。東京壊滅のニュースは嘘だと思ったのは、世界中の人々も同じだろう》

「いつたいなにがあつたんですか？」

《話していいのか、シュウト？》

シキは殺人を犯しそうな満面の笑みを浮かべた。

「シン君、この都市を支える超電子頭脳のクセしてバカだろ。本当にキミはバカだ。もう言ってしまったものはしょうがないけど、ボクのはペラペラしゃべらないでくれるかな。それ以外のことから説明してあげて、この子はそれを聞くだけの重要な位置にいるかもしれないと思うから」

シキの正体？

シュウトというのはおそらく名前だろう。「格好と声」とシンが言っていたことから、おそらく今見えているシキは、本当の姿とは別なのだろう。変装だとするならば、もしかしてあのハゲの中年が……。

言葉には出せないが、ケイはシキをじつと見つめてしまった。

それに気づいたシキはニツコリと笑った。

「あははっ、眼に見えているものが今は現実だよ。見えないものまで想像する必要はないよ」

「えっ、な、なんのことですか！ あたしシキさんの正体とか、そういうのぜんぜん興味ありませんから！」

その慌て方は、興味が大きいたと言っているようなものだった。

シキはケイに満面の笑みを贈ったあと、話を切り替えた。

「もうひとりここで眠ってるひとがいるから、彼女が目覚めないうちに話をしよう。だいたい三〇分以内で」

炎麗夜はまだ目覚める気配すら見せない。

パソコン画面の魔法少女が砂時計を出した。

砂が落ちる時間が三〇分。

第12章「希望と絶望」

東京都心の映像。

街を行き交う人々やビル群。

それを一瞬にして呑み込んだ謎の光。

残されたのは焦土と化した灰と瓦礫の山。ビルすらも微かに原形を留めるだけの破壊力。それはおそらく核爆弾を凌駕するものだった。

パソコン画面の映像を見ていたケイは息を呑んだ。

「ありえない……こんな酷いことが起こるなんて……」

《あくまでこれはイメージ映像だ。当時のニュース映像はもっと悲惨だった。この数年後にブロードバンド環境が整ってくると、ネットに当時の映像がアップされはじめて、ニュース映像なんてどれだけ規制が掛かっていたことが、本当に地獄を見ているような映像だったのを覚えている》

ケイは自分のいた世界の未来だと思つと、身の毛がよだち躰が震えた。

《日本人の失意は相当なものだった。世界に誇る東京が一瞬にして滅びたのだからな》

「なにが原因だったんですか？」

《はじめは核爆弾が落とされたのだと誰もが思ったが、そうではない人智を越えたものだど気づきはじめると、日本人だけではなく、世界中の人々が恐怖した。果たしてなにが起きたのか？》

ここでシキが口を挟む。

「それを知ればケイちゃんは大きな渦に呑み込まれることになるけど、いい？」

「教えてください」

「シン君続きをどうぞ」

パソコン画面に大都市の映像が流れた。

ケイの世界の大都市に似た景色。そこからカメラは滑るように移動して、広大な緑地と宮殿を映し出した。その建物は聖堂や寺院など、宗教色のするものだった。

《当時も今も、あの真相を知る者はごく僅かだ。ただ、あの直後に現れた女帝たちがもたらした魔道と科学、そして？彼ら？が築き上げた帝都エデンとの因果関係は、だれも結びつけた事柄だった。東京聖戦は？彼ら？の仕業ではないだろうか　と。この映像は帝都の街と、帝都政府の建物だ》

都市の地上から見上げた場所にある高架線るリニアモーターカー。窓からは東京タワーよりも高い電波塔が見える。テロップには二〇一一年に施工された帝都タワー、高さ六六六メートルと書かれていた。

《帝都エデンは神奈川県を乗っ取る形で造られた》

カメラのアンゲルが舞い上がるように、都市部から関東周辺を映し出して、帝都エデンの位置を点滅させて示した。

その地図によると、神奈川の横浜など含む東部を中心に帝都となっており、そこに東京の町田を編入させた形になっている。ただし神奈川の南東に位置する三浦半島は、海で分断され島になっており、千葉県に編入させられていた。この時代にも地殻変動があったことを伺わせる地図だ。

《はじめのうちは混乱もあったが、？彼ら？の絶対的な力と、過去からある他国の文化を受け入れる日本の風土、そして、？彼ら？があくまで平和的だったこと、ほかに日本政府と帝都政府でいろいろと密約があつたらしく、最終的には帝都は日本の特別自治区という形で落ち着いた》

煌びやかな法衣を身に纏った少女が、民衆の歓声を浴びている。まるで洗脳されているような、熱烈な歓喜の嵐だった。

《それからの帝都を中心とする発展は凄まじいものだった。産業革命など足下にも及ばない。あくまで産業革命は人間の手によるもの、聖戦後の発展は人間とは異なる種である？彼ら？のもたらしたハイ

テクノロジーだ。？彼ら？とはすなわち、東京聖戦の原因をつくり、帝都エデンを治めていた政府の中樞」

さきほどの煌びやかな少女を中心に、九人の女性が仕えるように立っている。スーツを着た女や、西洋の甲冑を身に纏った女、背の低い白衣を着た少女など、統一感のない女性たちだ。その中の数名はシルエットになっていて、顔も姿もわからなかった。

《？彼ら？は元々はこの世界の住人ではないらしい。ただし、この世界に墮とされたのは人間が発生する遙か以前だ。？彼ら？は帝都エデン以前にも、人間に自分たち技術を教え、多くの都市を繁栄させてきた。歴史的には認められてない多くの古代文明がそれだ。アトランティスやムーという言葉くらいは聞いたことがあるだろう。しかし、それはすべて滅びた》

帝都エデンを強烈な地震が襲い、ビルの合間を通る津波がすべてを呑み込む。そこにはベヒモスやリヴァイアサンの姿もあつた。

《そして、帝都エデンも一〇〇年の繁栄ののちに滅びた》

今の映像は ノアインパクト の映像だろう。

《？彼ら？が再び戦争をはじめたからだ。？彼ら？には大きくわけて二つの勢力がある。あの双子は太古の昔から、この世界に墮とされたときから争っている。人間は？彼ら？の前では無力だ。築き上げた文明も都市も一瞬にして滅びる。近年最大だった？彼ら？の衝突が ノアインパクト だ。 ノアインパクト を最後に、？彼ら？は小康状態にある》

映像はそこで終わった。

ケイの正直な感想は啞然とする表情からも伺えた。

「話が大きすぎて、現実だとは思えませんでした。でもあたしはこの世界を少し旅したので、信じることはできます。ただ当時の人たちはあたしよりも混乱してたはずだし、そんな簡単に異星人みたいなものを受け入れるなんて。だってその人たちに日本の一部を乗っ取られたんですよね、そこにはその人たちがいっぱい住んで、いつまた日本が攻撃に巻き込まれるかもわからないじゃないですか」

《帝都エデンを治めていたのは？彼ら？だが、住んでいた多くの住人は東京の生き残り、もともとの神奈川県民たちだ。？彼ら？は数えられる程度しかそこにいなかった。帝都政府は都市を発展させ、人々の生活を良くしてくれた。そして、日本政府が妥協した最大の理由は、自分たちでは自国を守れなかったからだ。敵とされたのは、帝都政府とは違う？彼ら？のもう一つの勢力。日本政府は帝都政府と同じ敵を持つことによって、帝都政府と仲良くしなくてはいけなくなつたというわけだ》

神奈川に住んでいるケイは、自分の世界でこの世界と同じことが起きたとき、本当に？彼ら？を受け入れることができるのか、それが疑問として解決できずに心で渦巻いた。この世界の歴史では最終的には受け入れたとされていて、説明されなかった背景では多くの紛争や暴動があつたはずだ。それに巻き込まれると思うと、ケイは恐ろしくなつてしまった。

シキがケイに顔を向けてきた。

「あの街の話は今置いておこう。問題なのは、ケイちゃんが聖戦とまつたく同じ日時から来たということだよ。因果関係はありそうだけど、気になるのはケイちゃんがいたのは神奈川ということだね。神奈川のどこにいたか覚えてる？」

「大和に住んでたんです」

「シン君、ヤマトってどこかな？」

《米軍厚木基地があつた近くだな。つまり帝都政府の中枢があつたヴァルハラ宮殿や 夢殿 ができる場所だ》

それを聞いてシキはうなずいた。

「なるほどね。あの場所は死都東京のアレを守っていたエネルギースポットだ。政府の建物ができる前から共鳴してたんだ。その共鳴に巻き込まれた可能性が高いね」

なにを言っているのかケイには理解できない。

「あたしにもわかるように説明してもらつていいですか？」

「ケイちゃんがこの世界に飛ばされた現象が発生した理由はわかっ

たよ」

「じゃあ帰るんですか！」

「残念だけど、それは無理だよ」

希望の光は一瞬にして闇に包まれた。

ケイはシキの両肩を握った。

「どうしてですかっ!？」

「?彼ら?が意図したものでないからだよ。そのときに発生したエネルギーは、?彼ら?が衝突して生まれたもの。つまり東京を一瞬にして壊滅させた力。同じような現象を起こし、なおかつほかの繊細な条件も必要になってくるだろうね。失敗すれば、この世界にまた ノアインパクト を引き起こしかねない。引き起こしてもケイちゃんが還れば?大成功?だけど、ただ世界を崩壊させて終わるのがオチさ。そういった現象を自由に操れるのなら、?彼ら?はそれを起こして自分の世界に還っているさ、この宇宙を崩壊させてもね」

この世界を滅ぼす。

還りたいという気持ちは強い。心からそれを切望している。けれど、ケイは再現とはいえ、トキオ聖戦や ノアインパクト の映像を見たあとでは。

「この世界を滅ぼしてまで帰りたいとは思いません。でも、本当にムリなんですか?」

「別の方法を考えよう」

「そうですね、この世界に來た要因の目星はついたんだもんね…
…なんとかありますよねっ!」

ベッドのほうから動く音が聞こえた。

寝返りを打った炎麗夜。

「あゝっ、二日酔い…:…じゃないか…:…ここは?」

目覚めた炎麗夜にシキはニッコリ笑顔を浮かべた。

「おはよう、目覚めが悪そうだね」

「最悪さ」

目つきが悪く顔色も悪い炎麗夜。

ケイは不思議に思った。

「あたしは普通に起きられましたけど？」

なぜかこのとき、シキは難しい表情をしていた　ケイの顔を見ながら。

《興味深い情報が見つかったぞ》

突然シキが言ってきた。

部屋にいた三人の視線がパソコンに向けられた。

《情報開示は報酬次第だな》

白い目でケイはパソコン画面を見た。

「このひとお金とか取るんですか？」

《悪いか、もともとは帝都一の情報屋だったんだ。今だって危ない橋を渡つて、おまえらと話してやってるんだぞ。報酬くらいもらつて当然だ》

画面の中で顔を膨らませた魔法少女を炎麗夜が指差した。

「だれだいいいつ？」

「この魔都エデンを支えてる超電子頭脳だよ」

と、シキが答えたが、炎麗夜は口をぽかんと開けてしまった。

「は？　なんだいそれ？」

「電気や通信や交通システムに至るまで、この都市は彼によって制御されてるんだ。旧帝都エデンで発掘されたいわゆる　聖遺物　だよ。実際は元人間で電子頭脳になった、ただの変態アニメオタクだけどね」

一部、言葉が強調されていた。

《変態アニメオタクというのは、反論の余地もない誉め言葉だ。加えて言うなら、守備範囲はアニメだけではないぞ。ただし、褒めても情報はただというわけにはいかんな》

ケイが身を乗り出してパソコン画面に近づいた。

「あたしに関係あることですか？　ならあたしがどうにかして報酬を払います！」

そんなケイをシキは優しく押し退けた。

「なんでも屋シキのボクが払うよ。こいつが好きそうな物なら揃っているからね」

《ほほう、どんな物がある？》

「ついこないだ帝都遺跡で発見された雑誌があるんだ。保存状態はかなりよくて、欠損部分は一つもないよ。たしか雑誌の名前はファミ通だったかな」

《なにイ、あのゲーム雑誌か！　だがゲーム雑誌があっても、ゲームがなくてはつまらんな》

「ならフィギュアなんてどうか。今の時代ではとても貴重な爆乳フィギュアだよ。ちょっと待って、今出すから」

シキは部屋の片隅に置いてあった箱の中から、そのフィギュアを出して、ウエブカメラに大きく映した。

「忍者っぽいけど、作品まではわからないだよ」

《それは爆乳ではない、魔乳だ。確か名前はおっぱいみたいなキャラだったと思うぞ。作品名には『魔乳』の文字があったような気がするな》

「雑誌とフィギュアの二つでどうか？」

《よし、それで手を打とうではないか。ではこれを見せよう》

パソコン画面に映し出されたケイの顔写真。

いつ撮られたのだろうか？

よく見るとそれは報告書の添付写真　いや、カルテだった。

《オレの優秀なコンピューターたちが探してきた。二〇〇一年のカルテだ》

二〇〇一年？

空白であるはずの年。

その可能性にケイは気がついた。

「あたし元の時代に帰れたってことですか！？」

《そういうことになるのかもしれんな。ただ詳しい書類を見ると、少し気になることが書いてある》

「なんですか？　もしかして悪い病気とか？」

《発見されたのは一九九九年。所持品の生徒証から名前や住所が判明するが、そのような生徒は在籍しておらず、住所の場所にも別の家族が住んでいたとある。その後の調査で身元を探したが、名乗り出る家族も友人もおらず、身元不明のまま病院ですつと昏睡状態だったそうだ》

「えっ……えつと、え……んっ……どういつ……こと？」

元の世界に帰れたのか？

そうだとでもなぜ身元不明なのか？

なぜ昏睡状態なのか？

《二〇〇一年のその年、新たにもたらされた魔導医学によって、治療の方法が見つかるまで超安静人工冬眠装置によって眠りに就かされたとあるな》

そんな説明をされても、ケイの頭の中には入ってこない。

「わけわかんない……あたしになにが起きたの？」

《それからまだいくつか記録が残っている。そして、目覚めぬままノインパクトに突入した。それ以降の記録は残っていない》
話をされるほどケイは混乱が増すばかりだ。

炎麗夜も首を傾げてしまっている。

ただこの中で、シキだけが難しい顔をして、なにかにうなずいた。

「ボクらは根本的な思い違いをしていた可能性があるね」

それは？

「空間も時間も超えてない。ケイちゃんはずつとスリープ装置で寝ていたんだよ」

新たな可能性だった。

過去から未来へ、そして過去へ帰り昏睡状態になった　と考えるより、過去に昏睡状態になり、記録の通り人工冬眠状態で現在まで生きていたと考える方が、タイムスリップなどというより、整合性があり合理的だった。

それはケイにさらなるショックをもたらした。

「じゃあ……帰れないってこと？」

どこからか？来た？のでなければ、？帰る？ということとは存在しない。

一瞬にしてなにもかも失った。

ケイが生きたあの世界に置いてきたものを取り戻せないばかりか、この世界での目的も失ってしまった。

死んだような顔をしたケイは、ふらつく足でそのままベッドに飛び込んだ。

周りでだれかが声をかけてきているが、今のケイにはなにも届かない。

まるで世界が黒く塗りつぶされたようだった。

第13章「叛逆の烽火」

青空の下、壇上に設置されたスピーチ台の前に現れた都智治の姿。「このようなエデンの郊外まで、報道陣や関係各社の皆々方、よく参ってくれた大義である」

都智治の背には白い謎の施設があった。煙突やドーム状の屋根も見えている。

「我が国の復興のシンボルであるエデンを中心に、近年の近隣都市や関東の復興は目覚ましく、それに伴い電力の消費が今後多く見込まれる。そして、今日そちたちに披露するのが、この政府エデン電力チバ第一魔導炉である」

歓声と拍手が巻き起こった。

そのスピーチを遠くから聞いていた車椅子の紅い女。

「これでまた都智治の株価が上がるわね。今の時代に求められているのは、夢を見させてくれる強い指導者。民衆は彼女に陶醉し、今や確固たる地位を築いたわ。民衆の目には、彼女が姉を越えたと映るでしょう。問題は……あの娘はとってもメンタルが弱いつてことかしら」

マダム・ヴィーは横にいた盲目の女秘書に顔を向けた。

「あれの選定は終わったかしら？」

「終わりましたが、やはりエデンには居りませんでした」

「簡単に適合者が見つかるのなら、妹に継がせたりはしなかったわ。引き続き今度はエデンの外まで搜索範囲を広げましょう」

「畏まりました」

壇上ではまだ都智治がスピーチを続けている。

マダム・ヴィーは壇上に顔を向けていた。その表情が読み取れるのは口元のみ。ルージユは三日月を描くように妖しく微笑んでいた。スピーチが終わり、施設内部の見学のために移動の準備が進められていたとき、遠くから甲高い破裂音が聞こえた。

集まった人々はどよめき怯えた。彼らがまず見たのは施設の方向だった。魔導炉で事故が起きたのではと危惧したのだ。

だれかが口々に叫ぶ。

「ノアインパクト の原発事後のようなことが起こるんじゃないか！」
「魔導炉は安全なはずじゃないのか！」

さらに人々は慌てふためいた。

しかし、都智治は破裂音がしたと同時に駆け寄ってこようとしたSPを制止させ、冷静に笑顔を取り繕っていた。

「過去の記録では ノアインパクト の際、世界中で原因不明の原発事故が起きたとされている。現在のエデンの科学力を持ってすれば、原発を再建することは可能だが、三〇〇年以上経った今も 原発の異形 どもは種として生き残っている。ゆえに原発再建に反対する声は根強くある。代わってこの魔導炉は、クリーンかつ安全な施設である。事故など決して起こらないのだ！」

その言葉で人々の視線は都智治に向けられたが、またもどこかで破裂音が！

しかし、その方向は施設ではなかった。

会場の周辺に立っていた警備兵が撥ね上げられた。

暴走トラックのように姿を見せた黄金の巨大猪。跨る炎麗夜は超乳を揺らし、その後ろにはケイが乗っていた。

警備兵が叫ぶ。

「テロだーッ！ 都智治をお守りしろ！」

すぐにSPが都智治を守ろうと、自分たちが壁となり、壇上から遠ざけようとした。

しかし、少女の躰からは想像もできない力で、都智治は巨漢のSPたちを吹っ飛ばしたのだ。

「キャハハハハ、おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい！」

狂いだした都智治。その眼は炎麗夜の揺れる超乳を凝視していた。それでもSPは都智治を守ろうと いや、取り押さえようとした。

しかし、少女ひとりに巨漢の男たちがことごとくやられていく。その様子をマダム・ヴィーは遠くから眺めていた。

「本当にメンタルが弱い娘、大事な席で取り乱すなんて。この場から誰も逃がしては駄目よ、都智治の醜態を見られては政権に関わるわ。報道陣たち民間人も拘束して投獄してしまいなさい。刃向かう者は殺すのよ」

ルージユが不気味なまでに艶やかな微笑みを浮かべた。

命じられた秘書はすぐに無線で警備兵たちに連絡し、周辺に鉄壁の包囲網が物々しく張られた。

女記者が怯えながらその場から逃げようとする。

「あのテロリスト、ヒミカ病だわ。感染したら死んでしまう！」

次の瞬間、その女記者は脳漿を噴きながら倒れた。

それを見たほかの記者や関係各社の人々が一斉に逃げ出そうとした。

狂乱の宴を彩る朱い華が次々と咲いた。

マダム・ヴィーは自らの胸をまさぐり艶笑していた。

「ああつ、魔導炉の完成を祝う素敵なセレモニーになったわあー！」
朱の絨毯が地面に敷かれた。

動かなくなつた同僚の横で呆然としている若いカメラマン。逃げる意志、それどころか思考すら停止している彼も、次の瞬間には倒れていた。

この凄惨な舞台に耐えられず、ケイは炎麗夜に強く抱きつき目をつぶつた。その変化に炎麗夜は気づいたようだ。

「だいじよぶかいケイ？」

「……………」

「やっぱり来なかったほうが……………」

「独りでいるほうが気が狂いそうで、もうだれとも離れたくない。知ってる人の傍を片時も離れたくないんです。だからあたしは平気です」

ケイの震えは炎麗夜にも伝わっている。無理をしているのは明らか

かだった。

すでにこの場で立っている者は僅か。

白銀大狼フェンリルがシキの命令で警備兵を確実に仕留める。

「炎麗夜姐さん、周りの敵はボクが引き受けるから都智治を頼んだよ！」

シキの手から放たれた幾本もの鎖が警備兵を拘束する。

ついに都智治の前まで来た炎麗夜、フレイから下りてケイを見つめた。

「こいつが守ってくれるから、ここでじいっとしてんだよ」

「デーモン がなくても平気なんですか！」

「あんな餓鬼に本気出したら可哀想だろう。じゃ、行ってくるよ」
残されたケイは自分を責めた。

「足手まといになってる……」

小声でつぶやいた。

足手まといになることは予想できたはずだ。

それでもケイは炎麗夜の傍を離れて待つことができなかった。

シンから情報を聞いて絶望したケイにとって、炎麗夜は暗闇を照らす灯火だった。この光を失っては生きていけない。炎麗夜に出逢っていないければ、この世界でさらに過酷な運命が待ち受けていたことだろう。政府に捕まり 生きていなかったかもしれない。

ケイはフレイの毛を握り締めた。炎麗夜は瞳に映る場所にいる。今からこの世の中を変えるために戦おうとしている。

狂った都智治。

「ひひひ……ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃ……おっぱいめ、私にその禍々しいおっぱいを見せるな、見せるな見せるな消えてしまえ死んでしまえ失せろーッ！」

禍々しい邪気を放ちながら、都智治は酔いどれのような足つきで、ふらふらと炎麗夜に近付いてくる。

炎麗夜は拳を強く握った。

「巨乳狩りもヒミカ病も今の世の中糞つくれえさ。おっぱいおっぱ

いつるせえ貧乳の都智治さんもな！」

熱い拳が吠える。

強く握られた炎麗夜の拳は血を撒き散らしていた。

自らの拳を傷つけるほど強く握られた 想い！

強烈な一撃は都智治の顔面を抉った。

殴られた都智治は横を向いた。だが、首から下は微動だもしない！

悪寒がするほどの狂気。乱舞する都智治。

ガトリング砲のような連続した強烈なパンチが炎麗夜を襲った。

都智治は炎麗夜を殴りながら、嗤っている、涎れを垂らしながら

嗤っている！

「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい！」

瞳に映っているのは炎麗夜ではなく、その豊満に揺れる胸。彼女

にとつて、敵は炎麗夜ではなく豊満な胸なのだ。

顔や胸や全身に青痣をつくりながら、炎麗夜が地面に膝と手をつ

いた。

「やりやがる……魔都エデンの支配者も魔性の子ってわけいかい…

…くっ」

鼻から垂れる血を手の甲で拭うが、拭いきることが出来ず大地に

吸いこまれる。

その光景を見ていたケイはフレイから下りた。

「炎麗夜さんを助けてあげて、あたしならだいじょぶだから」

ケイはフレイの躰を押しした。

鼻息を荒くしたフレイが都智治に突進する！

小柄な都智治はただ手を前に突き出したのみ、それで受け止めよ

うというのか!?

「穢らわしい！」

フレイの頭突きが都智治の手のひらに触れた瞬間、爆発的な衝撃

波が巻き起こった。

押し飛ばしたのは都智治！

巨体のフレイが宙に飛ばされ、轟音を立てながら地面に落ちた。

炎麗夜はすぐ近くに落ちてきたフレイに手を伸ばす。

「フレイ行くよ、ファルス 合体！」

黄金の毛皮のマントに変貌するフレイ。

身に纏った炎麗夜の鼻から、朱い玉が宝玉のように零れる。

今の炎麗夜は、鼻血すらも芸術的だった。

眼を血走らせた都智治が殴りかかってきた。

威風堂々と立つ炎麗夜。

都智治の拳は炎麗夜に触れることができなかった。

「もぎ取ってやるもぎ取ってやる……だがなぜ触れられない!？」

「おいらたちの ムゲン は 崇高美 。この美しい造形を崩すことは、あなたのような醜い女には不可能なのさ！」

今まで 崇高美 を打ち破ったのはネヴァンの毒粉のみ。

都智治は後ろに飛び退いた。

「キエエエエツ ファルス 合体！」

まさか都智治も ムシヤ 化するつもりか!?

だが、その近くに獣の姿 デーモン はいないはず?

都智治の影が蠢いた。

まさか。

「あの影が デーモン なわけ……聞いたことないよ！」

炎麗夜は驚愕した。

デーモン は別名 魔装獣 とも呼ばれている。それは獣の形をしているからだ。

影は生物ですらないはず!

次々と蟻のように現れる警備兵と交戦していたシキが、都智治の異変に気づいて振り向いた。

「それも デーモン だよ! 初期の研究で デーモン の素体候補は無機物や? 現象? まで多岐に及んだんだ!」

この戦いを遠くから静観していたマダム・ヴィーは、今のシキの発言を集音器で拾っていた。

「なぜあの女……殺す前にどこで仕入れた情報か吐かせる必要がある

りそうね。あの帽子を被った女は生け捕りにするようには伝えなさい」
「畏まりました。しかし、生け捕りにどころか、兵たちは触れることも叶わないようですが？」

秘書はそう提言した。

「もうすぐバイブ・カハが到着するわ。それまで逃がさないように粘りなさい」

バイブ・カハがここに来る。

それまでに炎麗夜は決着をつける必要があるようだ。

デーモン と合体した都智治は、赤黒く塗りつぶされた存在になっ
ていた。

「ムゲンの力 悪無^{あくむ} を思い知るがいい、イーッヒヒヒヒッ
！」

高らかに嗤った都智治の姿が消失した。

だが、その場所からは禍々しい邪気が感じられる。

炎麗夜は？何か？が近付いてくるのを感じてガードした。

殺意！

ガードした腕が血を噴いた。

なにも見えない。見えない鋭い？何か？で腕が切り裂かれた。

苦しいほどの禍々しい気配はあるのだ。

それが近付いてくると息が詰まる。

しかし、見えない！

見えない恐怖が襲ってくる。

炎麗夜の胸の谷間を冷たい汗が流れた。

「崇高美 が破られた……見えない？何か？によって。いったい

あの糞餓鬼はどこ行った？」

「キャハハハハ、ここだここだここだキヒヒ！」

殺意！

またも炎麗夜の肌が傷つけられた。今度は気配だけを頼りに躲したため、腕を少し切られただけだ。

「また 崇高美 が……どうなってやがる！」

炎麗夜は自分の周りを動く禍々しい？何か？を感じていた。円を描きながら、それは獲物をどうやって甚振ろうか、足踏みしているようだった。

「グヒヒ……醜さは伝染する。テメエの美しさよりも、私の醜さのほうが優っていたようだな。なにが 崇高美 だ、穢してやる、穢して犯るぞ！」

？何か？が炎麗夜に飛び掛かってきた。それを気配だけで察知して、炎麗夜はカウンターパンチを放った。手応えがあった！

柔らかく不気味な感触を炎麗夜の拳は捉えた。

「グギャアアア！」

？何か？が地面に落ちた音がした。

見えなくても実体はそこにあるのだ。

ビュシユルルルウツ！

不気味な音を鳴らして？何か？が放たれた。

それは炎麗夜の足首に巻き付き、足を掬ったのだ。転倒する炎麗夜。

「又メ又メする……なんなんだい！？」

柔らかくぬらぬらする縄のような物が、巻き付いている感覚がある。まるでそれは触手だった。

触手は炎麗夜の内腿に絡みつきたがら、股のほうまでじわじわと登ってくる。

新たな触手が躰に巻き付いた。全身を蚯蚓みみずが這うような嫌悪感。触手が螺旋状に超乳を縛り、たわなな実りが変形するほど締め上げる。

「ああっ……くう……離せ、おいらを離せ！」

実体は見えなくとも、それを肌が感じてしまう。さらに唾液のような、妖しく光る液体が、炎麗夜の肉に塗り込まれている。

「ンあっ……このっ……くうっ……ッ！？」

触手は炎麗夜の口腔にまで侵入してきた。

しかし、なにも見えないのだ。

炎麗夜が地面で独り悶えているようにしか見えない。

どこからか都智治の声が木霊する。

「何故、何故何故見えないのか教えてやろう。それはあまりに？この？姿が醜いからだ。想像を絶した醜悪な？この？姿は、人間の脳では処理しきれず、見えていないことにされてしまうのだ。そして、テメエは見えない恐怖に犯されるのだ、ギャヒブブブッ！」

芳しい花の香りがした。

紅い月 が天から落ちてくる。

ズシャアアアアアッ！

見えないその場所が紅い花びらを大量の噴き出した。

「斬ることに見ることは不要」

花魁衣装を身に纏ったアカツキは、高下駄の上から炎麗夜を見下ろした。

「貴様を助けたわけじゃない勘違いするな。俺様以外の手に掛かるのを防いだけだ」

「アカツキ……その顔は？」

炎麗夜はアカツキの顔を見て驚いた。元々白かったその顔が、白塗りされてさらに白くなっていたのだ。唇に引かれた紅がさらに鮮やかに際だっている。

バイブ・カハよりも先に現れたアカツキ。

鬼気迫るアカツキが刀の切っ先を向けるのはだれか？

第14章 真相

まるで枝々から朱い花が咲き乱れたような光景だった。

アカツキの刃が見えない幾本もの触手を切り刻んだのだ。

「グヒヤアアア…ヒギギギ……」

不気味な呻き声を漏らした都智治。

本体から切り離された触手は、その姿を現し赤黒い巨大蚯蚓のように蠢いている。

巨乳狩りを推進していた政府の長である都智治が、巨乳狩りをしていたアカツキに斬られた。

なぜアカツキは巨乳を狩るのだ！

触手から解放された炎麗夜は鋭い視線をアカツキに浴びせた。

「都智治斬つてまで、おいらたち巨乳を狙う理由はなんだい？」

「……………」

「あなたはこれからお尋ね者さ。賞金をもらうどころか、あんたが賞金首だ。ただの殺人鬼か、それともほかに理由でもあるんかい？」

「……すべての巨乳を救うため。巨乳狩りの流れが止められないのなら、俺様にできる方法はこれだけだ」

アカツキは炎麗夜に斬りかかった。

それが巨乳を救う答えだともいうのか！

崇高美 によって炎麗夜はアカツキの刀を握り締め止めた。

「おいらを傷つけることは不可能さ」

「前の俺様だと思うな」

妖しく微笑んだアカツキは、儚げで美しかった。

「なっ……（おいらの 崇高美 が崩れるはずが）」

刀を握る炎麗夜の手の隙間から、鮮血が滲み出してきた。

白塗りされたその顔は、美しさを引き立たせるだけでなく、ヒトを人外へと導く。

まるでつくられた人形のように、すべてが整っているアカツキ。

花魁姿に着飾ることがアカツキに力を与えた。

これ以上は骨を断たれる。炎麗夜は刀から手を離して飛び退いた。すぐにアカツキが速攻を決めようとした。

そのときだった！

「やめて！」

響き渡ったケイの叫び。

動きを止めたアカツキはケイを見て呆然とした。

「……誰だ？」

決して初対面ではない。

アカツキは切っ先をケイの魔乳に向けた。

「その胸は貴様じゃない。なぜ貴様がその胸を持っているんだ！」

「胸？」

「前と顔つきも……そんな嘘だ……貴様が似ているなんて嘘だ」

全身から力の抜けたアカツキの手から刀が滑り落ちた。

殺意！

見えない触手が槍のようにアカツキの躰を突き抜けた。

「ぐはっ」

可憐な蕾が黒い悪夢を吐き出した。触手はアカツキの胃腸を損傷させたのだ。

「ぐひゃひゃはああ、さっきのお返しだ変態野郎！」

アカツキに触手を斬られ沈黙していた都智治が、復活していたのだ。

串刺しにされたアカツキだったが、表情一つ変えずに艶やかさを保っている。

「貧乳には興味ない」

輝線を描きアカツキの刀が？何か？を斬った。それは触手の一部だった。本体から切り離された触手は見えるようになり、アカツキはのたうち回る触手を己の肉体から引き抜いて投げ捨てた。

地面が激しく揺れた。都智治が暴れているのだ。

「貧乳だとオオオッ、貴様も私を馬鹿にするのか、貴様も私と姉を

比べるのかッ！」

地響きは遠く離れていたマダム・ヴィーの元まで届いていた。

「姉の幻影に怯え、本当に可愛い狂人だわ。ただ狂いすぎていて、エデンの顔には向かないわね」

独り言をつぶやいたマダム・ヴィーに、盲目の秘書が顔を向けた。

「M反応 を検知いたしました」

「どこで？」

「この場所に Mの遺伝子 の適合者がおります。特徴はショートヘアで、この中でもっとも胸が豊満な若い娘、先ほどから戦闘には参加していないとのことですよ」

「ああ、あの娘ね」

それはケイのことだった。

マダム・ヴィーのルージューは、そこだけで恐ろしさを表現する笑みを浮かべた。

「あの都智治はもう捨てましょう。新たな Mの巫女のもと、政府は新体制で新たな門出を迎えるのよ」

「そうはさせないよ」

その声が冷たく響いたと同時に、秘書が地面に倒れていた。

マダム・ヴィーの前に現れたのはシキ。

「ご機嫌よう、夢の館の生き残り マダム・ヴィー」

「あら、わたくしのことを知っているなんて、どこのだなたかしら？」

「闇の子 を崇拜していた魔導結社D O Tの元幹部。今は偽りのエデンの支配者というわけかな？」

「正体を明かしなさい」

「ボクは 光の子 と 闇の子、どちらに支配される世の中も望んでいない。？彼ら？の夢見る楽園エデンなんて必要ないよ」

「言いたくないのなら、拷問で吐かせてあげるわ」

地中から巨大なサソリが這い出てきた。

毒針のついた尾がシキを襲う。

突然現れたサソリの攻撃をシキはいとも簡単に躲した。

「オリジナル デーモン だね。どのソエルと融合させた？」

「そこまで知っていると驚きだわ。D計画の真の目的まで知っているなんて、内臓が出るまで貴女の口からなにを知っているか聞きたいわ」

「なら攻撃をやめてくれないかな？」

「それはできないわ」

サソリの毒針がシキの肩に刺さった。

しかし、シキは顔色一つ変えずにその尾を掴んで逃がさない。

「ならこのまま話そう」

「毒針すら効かないのね、素敵だわ。生体である デーモン にすら効くのにな」

「ボクの正体に気づいたかい？」

「闇の子 と 光の子 を敵に回した 傀儡士紫苑くわいじしおん。貴方の一

族は今もソエルに怨みを持っているのかしら？」

「それはセーフィエル ボクの祖母だけだよ。ボクはただ母を取り戻したいだけだ。母もオリジナル デーモン にされているかもしれないと思っただけど、いまだに見つかからない」

「素体との融合前に逃げたのよノイン……はワルキューレでの名前だったわね。本当の名前は貴方の通り名と同じシオンだったかしら。不安定な アニマ で逃げたから、もう完全消滅してしまったかもしれないわね」

マダム・ヴィーの首に鎖が巻き付けられた。

「消滅なんて絶対にない！」

怒鳴られても、首を絞められようと、マダム・ヴィーは妖しい笑みを崩さない。

「融合に必要な改造を終え、もつとも不安定な状態だったのよ。まさかあの状態で逃げる事ができるなんて、想定外でもとても愉しませてもらったわ」

「実験台にされたのは 光の子 陣営のソエルだけじゃないだろう

！ どれだけの人間をこれまで デーモン に変えた！」

「覚えてないわ……うつ」

鎖がマダム・ヴィーの首を絞めた。呼吸をするのがやっとで、しゃべることも許されない。

デーモン とはいつたいなにか？

シキはそれを知っている。

「デーモン は消滅しかけた 闇の子 陣営の魂魄 アニマ を救済する緊急的な処置として開発された。オリジナル デーモン は、人間の アニマ を媒介として、ソエルの アニマ を安定させ、さらに人間の肉体とも融合され、魔導装甲機体とする。正確には人間の肉体や魂の器まで、すべてに寄生して乗っ取るというのが正しいだろう。実験段階では人間ではなく、動物や物に至るまでありとあらゆるものが素体にされ、その副産物として生まれたのが凡庸型 デーモン だ。凡庸型にはソエルの アニマ ではなく、人間の アニマ が使われ、その自我は封印され、ただの兵器に変えられてしまっている」

少し鎖が緩められた。

「その通り、凡庸型は動物の素体と アニマ に、人間の アニマ を融合してつくる。さつき向こうにいた猪は、猪が素体となり、どこかの誰かの アニマ が融合してあるわ。凡庸型までわたくしは関知していないけれど」

「昔からずつとおまえは生命を弄んでいる。ボクはおまえがつくったキメラを何匹も殺してきた」

話の途中だったが、上空の気配を感じてシキはそれを見た。

舞い降りてきた三つの凶鳥の影。

ついにバイブ・カハが到着したのだ。

マダム・ヴィーは唇を舌で舐めたあと、接吻の音を鳴らした。

「新たなゲストが到着するまでのお持て成し終わりよ。ではご機嫌よう、お人形さん」

霧のようにマダム・ヴィーが消失した。

巻き付くものを失った鎖が地面に落ちて音を立てた。

「空間転送の技術まで復活させていたのか……」

シキはすぐさまケイたちの元へ走った。

積み上げられた触手の山の中から都智治が這い出してきた。ム

シヤ 化は解けてしまったようだ。

「胸のない奴にまで私は……うつつ……」

地を這いつくばる都智治に手を貸す者はいなかった。その場には
バイブ・カハがいるにも関わらず。

それにまだ気づいていない都智治は、豊富な胸々を指差して叫ぶ。

「殺せ、バイブ・カハなにをしている！ 早くそのおっぱいどもを
殺せーッ！」

バイブ・カハはだれも動かない。

マツハは冷たい視線を都智治に浴びせた。

「都智治さん、アンタはマダム・ヴィーに捨てられたんだ」

さらにネヴァンも続いた。

「可哀想なお嬢さんだわ。もう生きている価値もないのね（アタシ
たちもいつヴィーに捨てられるか、早いうちに先手を打たなくては）」

都智治は眼を血走らせてモーリアンを睨んだ。

「本当かモーリアン！」

「はい、我々が貴女の命令を聞くことは一切なくなりました」

「キヒヤハハハハハ、それならそれでいい。皆殺しだ血祭りだ血の
一滴まで搾り尽くしてやる！」

しかし、もう都智治は戦う力など残っていないかった。

この場にやってきたシキが囁いた。

「都智治……いや、リリカちゃん。キミは姉を殺してまで都智治の
地位を手に入れたけど、すべては儚い悪夢だったんだよ」

一同に動揺が走った。

炎麗夜が眼を丸くして声を荒げる。

「都智治が前都知事殺しただって？」

政府側であるマツハも驚いていた。

「姉殺しまでやったのか。相当なコンプレックスを抱いてたとは聞いてたけどな」

「そういう噂は聞いていたわ。モーリアンお姉様は知っていたのかしら？」

ネヴァンはそう言ってモーリアンに顔を向けた。

「私は知っていた。それにまつわる真相も……（巨乳狩りがいかにして生まれことになったか）」

真相とは？

アカツキから殺気が立ち昇り、切っ先がモーリアンに向けられた。

「巨乳狩りはヒミカ病が原因ではない、そうだなモーリアン！」

「貴公知っているのか!？」

「別の理由があることには気づいていたが、すべてを貴様から聞かせてもらおう」

「それは言えない（姉をコンプレックスから殺し、その殺害を病気に偽装して、コンプレックスの一つであった豊富な胸の女性を皆殺しにするという幼稚な政策）」

いきなりアカツキがモーリアンに斬りかかった。

寸前でモーリアンが剣で刀を受けたが、その衝撃で地面に倒されてしまった。

馬乗りになつたアカツキは、刀で剣を押しながら、憎悪を込めて囁いた。

「そのくだらないコンプレックスが本当に原因なのか？」

「なっ……（まさか ムゲンの能力か!?)」

「自分が貧乳というだけの理由で、巨乳の女たちを殺したというのかッ!！」

叫び声は全員の耳に届いた。

もはや隠す理由もなくなった。

モーリアンは刀ごとアカツキの躰を押し返し、すぐに立ち上がって体勢を整えた。

「そつだ、ヒミカ病など存在しない」

発症した者は死にたる病。その症状の一つに乳房の肥大があると云う。そして、その代表的な発病者の名前 前都知事であるヒミカこと現都智治のリリカの姉の名から、そう呼ばれるようになったヒミカ病。

だが、マツハが異議を唱える。

「街で次々と感染者が出て、貧乳だった女が巨乳になっただろ！」
モーリアンはだれの顔も見ず答える。

「あれは人為的につくられたウイルスを、政府が市販の食品に混ぜて発症した別の病気だ。人から人へと感染するものでもなければ、死に至るものでもなかった」

今までなにも知らず巨乳狩りに荷担してきたマツハは激怒した。

「アタイは狩りができればそれでよかった。けどな、そんなくらない理由のために働かされてたと思うと反吐が出る。巨乳なんてもう狩るか！」

おそらくこの巨乳狩りの理由が公になれば、政府に従わない者も増え、世の中の流れが変わるかも知れない。

ケイも狩られる立場として一歩前が出た。

「そうですね、巨乳狩りなんて間違ってるんです。だからもうやめましょう！」

病気でないとしたら、大きな過ちであったとしか言いようがない。炎麗夜が地面に這っている都智治を見下ろした。

「ならやっぱこいつ倒せば巨乳狩りは終わるんだね」

それにケイは反対する。

「駄目ですよ、そんなことしなくても、みんなが事実を知れば世の中は動きます。もうだれも傷つかなくていいんです！」

「それはどうかね」

と、シキが言った。

さらにシキは続ける。

「残念だけどね、ボクはさらにその先の真相を知ってるんだ」

驚いた視線がシキに集中した。
病気は嘘だった。

そして、妹が姉に抱いたコンプレックスが、引き起こした幼稚で乱暴な政策でもないというのか？

都智治が呻く。

「なんだと……その先の真相だと、ふざけるな。私はおっぱいが憎いだけだ、それ以上でもそれ以下でもない、すべての巨乳どもを根絶やしにしてやる、そののなにが悪い、イヒヒヒヒ！」

「ボクは本当にキミを哀れむよ。巨乳狩りはキミが望んだかもしれない。けどね、巨乳狩りが行われるように、巧みにキミを誘導したのは、マダム・ヴィーだよ」

「奴が私を誘導した？ キャハハハハ、ヴィーにどんなメリットがあると言っただい！」

「巨乳狩りの真の目的は、例えるなら？ 遺伝子？ のようなもの、その？ 遺伝子？ を持つ存在を駆逐するために行われたんだよ」

シキの言葉にモーリアンは激しく驚いたようだ。

「本当なのか、私たちは都智治のエゴのために働いてはないのだから、（それならば少しは救われる）」

表向きの真相を知っていたモーリアンは、任務とはいえ思うところがあつたのだろう。

そして、裏にある真相をシキはさらに語る。

「この？ 遺伝子？ を持つ者はヒミカ病と同じで女性に限られ、乳房が大きくなるという特徴がある。ただし、こちらは成長期を過ぎて突然大きくなるということはないんだ。生まれたときから？ 遺伝子？ が組み込まれている。この？ 遺伝子？ を保有しているか調べるためには、膨大な時間をかけて検査が必要で、この？ 遺伝子？ の存在が知られたときには、すでに世界中に保有者が拡散したあとだった。それでも主に保有者がいるのは二ホンなんだ。そこでマダム・ヴィーは検査などせず、すべての巨乳を駆逐するべく巨乳狩りを行った。それが真実だよ」

シキが話し終えた。

そして、すぐに都智治が立ち上がった。

「他人の思惑なんてどうでもいい。私は、私は……うひひ……おっ
ぱいなど滅びてしまえーッ！ ファルス 合体！」

再び都智治が影の デーモン と合体する。

また姿が見えなくなってしまうのか？

そうはならなかった。

そこに現れたおぞましき異形のもの存在は、少女の面影を何一つ
残してなかった。

第15章 バベル

五メートル越える肉の塊。

赤黒い肌、何重にも波打つ肉、芋虫のようだが、丸々と太りすぎた赤子のようでもある。その全身はフジツボなようなもので覆われ、その中には眼のようなものがある。さらに不規則な並びで躰の各部にあるイソギンチャクのようなものから、細長い触手が束になって蠢きながら伸びている。

想像を絶して？いない？醜さ、ゆえに人間の視覚で捉えることができたのだ。

それでもケイを恐怖させて立てなくするには十分だった。

「なんなの……気持ち悪い」

触手の先端から白濁液が噴き出した。その液は胃を悪くしそうなほど、強烈な甘い匂いを放っていた。

異形の都智治からナメクジのような眼が五本伸びた。フジツボの中にあるのは眼ではないのか。その眼に映ったのは、三人の巨乳。

真っ先に狙われたのはケイだった。

触手が伸びる！

炎麗夜が駆ける。

「ケイ！」

シキは鎖を放った。

「逃げてケイちゃん！」

どちらも間に合わなかった。

「きゃーっ！」

触手に捕まったケイが宙づりにされた。

無数の触手がケイの服を破り、その肉体に絡みついた。

「ああっ……やめて離して……いやっ、いやいやっ！」

全裸にされたケイを助けようとシキは鎖を放とうとしたのだが、その瞳に映ったものを見て動きを止めてしまった。

「あの刻印はまさか！」

肌を這う触手の間になにかが見える。そこはケイの腰の辺りだった。臀部の割れ目のちょうど上の辺り、そこに刻印があったのだ。炎麗夜もそれに気づいた。

「契約の刻印に違いはないよ！」

リンガとヨ一ニが契約をすると、お互いの身体のどこかに刺青みたいな紋章が浮かび上がる。と風羅がケイに話したことがあった。

しかし、正確には少し違うのだ。

シキはその事実気づいた。

「あの刻印は契約をしていないよ。契約をする前に刻印があるのは、ヨ一ニだ！」

驚愕が走った。

だが、ケイはそれどころではなかった。

「うつつ……助けて……あああつ！」

双丘の魔肉の頂にある桜色の蕾が触手の先端に吸いつかれ、激しく伸ばされて渦を巻くように動かされているのだ。

炎麗夜は異形の都智治に殴りかかった。

「世界の美貌をこの手に（ミスワールドパンチ）！」

輝く栄光の拳が異形の都智治に触れた瞬間、焼けるような痛みが走った。

「くあつ！」

叫んだ炎麗夜が拳を押さえて後退った。その拳は赤く爛れていた。

「また 崇高美 が崩されただけじゃあない。こいつに触れると肉が焼かれるよ！」

「ならボクの出番だ、ファルス 合体！」

テンガロンハットを安全な遠くへ投げ飛ばし、ムシャ 化したシキ。

銀色のレーシングと金色のドローミが同時に放たれた。

シキが放ったのは二本、相手は無数だった。

レージングが触手に捕まった。さらにドローミまで！

二本の鎖ごとシキが空高く投げ飛ばされた。あの高さから落ちれば人間は即死だ。

鈍く低い音と共にシキが地面に激突した。

だれもがシキは死んだと思った。

しかし、瞬時にシキは立ち上がり次の行動に移っていた。

それよりも疾く動いていたのはアカツキだった。

「華艶乱舞！」
かえんらんぶ

炎を宿した刀を振り回し乱舞する。

触手を次々と燃やし斬ったアカツキに、巨大な蟹かにの手のような螯はみが振り下ろされた。

刀が螯を受けた。

硬い殻にひびが奔り、そこから滲み出た液体が刀を一瞬にして錆びにした。

そして、刀は折れるのではなく崩れたのだ。

武器を失ったアカツキは素早く後退して手のひらの上に炎を出した。

「炎翔破！」
えんしやうは

アカツキの手から放たれた炎玉えんぎよくが螯を焼く！

炎術士アカツキの姿を見てシキは驚いた。

「まさか火斑ほむら一族の生き残りか！ 馬鹿な、あの一族に男児は生まれないはず！」

「俺様が最後のひとりだ。一族の存亡をかけて俺様は遺伝子操作で生まれたんだ」

「すまないアカツキ」

「なぜ謝る？」

「昔愛した女性とこが君と同じ一族だった。ボクは彼女を裏切り、運命を大きく狂わした。彼女の姉には今も呪われている気がするんだ…

…三〇〇年以上ずっと」

「やはり貴様何者だ？」

シキはそれに答えなかった。

ケイを救う戦いが繰り広げられている中、バイブ・カハは静観していた。異形の都智治は豊満な胸と刃向かう相手しか眼中にないようだ。だが、このまま静観するつもりはなかった。攻撃を仕掛ければ異形の都智治の眼に入る。ゆえに仕掛けるときは、任務を果たすとき。

モーリアンの視線はケイを中心に動いていた。

「あの娘が危なくなったら、確保できなくても戦闘に突入する（マダム・ヴィーのはじめの命令はシキの捕獲だったが、今はあの娘をなにかあると生け捕りにせよとのこと。あの娘になにかがある？）」「思考を巡らすモーリアンにアカツキの眼が向いた。

「やはり（貴公は人間の思考を読めるのか、アカツキ？）」「モーリアンは頭の中でアカツキにメッセージを送った。

しかし、アカツキは何事もないそぶりで再び異形の都智治に向かって行った。

異形の都智治との戦いは続く。

無数の触手と三本の螯、さらに蠅螂のような鎌の手が襲い掛かってくる。戦いの中で異形の都智治は変異し、新たな武器を生み出しているのだ。

炎麗夜は果敢にも素手で触手を引っ張り、ケイを地面に降ろそうとしている。本体に触れなければ、肉は焼かれないらしいが、ほかの触手や螯や鎌までが邪魔をしてくる。

「シキ！」

「なんだい姐さん取り込み中なんだけど！」

「なんでも縛る鎖はどうしたんだい！」

「相模湾あたりの底にあるのかなあ、あはは」

シキはグレイプニルを持っていない。

こうしている間にもケイは陵辱を受けている。

そして、ついに炎麗夜とシキの四肢も触手に捕まってしまった！

異形の都智治が粉碎機のような口を開いた。

ケイの汗がその口へ。

「いやっ、死にたくない死にたくない死にたくない！」

泣き叫ぶケイは為す術もなかった。

アカツキが両手に炎を宿した。

「そつりゆうえん双龍炎！」

渦巻く二対の炎が龍のごとく都智治に襲い掛かる。

都智治は巨大な口をアカツキに向け、青白い汚液を吐き出した。

業火の龍が汚液に呑み込まれ消えてしまった。アカツキも汚液から逃げられない。

花魁衣装がはだけ壁のように広がった。アカツキを守らんがため。

「紅華！」

アカツキの悲痛な叫び。

花魁衣装に穴が開き、溶けていく。青白い汚液は溶解作用があったのだ。

溶けかかっている花魁衣装は、人型へと変貌していく。その人型も半ば溶けている状態だった。

「紅華！ 紅華！ どうして……ぼくを置いて逝く！」

人型 デーモン に寄り添い、アカツキは涙を流して頂垂れた。

さらなる仕打ちがアカツキを襲う。

触手が人型 デーモン を捕らえたのだ。この デーモン も豊かな乳房の持ち主だった。

「紅華！」

アカツキが為す術もなく人型 デーモン は喰われた。

あの粉碎機のような口の中へ消えていったのだ。

膝を付いたままアカツキは気を失った。まるで魂のない彫刻のように、動くことはなかった。

ついにバイブ・カハが動く。

先鋒はマツハだ。

音速で宙を飛翔して、ケイを抱きしめ捕獲した！

そのままマツハはケイに巻き付いていた触手を、飛翔したまま引
つ張り千切った。

異形の都智治はすぐにケイを取り戻そうと触手を伸ばしてくる。
モーリアンがそれを許さない。

「死の荒野　！」

触手が見えない壁に弾かれマツハたちに届かない！？

それがモーリアンの発動させた　ムゲン　の能力だった。

「この　ムゲン　はフィールド内にいる私以外の者が全員死亡する
か、私が死ぬか解除するまで発動される。発動中は外に出ることも、
外から入ることも許されない」

この間にマツハがケイを連れて逃げる。任務は成功したも同然だ
った。

しかし、突如天空がルビー色に輝き、マツハは上空で動きを止め
てしまった。

空が墜ちてくる！

轟々々々音！！
「ゴォォン」

ルビー色の巨大光線が　死の荒野　のフィールドを突き抜け、異
形の都智治を呑み込んだ。

間一髪で逃げたシキは炎麗夜に肩を貸しながら、遙か上空を見つ
めた。

「まさか　メギドの火　を新政府が……いや、やはり奴らも動いて
いるのか！」

昼間に見える微かな月。　メギドの火　が墜ちてきた遙か天空に
は、月があつたのだ。

異形の都智治の姿はもうそこにはない。

換わりにあつたのは、赤黒い巨大な塔だった。

《アカツキ君、ついに　バベル　が完成したから地上に送ったよ。

さあ、君の集めた　アニメ　をもらおう》

どこからか響いてきたゼクスの声。

赤黒い巨大な塔　　バベル　からプラグが触手のように伸びて

きた。

魂の抜け殻同然と化していたアカツキの胸や背中にプラグが刺さる。

「くっ！」

アカツキの躰が反り返った。

さらにプラグはアカツキの口腔にまで侵入してきた。

「う……く……」

いったいなに行われようとしているのか？

プラグがバキュームホースのようになにかを吸い上げている。

アカツキの躰に刻印してあった紋様が消えていく。

なに行われているのかわからなければ、動きようがなかった。

シキが バベル を見上げた。

「キミたちは何者かな、いったいなにが目的なのかな？」

《猫を被るのは……ああ、それは犬耳か。とにかく演技はやめて、ちゃんと話そうじゃないか紫苑君》

「演技じゃないよ、この姿の人格なんだ。それはいいとして、やはり旧政府 光子 の関係者かな？」

《ワルキューレのゼクス、元エデン政府の科学顧問だよ。ワルキューレと言っても、今じゃ二人しかいないケド》

「引きこもりのゼクスちゃんか……今は月面に封印されて、そこで引きこもり生活ってことかい？」

二人の会話にモーリアンが口を挟む。

「旧政府と言うことは、三〇〇年前に滅びた帝都エデンの生き残りと言うことか？」

元エデン政府の科学顧問 ということは、少なくとも三〇〇年以上は生きていることになる。

炎麗夜がつぶやく。

「餓鬼の声にしか聞こえないねえ」

《お婆さんでも、お子様でもないと言っておくよ。おっと、こっとうしている間にも作業が完了したようだ》

アカツキからプラグが抜かれ、バベルへと収納されていく。
《先ほどの質問に答えてあげようかな。なにをしていたかというと、簡単に言えば、光の子の復活だよ。この世界に散らばってしまったソエルの欠片を、アカツキ君を使って集めさせていたんだ》

地面で這いつくばるアカツキが顔を上げた。

「なんの話をしている……巨乳の娘たちを楽園で復活させるのでは……ないのかっ！」

《技術的には可能だケド、それは君を働かせるための口述、いわば嘘》

「なんだとツ！ 巨乳狩りで殺される前に魂を俺様が吸い出し、安全な楽園で肉体を復活させて魂を移し替えるというのは、すべて……すべて嘘だったというのかッ！」

《それを行うことにメリットがない。そんなくだらないことよりも、ボクらにとっては、光の子を復活させるほうが死活問題でね》

意見の相違。

偽りの楽園を築くために働かされてたアカツキ。

絶望、怒り、後悔が渦巻き、アカツキが大地に爪を立てた。

「ごぼっ！」

眼を見開いたアカツキの口から朱い塊が吐き出された。

《アカツキ君、君はもう限界だ。他人の魂魄、つまり魂である精神や心などの霊体と、魄である躰の設計図を取り込み過ぎたんだ。狭い建物にはたくさんの方は住めないし、同じ場所に二つの建物は建てられないよね。もうこちらでアニメを取り出しとはいえ、もう君の躰は限界なんだ》

「俺様はなんのために……もう紅華も失った……うおおおおおおおっ！」

最後の力を振り絞ってアカツキが立ち上がり、バベルに向かって駆け出した。

神の雷。

バベルの頂上からアカツキに向かって雷が墜ちる。

虫の息で生身の人間であるアカツキ。

あの雷が墜ちれば……。

アカツキの頭上で閃光が迸った。

何者かが雷を弾き返したのだ。

その者は紅い花魁衣装に身を包み、背中には輝く翼を生やしていた。

第16章 三位一体

「紅……華？」

つぶやいたアカツキだったが、その考えを改めて首をゆっくり横に振った。

紅い花魁衣装はアカツキのデーモン が変形した物と同じ。

背中の翼は生物的なものではなく、肉や皮のない骨組みだけで、輝きながら小さな光球を零している。

その女の顔を見たシキは驚いた。

「母さん！？ いや……違う、似ている……けど違う」

現れた謎の女の顔はだれが知るものではなかった。

その正体の鍵はマツハが知っていた。

この中でもっとも驚いているのはマツハだった。なぜなら彼女の腕の中にいたケイが消えているのだ。

そして、炎麗夜も気づいた。

「ケイに似てないかい？」

一同に動揺が奔った。

その女の顔はだれにもっとも似ているかと問われれば、ケイに似ていたのだ。

優しい顔つきで謎の女は、アカツキを澄んだ眼差しで見つめた。

「『酷い顔をしちゃって、アカツキったらもお』」

声は何重にも響いている。

そして、謎の女はシキへ顔を向けた。

「『久しぶりですね愁斗』」

また声は何重にも響いたが、口調がまったく別人だ。

最後に謎の女は驚いた顔をして炎麗夜の元へ飛行した。

「『炎麗夜さん！ あたしどうしちゃったんですか！？』」

「やっぱ……ケイなのかい？ どうしたっておいらに聞かれても…

…」

その姿を見て戸惑うばかり。

急にケイは凜とした表情で バベル を見上げた。

「『これには複雑な事情があるのです。今はそれよりも、これを破壊しなければなりません』」

その声は三重に響いていた。三人の声が重なっているのだ。

「『久しぶりですねゼクス』」

《まさか君はノインなのかい？》

「『その人格もこの中にあります。だからこそ、貴女たちのやろうとしていること止めなくてはなりません。私たちの戦渦に人間を巻き込んではいけません』」

《この星に文明を築いたのは、人間よりもボクラソエルが先というのが大数意見だケド？》

「『そのエゴで何度世界を崩壊に導いたのですか』」

《ノイン……君はセーフィエルのようにソエルすべてを裏切るんだね》

バベル からプラグが矢のように放たれた。

ケイは瞬時に防御態勢を取ったが、プラグは真横を通り過ぎ、シキに向かって奔っていた。

狙いはシキだったのだ。

「しまっ……た……」

呻いたシキに刺さったプラグがなにかを吸い出す。それは瞬く間の作業だった。

プラグはすぐに本体へと戻ろうとする。

ケイはプラグを掴もうとしたが、手の間を擦り抜けてしまった。

《やはり紫苑君が隠し持っていたんだね！》

歡喜するゼクス。

シキは地面に膝を付いて、顔を上げた。

「母さんすみません……今奪われたのは 光子子 自身の アニマの欠片です」

「『なんですって!?!?』」

大地を揺るがす地響き。

バベル を中心にして大地に亀裂が奔った。

「今すぐあれを破壊しなければ！」

「任せときな！」

そう叫んで炎麗夜が素手で巨大な バベル に突進した。

「昇天樂園爆裂拳！」
エクスタシー(フンコンボ)

超乳を揺らしながら殴る蹴るの連続技で、炎麗夜は バベル に攻撃を与えた。

だが、相手は塔だ。

「うおりゃああああつ！」

最後に炎麗夜はオーバーヘッドキックで バベル を蹴った。たかが人間ひとりの力で塔が蹴り上がるはずがない。

しかし バベル は宙に浮いた！

そして頂から迸る光を噴き出したのだ。

見届けていたマツハは啞然とした。

「す……素手で倒したのか？」

それは違った。

遙か遠くの大地で爆発が起きた。それも一つ二つの爆発ではない。各地で巨大な爆発が起き、巨大なキノコ雲が空に舞い上がった。

モーリアンの全身から力が抜けた。

「魔都エデンが滅びた」

それを成したのは バベル の頂から迸った破壊光線だった。

バベル が一瞬にして、魔都エデン、そして周辺の村や町を滅ぼしたのだ。

各地から光の玉が バベル に向かって飛んでくる。

「見えるかな君たち、周辺の都市にいた人間たちが死に ソエルの欠片 が回収される。こうやって過去に散り散りになってしまったものを、再び バベル に集結させるんだ。アカツキ君に回収させていたもの比べれば粗悪品だケド、量で質はまかなえる。豊満な胸を持つ人間に ソエルの欠片 は多く含まれているケド、ソエル

の欠片 はすべての人間が持っているんだ。人間はソエルの粗悪な凡庸品なのだからね!」

事態は最悪の方向に転がり続けている。

モーリアンがマツハとネヴァンに命じる。

「状況は変わった、任務を放棄して撤収する!」

モーリアンとマツハは同じ方向に向かって飛行した。だが、ネヴァンはそれとは真逆の方向に舞い上がった。

「政府はもう滅びたのよ。その方向に戻る必要があつて?」
それにモーリアンが反論する。

「私たちが仕えているのは政府ではなくマダム・ヴィーだ」

「そのマダム・ヴィーとも連絡が取れない状況だわ。アタシの通信機が壊れただけかしら、二人の通信機も繋がらないのではなくて?」
ネヴァンの指摘通りだった。

ためにマツハがモーリアンに通信を送ると、この間での通信は通じた。

ネヴァンは妖しく微笑んだ。

「ここでいったん別ちましよう。これからどうするべきか考え、必要ならまた三人で組めばいいわ。では、さようなら」

ネヴァンは大空を羽ばたき彼方へと消えた。

同じくマツハもモーリアンから離れた。

「アタイもひとり考えてみる。じゃあな、姉さん」

すぐにマツハの姿も見えなくなった。

「私はマダム・ヴィーの生存を確かめる」

モーリアンは魔都エデンに向かって羽ばたいた。

バイブ・カハが消え、残された四人。

聳え立つ バベル を前に為す術もないのか?

空を飛んだケイが動く力もないアカツキを抱えた。

「『引きましよう、今の私たちには太刀打ちできません!』」

ケイはアカツキを抱えたまま、高く飛ぼうとしたが、急に高度が落ちて地面に足をついてしまった。翼の輝きが失われている。

「『この躰での限界のようです……少し休めば……』」

ケイはアカツキを落として、そのまま地面に倒れてしまった。すぐに炎麗夜がケイに駆け寄った。

「だいじょぶかい！ 仕方ない、カイジユー！」

炎麗夜のマントが黄金の巨大猪フレイに変貌した。

すぐに炎麗夜はケイをフレイの背中に乗せた。アカツキは置いていく気だ。

炎麗夜はシキにも気を配った。

「そっちは平気かい？」

「ボクなら心配しないで、カイジユー！」

白銀の大狼フェンリルにシキは跨った。

そして、シキはテンガロンハットを拾い、さらにアカツキもフェンリルの背に乗せた。

あからさまに嫌な顔をする炎麗夜。

「そいつも連れてくのかい？」

「別のケイちゃんの関係者らしいからね」

フレイとフェンリルが走り出す。

地響きを轟かせる バベル。

《ノイン、叛逆をするのなら、君の アニマ も糧とする！》

バベル に巨大な眼が開いた。

刹那、眼から光線が発射されたのだ！

フレイが地面で跳ねて光線を躲した。

「あんなの喰らったらお陀仏だよ！」

「地上災凶最速のヴァナディースの総長なんだから、このくらい余裕でしょ！」

「言ってくれるじゃあないのさ。フレイあんたの雄志魅せておやり！」

一気にフレイのスピードが上がった。これなら逃げ切れる！

シキも急いでそのあとを追った。

遙か後方では不気味な赤黒い バベル が沈黙して聳え立っている

た。

嵐の前の静けさ。

シキの隠れ家の一つである地下シェルター。

ベッドで寝かされているケイは、元のケイの姿に戻っていた。ただ、顔は戻っても、髪の毛の長さや着ている花魁衣装はそのままだ。部屋の片隅ではアカツキが項垂れて床に座っている。下ろした長髪はボサボサで、白塗りのメイクは崩れてしまっていて酷い有様だ。廃人同様だった。

テーブルに置かれた料理を頬張っているのは炎麗夜だ。

「こんな物より骨付き肉が喰いたい！」

「こんな物とかいいながら、ここにある保存食すべて食べる気？」
呆れたようにシキが言った。

料理はすべて保存食だ。缶詰めのバリエーションが多く、その中には肉の缶詰めもあるのだが、炎麗夜はそれでは満足できないらしい。

ベッドから動く音が聞こえた。

死んだようにしていたアカツキが、息を吹き返してベッドに飛び乗った。

「紅華を出せ！」

血走ったアカツキの瞳をケイが見つめた。

「……ぷっ、ひどい顔、ウケル。あははははっ！」

「うるさい、早く紅華を出せ！」

「わかったから、早く顔を洗ってきなさいアカツキ」

声はケイのものだったが、雰囲気少し違った。

「……………」

アカツキは無言でケイを見つめ、しばらくして部屋を出て行った。ベッドから起き上がったケイは、満面の笑みでテーブルに着いた。「お腹すいちゃったあ。このフルーツ缶詰もらいますねっ」

美味しそうにフルーツを頬張るケイを、炎麗夜は不思議そうな顔

で見つめていた。

「元気でなによりだけど、ケイだよな？」

「そーですよ。いろいろわかって吹っ切れて、元気になっちゃいました」

「なにがあつたんだい、ケイの身に？」

「それはアカツキが戻ってきたら話しますね」

ニッコリとケイは笑って、ほかの缶詰めを開けはじめた。

シキは少し重たい表情をして、炎麗夜を真摯に見つめていた。

「ボクのことには聞かなくていいの？」

「話したいなら聞くけど、ワケありませんだろう？」

「ありがとう。いつか話すよ、きつと。姐さんとボクは乳友だからね、あはは」

「いつでもこの乳貸してやるから、飛び込んでいって！」

シキは元気なく微笑んだ。

前のシキなら飛び込むどころか、それ以上のことをしたかもしれない。けれど、今のシキは昔とは少し変わってしまったようだ。

そのことに炎麗夜は拍子抜けした。

「シキなら悦んで飛び込んで来ると思ってたんだが……」

「あはは、ご希望に添えなくてごめんね。大丈夫だから心配しないでいいよ。少し？シキ？という自我が不安定になっただけだから、すぐに元通りのエロリスト・シキに戻るよ」

ニッコリ笑顔でシキは炎麗夜に贈った。

しばらくすると完全に身なりを整えたアカツキが戻ってきた。

顔のメイクは前よりも濃くなっている。髪の毛は下ろしたままだが、先ほどとは打って変わって艶やかだ。服は厚手の女性物を着用していた。

ケイは心配そうな表情でアカツキを見つめた。

「そんなに体調が悪いの？」

「悪くない」

「強がらなくてもいいんだよ。だってその濃いメイクは、体調を隠

すためにしてるんでしょ？」

「うるさい、そんなことより紅華を出せ。貴様の中に紅華がいるんだろ」

そのアカツキの言葉にシキが付け加える。

「ボクの母さんもね」

アカツキもシキもそう確信していた。

いったいケイになにが起きたのか？

これまでアカツキは幾度となく、あの女型　デーモン　を『紅華』と呼んできた。

シキはマダム・ヴィーとの会話の中で、　デーモン　にされたかもしれない母を捜していると語り、マダム・ヴィーは　デーモン　になる前に逃げ出したと語った。

そして、戦いの最中で衣服が破れ、露わになったケイの腰にあった刻印。

すべては一つに結ばれるのか？

一同の視線はケイに向けられていた。

そして、ついにケイが語りはじめたのだ。

「簡単にいうと、あたしをベースにして三人が合体してる感じ？」

その言い方は本人なのに曖昧な表現だった。

周りもそれだけは納得していないようだ。

炎麗夜はシキとアカツキを交互に見た。

「わかったかい、今ので？」

先に顔を向けられたシキが、

「そういう説明が聞きたいんじゃないんだけど」

次にアカツキが、

「詳しく説明しろ」

と、強く言った。

難しい顔をしてケイが唸った。

「ん〜っ、複雑で説明しづらんだけど、まずはあたしと紅華の関係から話そうかな。それはあたしがこの世界に来た理由とも深く関

わってるから」

「早く聞かせる」

アカツキが急かした。

だが、ケイはマイペースだ。

「ちよつと待って、このミカンの缶詰め食べながら、頭の中で話を整理するから」

「いいから早くしろ！」

「アカツキも幼いころから、ミカン好きだったでしょう？ ほら、あ〜ん」

フォークで刺したミカンがアカツキの口元に近付いてきた。

ばつが悪い顔をしてアカツキはそつぽを向いた。

笑ったケイはそのミカンを自分の口に運んだ。

「おいしいのに」

「話が整理できたら話せよ」

そつぽを向きながらアカツキが言った。

ふと垣間見えるケイの違う雰囲気にはアカツキは弱いらしい。

ミカンを食べ終えたケイ。

「さてつと、話の続きしますね」

こうしてケイは再び語りはじめたのだった。

第17章 結ばれるリンガとヨーニ

はじまりはこの世界から。

「あたしの中にいる紅華は、合体したんじゃないなくて、生まれる前からあたしの中にいたんです」

すかさずアカツキが口を開く。

「紅華がああなつてしまったのは二年前だぞ。貴様が生まれる前につてどうということだ？」

それに加えてシキと炎麗夜は、ケイがどこから来たのか、いくつかの可能性を知っている。

「過去から来た可能性が高いんじゃないかな？」

「違うさ、異世界から来たんだろう？」

可能性としては過去から来た可能性が高かった。

しかし、そうだとしても疑問は残っていたはずだ。

生徒証から名前や住所が判明したにも関わらず、そんな人物はおらず身元不明のになってしまった。

その答えをケイは知っていた。

「紅華さんの意識が蘇って、異世界から来たことがわかりました。

あたしは違う世界の一九九九年から、平行世界であるこの世界の一九九九年にやって来ました」

過去から未来へ、未来から過去に戻って昏睡状態になって ノア インパクト 以降消息不明になったのではない。

過去に昏睡状態になって、目覚めたのが現代だったわけでもない。答えは平行世界の一九九九年から一九九九年に移動した。そして

昏睡状態となり、身元不明となった。これで疑問と矛盾がなくなつた。

ただ、新たな問題が出てきた。そこにどうして紅華が関わっているのか？

アカツキは不審そうな顔でケイを睨んでいた。

「あんたの言ってることは理解に苦しむ。だが一〇〇歩譲って、貴様が過去の人間だとして、生まれる前から貴様の中にいたなら、紅華はもつと過去にいなければならない。中にいたって意味がはつきりしていないが……。そもそも貴様が異世界の住人なら、紅華はこの世界の住人だ」

アカツキの話聞きながら、ケイはしきりにうなずいていた。そして、最後に大きくうなずいた。

「今アカツキがいったことは正しいよ」

「俺様をからかっているのか？」

「だから、アカツキがいったことが起きたんだってば」

だれもが首を傾げてしまっている。

ケイは話を続ける。

「ここからはシキさんの母親の、シオンさんの知識で解決できたんですけど、この世界のあらゆるものはバランスで成り立ってるんです。あたしが先か、紅華さんが先か、どちらが先に異世界に飛ばされたのか、それはとても難しい問題です。タマゴが先かニワトリが先かってたとえがあるでしょ？」

話を続けても首を傾げられたままだ。とくに炎麗夜は顔が青くなってきた。

「もつとおいらにもわかるように説明してくれないかい？」

「ええつと、世界と世界を支える天秤があるとします。で、あたしがこの世界に飛ばされたのが先だとします。すると、この世界があたしの分だけ重くなるので、天秤が傾いてしまいます。その天秤はバランスを取るために、この世界からあたしの世界になにかを移します。それが紅華さんだったんです」

ここで突然アカツキがケイに掴みかかった。

「貴様せいで紅華は魂の抜け殻になったのか！」

「すぐにカツとなるのはアカツキの悪いクセよ」

ケイだが、言い方の雰囲気少し違った。

すつと力を抜いたアカツキはケイを離れた。

「話を続ける」

「いわれなくても続けるし、さつきもいったけど、紅華さんが先に飛ばされて、あたしがあとだった可能性だってあるんだから。どっちにしても、どちらのせいでもない不慮の事故だったの」

アカツキを諭したときと雰囲気が違う。こちらがももとのケイだ。

もうアカツキは口を挟んでこないようなので、ケイは話を続けることにした。

「その天秤は空間だけじゃなくて、時間も超越してるんです。あたしの替わりに飛ばされた紅華さんは、あたしの世界の過去に飛ばされたんです。しかも魂だけの状態で。だからこちらの世界では、魂の抜け殻になってたんです。デーモン にされた経由はわかりませんけど」

その経由について、アカツキはなにも言わずにいる。話したくないことなのかもしれない。

さらにケイは続ける。

「紅華さんの魂はあたしのご先祖様に生まれ変わりました。そして、あたしにもその魂の記憶が受け継がれています。紅華さんの人格が出たりしたのは、先祖返りっていうんですか、そういう感じですか。つまり紅華さんが飛ばされなければ、あたしは生まれなかったことになるんです。そうすると、あたしがこっちに飛ばされないから、紅華さんは飛ばされません。ね、どっちが先か難しいでしょう?」

話を聞き終えたアカツキは、静かな面持ちで一粒の涙を零した。

ケイの持つ雰囲気を目の当たりにして、アカツキはすべて信じたのだ。

「俺様は紅華の魂を取り戻すだけのために、今まで生き長らえてきた。だが、もうそれは叶わないんだな」

「あたしに受け継がれてるのは、あくまで断片だから。本物の紅華さんはあたしの世界の過去に行かなきゃ。それも生まれ変わりで本物といえるかわからないけど」

「姿形が変わっても、別の世界で生きて、幸せな人生を送っていたならそれでいい。子にも恵まれ、あんたのような子孫もできたんだ。そういうことは、あんたは俺様の姪のようなものになるのか？」

空気がガラッと変わった。

ケイは頭を抱えた。

「いわれてみればそうだった。こんなオカマ野郎が遠いおじさんなんてえ〜」

炎麗夜も驚いている。

「あれって恋人じゃあなかったのかい？」

シキも同意した。

「ボクもてつきり恋人かと思ってたよ〜」

ここでアカツキが爆弾発言。

「俺様の気持ちはずうだった……紅華姉さんはそう思ってなかったみたいだが。最後まで一線は越えられなかった」

さらにケイが頭を抱えた。

「オカマでシスコンの上イっちゃってる変態が遠いおじさんなんてえ〜」

「悪かったなシスコンで」

アカツキはそっぽを向いた。

ここまでの話でケイと紅華の繋がりには説明できた。

シキは真剣な眼差しになる。

「次はボクの母さんの話をしてもらえるかな？」

それに答えてケイも真剣な表情になった。

「シキのお母さんのシオンさんとあたしは融合しているの。順を追って説明しますね。まず、この世界に飛ばされてきた時点で、あたしは昏睡状態だったんだと思います。それからあのシンさんが教えてくれた通りだと思います」

「スリープ状態で年を取らずに眠っていたんだったよね。ノアインパクト から先は消息不明だったはずだよ」

「飛ばされてからスリープまでに二年くらいあったから、その分は

年を取ってるんですけど。えっと、ノアインパクトのときに、あることが裏で行われてたんです。そのことはシオンさんが詳しく知っていたので、シオンさんがあたしの中で覚醒したときにわかりました。それが 方舟 計画、もしくは火星移民計画です」

「そんな計画ボクは聞いたことがないよ。大がかりそうな計画なんだから、ボクの情報網にも引っかけりそうなのに」

シキの反応にケイはとつても嬉しそうな顔をした。

「だって考えたのはシキのお婆さんなんだから。 光の子 も 闇の子 も出し抜かなきゃいけなかったし。それまでだってシキのお婆さんはスゴイひとだったんでしょ？」

「セーフィエルは……偉大だった。この世界で？彼ら？が表舞台から消えたのも彼女のおかげだよ」

二人が話を進めていると、炎麗夜が割り込んできた。ちなみにアカツキは、もうケイの話から興味を失っているようだ。

「さっぱりわからない。二人だけに通じるような話じゃあなくて、おいらにもわかるように話してくれないかい？」

ケイはハツとした。

「あ、ごめんなさい。ええっと、じゃあ 方舟 計画について話しますね」

話を戻すことにしたケイ。

「元々火星への移民というか、巨大宇宙船である 方舟 は別の目的で造つてたらしいんです。でも ノアインパクト を察知したセーフィエルって人が、当時の帝都エデンにいた人たちを極秘裏に火星に逃がすことにしたそうです。その中にあたしも含まれてたんです、昏睡状態のまま。そして今では、火星で人類とソエルという方々が繁栄してるらしいです」

「ソエル？」

炎麗夜が尋ねてきた。

「宇宙人だと思ってください。その宇宙人たちのせいで、地球でトキオ聖戦や ノアインパクト が起こったんですけど、火星では人

類と共存しています。地球と月にはそれと違うソエルの勢力がいるせいで、人類はまだ迷惑してるんですけど」

「宇宙人ではないんだけどね」

シキがつぶやいたのをケイは聞き逃さなかった。

「炎麗夜さんにわかりやすいように説明してるんだから、シキは黙ってて」

「ボクの母さんとの繋がりを話してくれてるんだよね？」

「もうすぐ出てくるから我慢して」

「ボクへの態度があらさまに変わったよね？」

「じゃあ話を続けますね」

ケイはあからさまにシキの質問を無視して話を続ける。

「火星にいたあたしなんだけど、事故に遭って脱出ポッドで地球に帰って来ちゃったらいしんだよね。正確には墜ちたって感じなんだけど。それを知ったシオンさんはあたしを助けようとしたんだけど、もう遅くて。えっと、シオンさんはずっと地球にいたんです、地球で火星と秘密裏に連絡を取ってたらしいです。でも敵に捕まってデーモン の元にされちゃって」

「デーモン に元にされる？」

炎麗夜が尋ねてきた。

シキとマダム・ヴィーとの会話で過去に説明されたが、もちろん炎麗夜はその話を聞いていない。

難しい顔をしたケイ。

「そこは置いといてもらっていいですか。とにかくあたしは地球に落ちて来ちゃって、死にそうになってたところに、シオンさんが駆けつけて、あたしを助けるために、シオンさんもだいぶ危ない状態だったんですけど、二人で合体してデーモン になることで、生き延びることができたんです」

「はあ？」

炎麗夜はぜんぜん理解できていないようだ。ケイも整理し切れず、説明が不十分でわかりにくいのも原因だろう。それでもシ

キは理解したようだ。

「話してくれてありがとう。母がどういう形であれ、生きている」とがわかってよかったよ」

「おいらはさっぱり」

頭痛でも起こしたように顔をしかめる炎麗夜。

ケイはその顔を見て頭を下げた。

「ごめんなさい炎麗夜さん。また今度わかりやすいように話しますから」

「おいらは悟ったよ」

「なにをですか？」

「乳友には説明なんて不要ってことがさ。おいらは心で理解した！」絶対に理解してない。

それでも炎麗夜が納得しているのならいいだろう。

これでケイと紅華、そしてシオンとの繋がりが説明できた。

三人の繋がりは、なんの因果かさらに広がりを見せ、シキとアカツキがこの場に集った。それはただの偶然か、魂が互いを引き寄せ合ったのかはわからない。

それこそが運命というものだろう。

ケイは三人の顔を順番に見た。

「これからどうする？」

真っ先に答えたのはアカツキだった。

「動けるようになったら、借りを返しに行く」

次に炎麗夜も、

「おいらも端っからそのつもりだよ。あんな塔なんて絶対にへし折ってやるさ！」

最後に残ったシキはケイに見つめられて、大きくうなずいた。

「ボクの使命だからね。人間は人間による人間の道を歩むべきなんだよ」

三人の意見を聞いてケイも同じ気持ちだった。

「もちろんあたしも戦う。前のあたしとは違うから十分戦える。で

も……」

ケイが見つめたのはアカツキだった。

「あたしはアカツキと共に戦いたい」

「俺様は貴様らと一緒に戦うつもりはない。ここに連れてきてもらった礼は言うが、ここから先は俺様ひとりで行く」

「あたしと契約して、アカツキ！」

「なに！？」

ケイは デーモン だった。契約ができるはずだ。

顔を逸らしたアカツキにケイが詰め寄った。

「生身でどうやって戦うの、しかも体中ボロボロなんですよ。あたしと契約すれば、アカツキは戦える！」

「ひとりでも戦える」

「ウソばっか。だって今までずっと一緒に戦って来たんですよ、アカツキのパートナーはあたししかいないんだから！」

「あんたは紅華じゃないんだろ」

「でも、紅華さんの魂はちゃんと受け継いでる。それはアカツキが一番わかっているはずでしょ！」

「……………」

アカツキは押し黙った。

そこに横からシキが口を挟んできた。

「アカツキ、どちらにせよキミはすぐには動けない。明日まで考えてみてくれないかな。ボクはキミの新しい刀を用意しよう。それとできるだけの戦いの準備をする。戦いは明日、敵は強い、できるだけ準備をしたい、だからといって悠長にも構えていられないからね。戦いは明日だ」

「明日まで考える必要はない」

そう言ってアカツキはケイの手を握った。

お互いの掌を溶け合うほどに合わせ、絆を確かめるように指と指を固く絡める。

アカツキとケイは同時にうなずいた。

「フアルス！」

同時に声を出した二人が閃光を放った。

シキと炎麗夜に笑顔で見守られ、アカツキとケイは契約を果たした。

すぐにケイはアカツキの服を捲り上げて、その背中をたしかめた。

そこに浮かび上がっていた刻印。ケイと同じ場所、同じ形の模様。

アカツキに新たなパートナーが生まれた瞬間だった。

第18章 終末

沈黙する バベル。

陽が昇ると同時に戦車が大砲を撃ち、戦いが幕を開けた。

シキが調達してきた無人装甲戦闘車両の上に立つ炎麗夜。黄金の毛皮のマントを靡かせ、先陣を切った。

「喧嘩上等先手必勝！」

炎麗夜が バベル を力強く指差した。

再び大砲が撃たれる。

砲撃を浴びる バベル だが、その外壁には傷一つ付かない。

すでに ムシャ 化しているシキが叫ぶ。

「姐さん無駄玉撃ちすぎだよ！ 脆そうなところを狙って！」

「どこを狙えつてのさ！」

「 バベル がついに動き出した、眼だよあの開こうとしてる眼を狙って！」

沈黙していた バベル だったが、巨大な眼がゆっくりと開こうとしている。あの眼は光線を放った眼だ。

《ゼクスは就寝中です。私が相手をしませ。現在のあなた方が バベル を撃破できる確立は、1パーセント未満です》

バベル の眼が不気味に輝きを集めている。

戦車が咆える。

「撃てーっ！」

炎麗夜が勇ましく叫ぶと同時に、大砲が撃たれた。

だが、砲弾は一步届かないッ！

バベル の眼が光線を放ち砲弾を呑み込んだ。そのまま戦車ごと炎麗夜を消し飛ばす気だ。

炎麗夜に投げかけられた叫び声が、だれの声かわからぬまま轟音に呑み込まれた。

激しい閃光が弾かれるように迸った。

果たして炎麗夜は生きているのか！？

炎麗夜は無傷だった！

戦車ごと炎麗夜を包み込んでいた謎のバリア。

猫耳の娘がそこに立っていた。

「風鈴！」

歓喜した炎麗夜の叫び。

炎麗夜を守ったのは風鈴のバリアだったのだ。

「ただいま戻りました炎麗夜さま。もちろん二人も」

空駆けるペガサスと合体した颯鳴空が、伸びはじめたバベルのプラグを槍で蹴散らす。

「炎麗夜様、あなたというひとは、いつもひとりでどこかに行ってしまうのですから、まったく」

「颯鳴空！」

さらに炎麗夜は歓喜した。

地響きが聞こえた。

大地を揺らしながら巨大な影が走ってくる　ベヒモスだ！

《風羅ただいま参上》

「風羅！」

炎麗夜のボルテージは最高潮に達した。

走ってきたベヒモスそのまま　バベル　に突進した。

グオオオオオオオン！

巨塔が揺れた。大砲すら効かなかった　バベル　が、巨獣ベヒモスの一撃で激しく揺れたのだ。

《損傷ゼロ。戦力が増しても、まだ　バベル　を撃破できる確立は三パーセント未満です。無駄な抵抗は時間の無駄でしかありません

ッ！》

さらにベヒモスは強靱な下顎から伸びる長い犬歯で、　バベル　に噛み付いた！

鋭い牙は　バベル　の外壁を突き破ったのだ。

シキは微笑んだ。

「よかった彼女たちが間に合って」
つぶやいてシキは、武器となったプラグの群れに立ち向かっていった。

戦いが繰り広げられる中、まだ二人は動いていなかった。

真剣な眼差しでケイはアカツキを見つめた。

「あたしたちも早く戦おうアカツキ！」

「俺様に命令するな」

「いいから早く！」

「あと少し……：：：氣は読んだ。　ファルス　合体！」

「ちよついきなり！」

宙に浮かんだケイの服が弾け飛び、巨大な翼を広げるように両手を伸ばし、優しくアカツキの躰を後ろから抱きしめる。

自然とアカツキの服も滑り落ちるように脱げていた。

紅い布が躰に巻き付き、その白い肌を紅く彩っていく。

やがてそれは花魁衣装へ変貌する。

紅で飾った淫らな口元が艶やかに微笑む。

首筋は長く伸び、はだけた襟元から覗く鎖骨と肩。

背中で輝く妖しい骨の翼から、夢うつつな光球が零れ落ちる。

艶やかな黒髪が、湯気のように舞い上がりながら、燦然たる黄金に輝きはじめた。

その髪はまるで菩薩の後光か光背か、金色こんじきの輪を描いた髪がかんざしで飾られ、さらに炎が渦巻くような二重の螺旋が天に伸びた。

振り払われた刀に炎が宿る。

紅い瞳が　バベル　を見据えた。

「斬る！」

天翔るアカツキが　バベル　に向かった。

「飛天炎舞千手観音！
ひてんえんぶせんじゆかんのん

残像を描いて見える幾つもの腕が　バベル　を斬って斬って斬りまくる！

バベル　の外壁に次々と斬撃は刻まれていく。

《機体損傷。装甲を切り離します》

《アハト！ ボクに代わるんだ、ゲームはボクのほうが上手い！》
《了解しました》

バベル の操縦者がアハトからゼクスに交代した。

《さあ、ここからはボクが相手だ。と言いたいところだケド、少々時間をもらいたい》

沈黙する バベル 。

不気味な沈黙に先になにかがあることは間違いない。

ヒビモスが再び バベル に噛み付いた。

これを合図に総攻撃が開始された。

黙する バベル が再び動き出す前に片を付ける！

アカツキの刀が業火を噴き出した。

「喰らえ！」

「スperlプラス 『な〜んちゃって』」

「灼熱地獄斬りな〜んちゃって!？」

必殺剣を魅せようしていたアカツキが、思わずバランスを崩して宙を斬った。

上空にいた颯鳴空がその影を地上に捉えた。

「バイブ・カハのネヴァンな〜んちゃって！」

自分の口について出た言葉に、颯鳴空は精神的なダメージを受けて、その隙を突かれ鞭のように撻るプラグに打たれた。

地面に叩きつけられた颯鳴空に槍のようなプラグが襲い掛かる。

その場に駆けつけた風鈴が叫ぶ。

「かばう な〜んちゃって！」

バリアが発動された次の瞬間に消えた。

「きゃあっ！」

風鈴の肩を貫いたプラグはそのまま、颯鳴空の下半身であるペガサスの翼を貫いた。

「ぐあっ！」

朱く彩られた戦場を見つめながら微笑むネヴァンの姿。

木を積み上げるように形作っていく。

《不要な要素の排除と 光の欠片 の融合には、年単位の時間がかかる。女帝ヌルの意識が蘇り、その真の力を取り戻すまでには時間がかかるんだ。しかし、この バベル はすでに破壊神の力を得たのさ！》

最後まで積み上げられた黒い箱は、白く輝き巨大な女の顔になった。

巨大な塔から女へ。

シキがつぶやく。

「女帝ヌル 光の子 の顔」

「そして、 闇の子 の顔でもあるわ」

突如として紅いベールに包まれた車椅子の女 マダム・ヴィーが現れた。

その傍らにはモーリアンが仕えている。

「別つとも、我らがバイブ・カハである限り、再び集う運命にあるのか」

しかし、目的は違う。

ネヴァンは復讐のために。

マツハは己の腹いせのために。

そして、モーリアンはマダム・ヴィーと共になにをする？

「敵は私が引きつけておきます。 死の荒野 ！」

一瞬にしてフィールド内に閉じ込められた。

外にいるのはマダム・ヴィー、ヒビモスを操る風羅、そしてアカツキだけだった。

颯鳴空が蹄を立ててモーリアンに立ち向かう。

「借りを返すぞモーリアン！」

「望むところだ誇り高き騎士よ」

フィールド内で戦いが始まり、外ではベヒモスがフィールドの壁に激突するが、まったく効果がないようだ。

《まるで風鈴のバリアと同じだ！》

舌を巻いた風羅。

アカツキはフィールド内のことなど構いはしない。

「火剣突ひけんつき！」

バベルの眉間を刀で突く。

「ッ！」

刀が刺さらない！

刹那、バベルが放った覇気が輝く爆風となってアカツキを吹き飛ばした。

戦いの陰でマダム・ヴィーは計画を進めていた。

「ファルス 合体」

マダム・ヴィーの肩から伸びる蠍の腕、臀部からは毒針のついた尾が生えた。

ムシャ 化したマダム・ヴィーは、車椅子ごと空に飛び、空中で車椅子を捨てて バベルの頭上に飛び乗った。

そして、毒針を バベルの脳天に突き刺したのだ！

「寄生！」

マダム・ヴィーと デーモン スコーピオンの ムゲン が発動された。

嗚呼、マダム・ヴィーが溶けていく。

溶けて バベルに吸いこまれ、融合を果たそうとしているのだ。

《制御が……あれっ……なに……ザザッザザザ》

ゼクスの声が途切れ、

《嗚呼あん絶倫……素晴らしいわ、この世の神に相応しい力だわ！》
半ば喘ぐようなマダム・ヴィーの声が聞こえてきた。

バベルの顔もいつしかベールに包まれていた。その先にある素顔は不明だ。けれど、もはやそれは バベルではない。

破壊神ヴィー。

《さあ、踊りなさい。嘆きの大地！》

激震と共に大地を奔った巨大な亀裂。

逃げ遅れたヒビモスの下半身が呑み込まれた。このままでは風羅

まで深い裂け目に落ちてしまう。

《ヒビモスから離脱》

風羅の声が途切れ、ヒビモスは深い闇に呑み込まれていった。
炎麗夜は拳を握り締めた。

「だいじょぶさ、おいらはおいらの道でまた帰りを待ってるさ！」
決意を固めた拳で炎麗夜は、マツハに殴りかかった。

マツハはフィールドに閉じ込められ、バベルと戦うことができなくなり、モーリアン側に付いたのだ。

フィールドの外ではアカツキと破壊神ヴィーが対峙していた。

しかし、破壊神ヴィーにとって、アカツキはあまりに小さき存在。
眼中になどなかった。

《不条理な天罰！》

もの凄い音と共に巨大な雷がフィールドを破壊した。

モーリアンですら、もう仲間ではない。いや、マダム・ヴィーにとっては、はじめから仲間ですらなかったのだろう。

《清浄なる大洪水！》

破壊神ヴィーによって召喚された大洪水が大地を洗い流す。

あまりに一瞬のことで、空を飛べるモーリアンやマツハですら、津波に巻き込まれ大地の亀裂に呑み込まれてしまった。

空を飛べない炎麗夜やシキや風鈴、翼が傷ついていた颯鳴空は、
為す術もなく同じ運命を辿った。

空高く舞い上がっていたアカツキだけが、ただ独り残ったのだ。
いや、アカツキはケイと共にある。

「行くぞケイ！」

『行くよアカツキ！』

アカツキの脳に直接響いたケイの声。

業火を宿した刀が薙ぎ払われる。

「ウアアアアアアッ！」

アカツキの斬撃が破壊神ヴィーのバールに当たった。

ガギイイイイイン！

甲高い衝突音。

破壊神が妖しく微笑んだ。

《その程度でわたくしを感じさせられると思って。心の叫びを見せなさい。宴はまだまだこれからよ》

ズオン！

衝撃波によってアカツキの躰が吹っ飛ばされた。

「くっ！」

『きゃっ！』

アカツキと合体しているケイにもダメージがある。

すぐに体勢を整えたアカツキが刀を握り直して切り込もうとした。

だが、破壊神ヴィーに異変が起きた！

変形する、再び黒い箱が動きながら変形している。

一つ一つの黒い箱が収縮して、つなぎ目もなく生物の形を成していく。

恐怖を通り越し、崇高なほどの威光。

莊嚴の輝きを放つ六対の翼。

中性的な裸体と顔立ち。

造形の頂点を極めたその存在だったが、その者には片脚が無かった。

亀裂から這い上がってきたシキが戦慄く。

「光の子 間違いない……けど脚がない。あれはマダム・ヴィーなのか」

巨大なマダム・ヴィーの顔から、人の大きさになったその存在は、果たしてなにか？

それを象徴するのは、ルージユが描くあの艶笑。

「これがわたくしの完全体よ。バベルとは魂の器、つまり光の子の肉体再生装置でもあったのよ。けれどこの肉体を操るのこのわたくしだけけど、うふふふふふ」

破壊神マダム・ヴィー。

亀裂から生還したのはシキだけではなかった。傷一つ、泥一つし

ていない炎麗夜。

「あんたがだれかなんて知ったこつちゃあないんだよ。早い話がぶつ飛ばせばいいんだろっ！」

猪突猛进！

「うおおおおお、究極の美！」アルティメットビューティー

炎麗夜は破壊神ヴィーの顔を殴った。それはなんの装飾もないストレートパンチだった。

眉間に拳を受けた破壊神ヴィーはびくともしない。

「貴女は美しさのなんたるかをわかっていないわ。美しいとはこの脚のようなことを言うのよ」

それはミロのヴィーナスにしっかり、サモトラケのニケにしっかり、無限と夢幻の想像によって補充される美。

無いはずの脚が大きく振られ、衝撃を受けた炎麗夜が大きく吹き飛ばされた。

炎麗夜がやられたと同時に三つの影が飛び出した。槍による颯鳴空の正面からの攻撃。

「炎麗夜様によくも！」

姉妹は両側から鉤爪と手裏剣で攻撃を仕掛けた。

「この風羅ちゃんが相手だよ！」

「後方支援はわたしが！」

破壊神ヴィーは魔性の笑みを浮かべた。

「弱さは罪ね」

柔肉を貫いた破壊神ヴィーの腕。

颯鳴空と風羅が一瞬にして串刺しにされていた。

腕に二人をぶら下げたまま、破壊神ヴィーは颯鳴空の槍を奪い風鈴の腹を突き刺した。

炎麗夜の瞳から零れた熱い涙。

「よくも乳友をおおおおおおっ！！！」

頭に血を昇らせた炎麗夜が破壊神ヴィーに突進する。

だが、その身体は後方からの鎖によって制止させられた。

「ボクがやる　傀儡士の最高秘術、この召喚コウルを見るがいい！」
シキの手から輝線が奔った。それは妖系ようじだった。妖系が放たれた一瞬、エネルギーの奔流が視覚で捉えることができ、シキの四肢から伸びる幾本もの妖系が見えた。

妖系は空間に一筋の傷をつくった。その傷は唸り、空気を吸い込みながら広がり、空間に裂け目をつくる。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

裂け目の　向う側　から　それ　の咆吼が聞こえた。

世界を震撼させる咆吼は、得体の知れない黒い羽虫を呼び寄せ、それを一掃するかのごとく、裂け目から巨大な光線が放たれた。

光線は破壊神ヴィーを呑み込んだ。

しかし、無傷。

「今のは少し感じたわ」

まだ終わらない。裂け目の向こうから赤く巨大な手が飛び出し、破壊神ヴィーの全身を握りつぶそうとした。

グドボオン！

巨大な手が爆発して肉片が四散した。

耳にただけ気が狂いそうな絶叫が木霊し、手を失った巨大な腕が裂け目の中に還っていく。

シキが地面に膝をついた。

「このボディでは……操り切れない」

糸が切れたように倒れそうになったシキに、さらなる追い打ちが！
破壊神の手にエネルギーが集まる。

「カマイタチ」

薙ぎ払われた手から風の刃が放たれ、シキの首を撥ね飛ばした。

血は出なかった。

転がったシキの頭部はアカツキの足下へ。

「このボディは義体だから心配ないでケイちゃん。でも本体へのダメージも大きくて、スペアの義体はもうない。あとは任せた……よ

……アカツキとしつかりやってね」

その頭部は眼を開けたまま、もう口も聞けなくなった。怒りに燃える炎麗夜が単身で破壊神ヴィーに殴りかかる。

その姿を見ながらも、アカツキは別の方向へと急いでいた。

地面に横たわる三人娘。まだ息はあるが、助かる見込みはなさそうだ。三人は朱い海に沈んでいた。

アカツキは颯鳴空の躰を起こし、その唇に接吻をした。

それはケイにも感じられた。温かいエネルギーがアカツキの躰に吸収されているのがわかる。

そして、颯鳴空は完全に息絶えた。

アカツキは急いで残りの二人とも接吻を交わし、その アニマを自分の躰に取り入れたのだ。

「ごふっ」

アカツキの口から赤い塊が出た。

「だいじよぶ!?」

「案ずるな。肉体は衰弱しようとも、彼女たちと共に戦える」

刀を握り直したアカツキが炎麗夜を助けに翔た。

炎麗夜はすでに両拳の骨を粉碎させていたが、それでも構わず破壊神ヴィーを殴り続けていた。

「みんなの仇だッ、オララララララッ!」

「炎麗夜退け!」

火炎渦巻く疾風突きを放ったアカツキ。

炎麗夜が躲したと同時に破壊神ヴィーの胸を貫いた。

人間であればそこにある心臓をひと突きにされて即死。

それはもはや人間を越えた存在であることの証明。

「突き刺すところが違うのではなくて? うふふふ、わたくしの子宮はずっと疼いて待っているのよ」

艶やかに笑った破壊神ヴィーは刀を胸に挿したまま、それを持つアカツキの腕を握って骨を粉碎させた。

「グ……アアアアッ!」

痛みに耐えながらアカツキは瞬時に刀を持ち替えた。

「くたばれ！」

『アカツキいったん引いて！』

「うるさい！」

渾身の込めたアカツキは、破壊神ヴィーの胸から腰まで切り開いた。

こんなにも重傷を負わされながら、破壊神ヴィーはアカツキの腕を再び握り、骨を粉碎させたのだ。

「アアアアッ！」

もはやこれで刀も握れぬ。

「嗚呼あん、人間の肉体とは儂く脆弱。だからこそ甚振り甲斐があるというもの。さあ、もつと嘆きなさい」

膝をついたアカツキの頭上を飛び越え、炎麗夜が破壊神ヴィーに怒りの跳び蹴りを喰らわせた。

「脆弱な人間の蹴りの味はどうだい！」

蹴りを喰らった破壊神ヴィーの上半身が地面に落ちた。先ほどのアカツキの一撃で、切り離される寸前で繋がっていた肉体が、炎麗夜の蹴りによって完全に分断されたのだ。

アカツキと炎麗夜は息も体力も尽きそう、動くことができない。目の前ではさらに重傷に見える破壊神ヴィー。だが、まだこの存在は妖しく艶やかで不気味な笑みを失っていないのだ。

「感じたわ、天に昇るほどイキそうになったわ。けど、まだイケない。破滅の流星」

天から星々が墜ちてくる。

世界全土に流星群が墜ちてきた。

人口が密集している町や村が次々と隕石によって破壊される。

ちっぽけなアカツキたちとの戦いは、戯れに過ぎなかったのだ。

この力こそ破壊神。

世界中から飛んできた光が破壊神ヴィーの躰に吸いこまれる。

離れていた上半身と下半身の傷口から触手が伸び、結合しようと

している。

世界中の人々を殺し、その アニマ を手に入れた破壊神ヴィーは、さらなる力を得て復活しようとしているのだ。

「再生なんてさせてたまるかッ！」

炎麗夜が最後の力を振り絞って破壊神ヴィーの躰に飛び乗った。結合しようとしている触手を引き裂き、どうにか食い止めようとするが間に合わない。

両腕を粉碎され、だらりと腕が地面に垂れているアカツキが立ち上がった。

「そいつの弱点は見切った。一族の炎で核ごと消滅させてやる！」それを聞いて炎麗夜は破壊神ヴィーの躰を雁字搦めにした。

「絶対に外すんじゃないよアカツキ！」

「そのまま押さえてろ」

「言われなくてもそうしてるさ！」

炎麗夜は命を捨てる覚悟だった。それに気づいてしまったケイ。

『やめてアカツキ！』

「だれの命も無駄にはしない……地獄炎舞必中剣！」じごくえんがひつちゅうけん

炎を使う一瞬、アカツキの肉体は活性化し、地面に落ちた刀を一時的に再生した腕で拾い、そのまま全身から炎を発しながら刀で突いた。

切っ先は炎麗夜の背中から腹を貫通し、さらに破壊神ヴィーの下腹部を突いた。

炎麗夜の捨て身 だが、破壊神ヴィーはまだ嗤うのだ。

「残念だったわね。気の迷いかしら、わたくしの深いところまで届かなかったわ」

破壊神ヴィーの巻き起こした爆風で、炎麗夜とアカツキの躰が吹き飛ばされた。

腹を押さえた炎麗夜が天を仰いだ。

「しくじりやがって……これだから男は……」

「俺様のせいじゃない、ケイが邪魔したんだ。貴様を巻き添えにすることを嫌がって」

「ケイか……なら仕方ない……ねえ……乳友だから」

炎麗夜の首がガクツと力を失った。まだ微かな息はあるが助からないだろう。

『あたし……』

「あんたがこの女の気持ちを無駄にしたんだ」

『だって、ほかに方法があったはずなのに、どうして……あたしのせいじゃない……あたしのせいじゃ』

「あんたのせいだ」

アカツキはそう冷たく言い放って、息絶えようとしている炎麗夜には優しい口づけをした。

肉体はその命を失い、炎麗夜はアカツキに宿った。

「戦うぞ」

『もう戦えない』

「うるさい。あんたの気持ちなんてどうでもいい。俺様の邪魔だけはするな」

『だってもうみんな……』

「うるさい！」

構わずアカツキは破壊神ヴィーに立ち向かおうとした。

だが、躰が一步も動かない。

ケイと共にあるアカツキは自らの意志だけでは肉体を動かさせないのだ。

拒否するケイの気持ちが上回れば、アカツキはこの場から動くことができない。

「俺様は戦う……戦うんだ……なにがあるうとも！」

一步足が前に出た。

そして、また一步、また一步と進んでいく。

『なんのために戦うの……もう守る人なんていないのに』

「あんたは感じないのか、常に傍にいる彼女たちの魂を！」

アカツキはこんな子だけれど、力を貸してあげてケイちゃん。その声はアカツキには聞こえなかった。ケイの心にだけ聞こえたのだ。そう、ケイの心にいる者の声　紅華の声だった。

『アカツキは独りで戦ってたんじゃないんだね。あたしもみんなと一緒に戦わせて』

「行くぞケイ！」

『うん、アカツキ！』

今のケイは湧き上がる魂の奔流を感じていた。

アカツキの肉体はすでに限界だった。

しかし、その魂はみんなによって守られている。

一つの道しるべに向かつて、成し遂げようとする意志。

アカツキは一筋の光となる。

その全身を輝かせ、夜の終わりを告げる光となる。

紅華がケイとアカツキと結びつけ、ケイが炎麗夜たちとアカツキを結びつけ、すべてが一つの輪となる。燦然と輝く夜明けの輪太陽になるのだ。

花魁衣装がさらなる変形を魅せる！

それこそ魔導装甲機体の真の姿。

破壊神ヴィーは歓喜する。

「嗚呼あーん、わたくしの研究の成果がついに、機体性能的には可能だった第三段階　クリストス　への変形が実現しようとしているのね。わたくしにはわかるわ、だってこんなにも子宮が疼くのですもの！」

大きく広がった花魁衣装は巨大な装甲となり、人型のシルエットを形作る。

まるでそれは全身を甲冑で守られた巨人。

莊嚴たる不死鳥の翼を生やし、さらに背中には光輝を発する後光を備える。

兜からは直接毛が生えており、それはアカツキと同じ黄金の後光二重螺旋！

紅い魔装巨人　その名は自然とアカツキの頭に浮かんだ。

「行くぞ魔装姫神紅華！」

胎内のようなコックピットの中で、アカツキが叫んだ。

全裸のアカツキは、その下半身を機体と融合させ埋もれている。

両手は山なりの柔らかな操縦装置に置かれ、前方のモニターには外の画面が映し出されている。

『心で操縦するんだよ、わかっているアカツキ！』

「言われなくてもわかっている。ケイと俺様は一心同体なんだからな」

『そのセリフいつてて恥ずかしくない？』

「うるさい、敵が来るぞ」

空が妖しく輝いた。

ルビー色のあの光は！

破壊神ヴァーは両手を広げ歓喜した。

「さあ、メギドの火　よ！」

紅い光線が天から降り注いできた。

あれが落ちてくる前にアカツキは決着をつけるつもりだった。

「彼女たちの魂の想いを……姫神華艶不死鳥乱舞斬り！」

巨大な炎の鳥になった魔装姫神紅華が破壊神ヴァーを呑み込んだ。

「アアアアアアアアン！」

甲高い妖女の声が鳴り響いた。

破壊神ヴァーに背を向けて立つ紅華の手には巨大な刀が握られていた。

「このわたくし……恐怖を与えるなんて……嗚呼あん、昇天するーっ！」

そして、刀を振り払うと同時に、破壊神ヴァーの顔が真っ二つに割れ炎上したのだ。

刹那、世界は紅い光に包まれた。

メギドの火　がすべてを呑み込んだのだ。

目を覚ましたアカツキは辺りを見回した。

地面に横たわる裸体の女。会ったことのない女だが、見覚えはな
ぜがある。

洗い流された大地。

そこに破壊神の姿はもうない。

そして、魔装姫神紅華も見当たらなかった。

だが、そこには数え切れないほど多くの人々がいた。

大陸を埋め尽くす人々。

炎麗夜や仲間たちの姿、アカツキが狩って来た女たちの姿、そし
て見知らぬ男女たち。だれも生まれたままの姿で、この場に溢れか
えっていたのだ。

この中でも飛び抜けて豊満な胸を持つ女性が、アカツキに優しく
微笑みかけた。

「アカツキ……がんばったわね」

「紅華！」

子供のようにアカツキは紅華の胸に飛び込んだ。

紅華の肉体はすでに失われていたはず。ほかの者たちの肉体も同
じ。なぜ彼らは復活したのか？

炎麗夜が寝起きのような顔をして、辺りを見回した。

「なんだい天国に来ちまったのかい？」

大地を走る亀裂から巨大な鳥の影が飛び出してきた。

気絶しているモーリアンとネヴァンを抱きかかえたのマツハ姿。

彼女はなにも言わずこの場から飛び去った。だれもそのあとを追う
ことはない。追うこともないのだろう。

それを見た炎麗夜がつぶやく。

「どうやら天国じゃあなさそうだねえ。やつらは確実に地獄行きだ
からね」

ここは破壊神ヴィーとの戦いを繰り広げられた場所に間違いない。
その傷痕も大地に残っている。

しかし、復活した彼らは自分たちになにが起こったのわかってい
ない。

ここに居るのは、巨乳狩りから続く戦い　破壊神ヴィーの糧と
なったすべての人々だった。

何千、何万、何百万という人々がここにはいたのだ。

上空から巨鳥の足にぶら下がって、やって来た一六歳くらいの少女。活発そうな短い髪を靡かせながら、少女はさきほどアカツキの近くにいて、すでに目を覚ましていた女に抱きついた。

「お母さん！」

「しゅう……いえ、今はつかさちゃんかしら？」

「愁斗でいいよ、お母さん。急いで非戦闘用の傀儡くわいで駆けつけたけど、なにがあつたの？」

「すべて終わったのです。支配者を失った　バベル　は、新たな生命を生み出したのです。　バベル　は　光子　の肉体を復活させるためのものではなく、私たちの肉体も再生させたのですよ。そう、火は生命のエレメンツ　　メギドの火　の膨大なエネルギーを使って、奇跡という名の化学反応を起こしたのです」

それを成し遂げたのは想いだ。

切っ掛けは偶然だとしても、奇跡は強い思いが引き寄せたのだ。

炎麗夜は三人娘との再会を喜んだが、その顔は少し晴れない。

「ケイのやつ、どこにいるんだい？」

この人の群れの中から探すのは、砂場で落とした砂金を探すようなもの。

炎麗夜たちのところへアカツキがやって来た。

「ケイは……もうこの世界にいない」

炎麗夜たちはケイを探そうと、走り出そうとした矢先だったが、その足を止めてアカツキの顔を見つめた。

「なぜなら、パートナーの俺様が言うんだ」

哀しそうな顔してうつむいたアカツキは背を向けた。

その背中からは契約の刻印が消えていたのだ。

だが、炎麗夜はアカツキに掴みかかって訴えた。

「あんたも生きてたんだ、ケイも必ず生きてる！　乳友のおいらが

言っただ間違いないさ。あんたもさっさと捜しな！」

その後、ケイの捜索が行われたが、日が暮れても見つかるとはなかった。

明くる日も、明くる日も、ケイは見つからない。

数日後になんでも屋に復帰したシキも捜索に加わったが、なんでも屋の力を持ってしてもケイは見つからなかった。

炎麗夜は二ホン全国を駆け巡ったが、やはりケイは見つからなかった。

そして、炎麗夜は海外を目指した。

その日の夜も彼女は寝る前に日記をつけていた。

あの時から、ずっと習慣になっていた。

いつ世界が滅びるのか、脅えながら毎日毎日、日付を確認しながら、その日にあつた出来事を書き記す。

今日の日付は『二〇一二年七月二十日』と書かれている。

日記の内容はこうだ。

あれからもう何年が経つたのだろう。

高校生だった私も、今では社会人として毎日満員電車で遠くの会社に勤める日々を送っている。

今でもなぜ帰ってこられたのかわからない。

もしかしたら、すべて夢だったのかとも思った。

でも、今でも私の背中には刻印が残っている。このせいでピキニを着れないのはちょっと嫌だ。温泉にも行けない。

だからあの出来事は本当にあつたことなのだろう。

そして、私がこの世界に帰ってきた一九九九年七月二〇日。

その日はなにも起こらずに過ぎ去った。あの世界ではトキオ聖戦が起きたのに、この世界ではなにも起きなかった。その後も、なにも起きない日常が続く。

けど私は怖い。

もしかしたら、いつの日か何かが起こってしまうんじゃないかって。

一九九九年の七月が過ぎ、世間ではノストラダムスの予言が外れたと騒がれた。外れてしまった予言はすぐに忘れられ、あれだけ加熱したブームもすぐに消えた。でも私は知っている。あの世界では予言が当たっていたんじゃないかって。

あんな出来事があったせいで、私はオカルトなどに興味を持つようになった。

二一〇二年の今年、マヤ文明の暦が終わりを迎える。

あの時のような過熱ぶりはないけど、ノストラダムスの予言に代わる終末論として、一部のオカルト関係者からは注目されている。

マヤ文明の暦が終わったとき、『ひとつの時代が終わりを告げる』のだという。それはまさにトキオ聖戦後の世界みたいだ。

私は怖い。

今年がどうか無事に明けますように……。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2629/>

魔導姫譚ヴァルハラ-Mado kitan VALHALLA-

2011年2月7日09時40分発行